

こまちダム遺跡発掘調査報告 1

沢 目 木 遺 跡

2003年3月

福島県教育委員会
興福福島県文化振興事業団
福島県土木部

こまちダム遺跡発掘調査報告 1

沢 目 木 遺 跡



口絵1 2号竖穴状遺構遺物出土状況（南東から）



口絵2 4号竖穴状遺構検出状況（北東から）



口絵3 縄文時代早期の無文土器



口絵4 縄文時代前期末葉の土器

序 文

「こまちダム」は夏井川支流の黒森川流域の小野町菖蒲谷・雁股田地内に建設が計画されている県営の多目的ダムです。

このダム水没予定地内には、先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており、表面調査の結果、数多くの遺跡等が確認されました。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史や文化の正しい理解と、将来における文化の向上発展の基礎をなすものであります。このため、福島県教育委員会では、福島県土木部河川開発課及び県中建設事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね、平成11年度には建設に伴って付け替えられる県道予定地部分の表面調査、平成12年度からは試掘調査を実施し、現状保存が困難な遺跡については記録して保存することとし、平成14年度から調査を実施しました。

本報告書は、平成14年度に発掘調査された小野町雁股田に所在する沢目木遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。同遺跡からは縄文時代早期・前期・晩期～弥生時代前期の遺物包含層が検出されています。

今後、この報告書が県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明する為の基礎資料として、さらには生涯学習の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、この発掘調査に当たり、ご協力いただいた福島県土木部、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成15年3月

福島県教育委員会

教育長 高 城 俊 春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査を行っております。こまちダム建設に関連する埋蔵文化財の調査もそのひとつであり、平成14年度より本格的な調査を開始いたしました。

平成14年度は、ダム建設に伴う付け替え道路予定路線上で工事が優先される小野町雁股田地区の沢目木遺跡と菖蒲谷地区の西田H遺跡について発掘調査を実施いたしました。本報告書は、このうち沢目木遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

沢目木遺跡は、縄文時代の早期・前期・晩期、及び弥生時代前期に営まれた遺跡であることが確認されました。小野町周辺では、近年磐越自動車道や福島空港・あぶくま南道路建設に伴い数多くの発掘調査が実施され、縄文時代の様相が次第に明らかにされており、本報告書も阿武隈高地の歴史を知る上で貴重な資料の一つになるものと思います。

今後、これらの調査成果を考古学・歴史学などの基礎資料として、さらには地域社会の理解や生涯学習の場で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、発掘調査当初から報告書刊行に至るまで、御指導・御協力いただきました関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護・活用について、今後とも一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

平成15年3月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 佐藤 栄 佐 久

用 例

1. 本書における遺構図の用例は、以下のとおりである。

方 位 遺構図・地形図は原則的に南北を軸線とし、真北を上に向ける。これに該当しない場合を含め、図中に方位を示した。図中の方位は国土座標の真北を示す。

縮 尺 縮尺率は遺構の大きさと性格により適宜決定し、スケールの右に示した。挿図中に出土位置を示した遺物の縮尺は、挿図に合わせ決定し、特に縮尺率は示していない。

標 高 標高、水系レベルは海拔高度を示す。

ケ バ 遺構内の傾斜面は a，緩斜面は b で表した。人為的な削平や攪乱範囲などの傾斜面は c で示している。



土 層 遺構外の自然堆積はローマ数字 (L I・L II…)，遺構内堆積土は算用数字 (ℓ 1・ ℓ 2…) で表記した。土色については『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 1997) により判定した。

網 点 挿図中における下記スクリーントーンを用いた範囲は柱痕を示す。



新 旧 重複する遺構の新旧関係については、所属時期の新しい遺構の上端のみを表現した。また攪乱は挿図中に「カクラン」と片仮名表記し、上端線のみで表現している。

2. 本書における遺物図の用例は、以下のとおりである。

縮 尺 縮尺率は遺物の大きさと性格により適宜決定し、スケールの右に示した。原則的に土器は2/5，石器は3/4で表現している。

断 面 土器断面は、縄文土器・弥生土器とも白ヌキとし、胎土に多量の繊維が混和された痕跡には▲を付し、粘土積上げ痕は一点鎖線で表記した。

番 号 遺物番号は挿図ごとに通し番号と，出土位置・層位は番号右の () 中に示した。写真図版中には遺物の右下に挿図番号を付した。

計測値 遺物の計測値については，挿図番号の下位に付記した。

3. 本報告書で使用した略号は，次のとおりである。

小野町……………ON	沢目木遺跡……………SMK	遺構外堆積土……………L
竪穴状遺構……………SX	掘立柱建物跡……………SB	遺構内堆積土…………… ℓ
遺物包含層……………SH	柱 穴……………P	土 坑……………SK

目 次

第1章 調査の経過と方法	1	
第1節 調査に至る経緯	1	
第2節 調査経過	3	
第3節 調査方法	4	
第2章 遺跡の概要	6	
第1節 地理的環境	6	
第2節 歴史的環境	8	
第3節 遺跡の位置と周辺地形	12	
第4節 遺構の分布	13	
第5節 基本土層	15	
第3章 遺構と遺物	17	
第1節 竪穴状遺構	17	
1号竪穴状遺構 (17)	2号竪穴状遺構 (18)	3号竪穴状遺構 (21)
4号竪穴状遺構 (22)		
第2節 掘立柱建物跡	24	
1号掘立柱建物跡 (24)	2号掘立柱建物跡 (25)	
第3節 土 坑	27	
1号土坑 (27)	2号土坑 (27)	
第4節 遺物包含層	28	
1号遺物包含層 (29)	2号遺物包含層 (40)	
第4章 ま と め	43	
第1節 縄文時代早期	43	
第2節 縄文時代前期	51	
第3節 ま と め	53	

挿図・表・写真図版 目次

[挿図]

図1 こまちダム位置図	1	図17 時期別遺物分布状況(1)	31
図2 こまちダムと周辺遺跡	2	図18 時期別遺物分布状況(2)	32
図3 グリッド配置図	5	図19 1号遺物包含層出土遺物(1)	33
図4 周辺地質図	7	図20 1号遺物包含層出土遺物(2)	35
図5 周辺遺跡位置図	10	図21 1号遺物包含層出土遺物(3)	37
図6 周辺地形と遺跡の範囲	12	図22 1号遺物包含層出土遺物(4)	38
図7 遺構配置図	14	図23 1号遺物包含層出土遺物(5)	39
図8 基本土層	16	図24 1号遺物包含層出土遺物(6)	40
図9 1号竪穴状遺構・出土遺物	18	図25 2号遺物包含層範囲	41
図10 2・3号竪穴状遺構	19	図26 2号遺物包含層出土遺物	42
図11 2号竪穴状遺構出土遺物	20	図27 縄文時代早期の無文土器	44
図12 4号竪穴状遺構・出土遺物	23	図28 無文土器出土遺跡	45
図13 1号掘立柱建物跡	25	図29 県内における無文土器の変遷	46
図14 2号掘立柱建物跡	26	図30 縄文時代早期の「小竪穴」	50
図15 1・2号土坑	28	図31 縄文時代前期末の土器	52
図16 1号遺物包含層範囲 ・出土遺物分布状況	30	図32 遺構の変遷	54

[表]

表1 こまちダム周辺遺跡一覧	3	表2 周辺の遺跡一覧	11
----------------	---	------------	----

[写真図版]

図版1 調査後遠景	59	図版12 2号掘立柱建物跡完掘全景	65
図版2 調査区中央～西側全景	59	図版13 1・2号土坑	65
図版3 調査区中央～東側全景	60	図版14 1号遺物包含層完掘状況	66
図版4 調査状況	60	図版15 遺物包含層	66
図版5 1号竪穴状遺構完掘全景	61	図版16 竪穴状遺構出土土器	67
図版6 1号竪穴状遺構	61	図版17 1号遺物包含層出土土器(1)	67
図版7 2・3号竪穴状遺構	62	図版18 1号遺物包含層出土土器(2)	68
図版8 4号竪穴状遺構	63	図版19 1号遺物包含層出土土器(3)	68
図版9 4号竪穴状遺構	63	図版20 1号遺物包含層出土土器(4)	69
図版10 1号竪穴状遺構, 1・2号建物跡, 2号土坑全景	64	図版21 1号遺物包含層出土土器(5)	69
図版11 1号掘立柱建物跡完掘全景	64	図版22 1号遺物包含層出土土器	70
		図版23 2号遺物包含層出土土器	70
		図版24 土器細部	70

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯

こまちダムは、福島県が田村郡小野町大字菖蒲谷地内に建設を予定しているダムである。このダムは重力式コンクリートダムを採用し、堤高60m・総貯水量770,000m³・集水総面積4km²の規模を持ち、右支夏井川の支流である黒森川の洪水対策・流水の正常な機能の維持・水道水の確保を目的とする多目的ダムである。

水没地帯（15ha）における埋蔵文化財の調査は、当初、小野町教育委員会が主体になって平成10年4月7日から8日に表面調査が実施された。調査の結果、周知の遺跡も含めて8遺跡が確認された。その後、平成11年度にはダムを周回する県道小野矢吹線予定路線の区間20haの表面調査を実施し、遺物が表面採集できた地点を遺跡として4ヵ所認定し、また遺構や遺物は発見できなかったが地形的条件から遺跡の可能性が高く、試掘調査を必要とする遺跡推定地を9ヵ所、計13ヵ所を確認した。この調査成果は、平成12年3月刊行の『福島県内遺跡分布調査報告6』に掲載されている。

平成12年度は、このうち遺跡推定地7ヵ所についての試掘調査と湛水により水没する20haについて再確認を含めて表面調査を実施した。表面調査では新たに遺跡推定地5ヵ所が確認され、試掘調査ではB6・9地点で遺構・遺物が検出された。B6では平安時代と縄文時代早期末の集落跡が確認され、要保存面積1,300m²が確定し、堂田A遺跡とした。B9では縄文時代前期・晩期の土坑と遺物包含層が検出され、要保存面積1,600m²が確定し、沢目木遺跡とした。調査成果は、平成13年3月刊行の『福島県内遺跡分布調査報告7』に掲載されている。

平成13年度は、堂田A遺跡と遺跡推定地5地点、及び工事計画の変更になったダムを周回する付け替え道路建設予定地10haの表面調査を実施し、新たに1地点を確認した。堂田A遺跡は付け替え道路の建設予定地が南側に変更されたため、再度試掘調査を実施した。平安時代と縄文時代早期末の集落跡が確認され、要保存面積600m²が確定した。B8は宅地造成予定地内を含めて試掘調査を実施し、縄文時代早・前・晩期の竪穴住居跡・土坑・遺物包含層と平安時

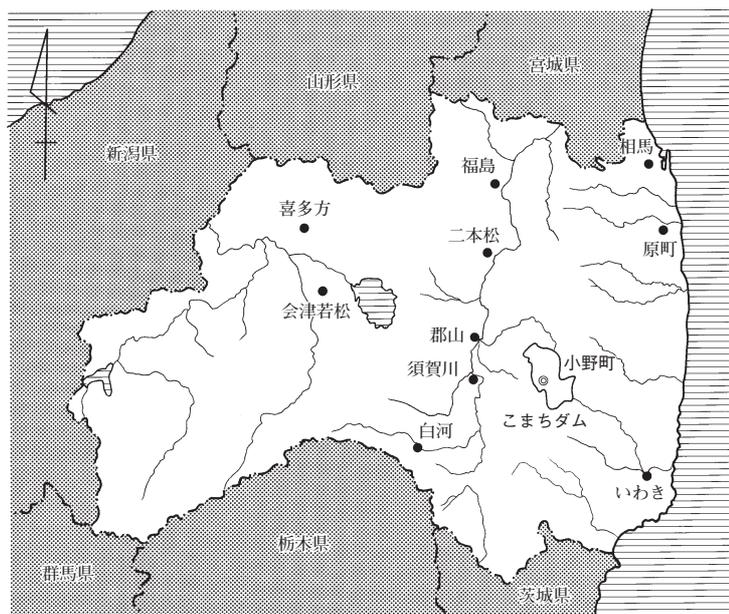


図1 こまちダム位置図

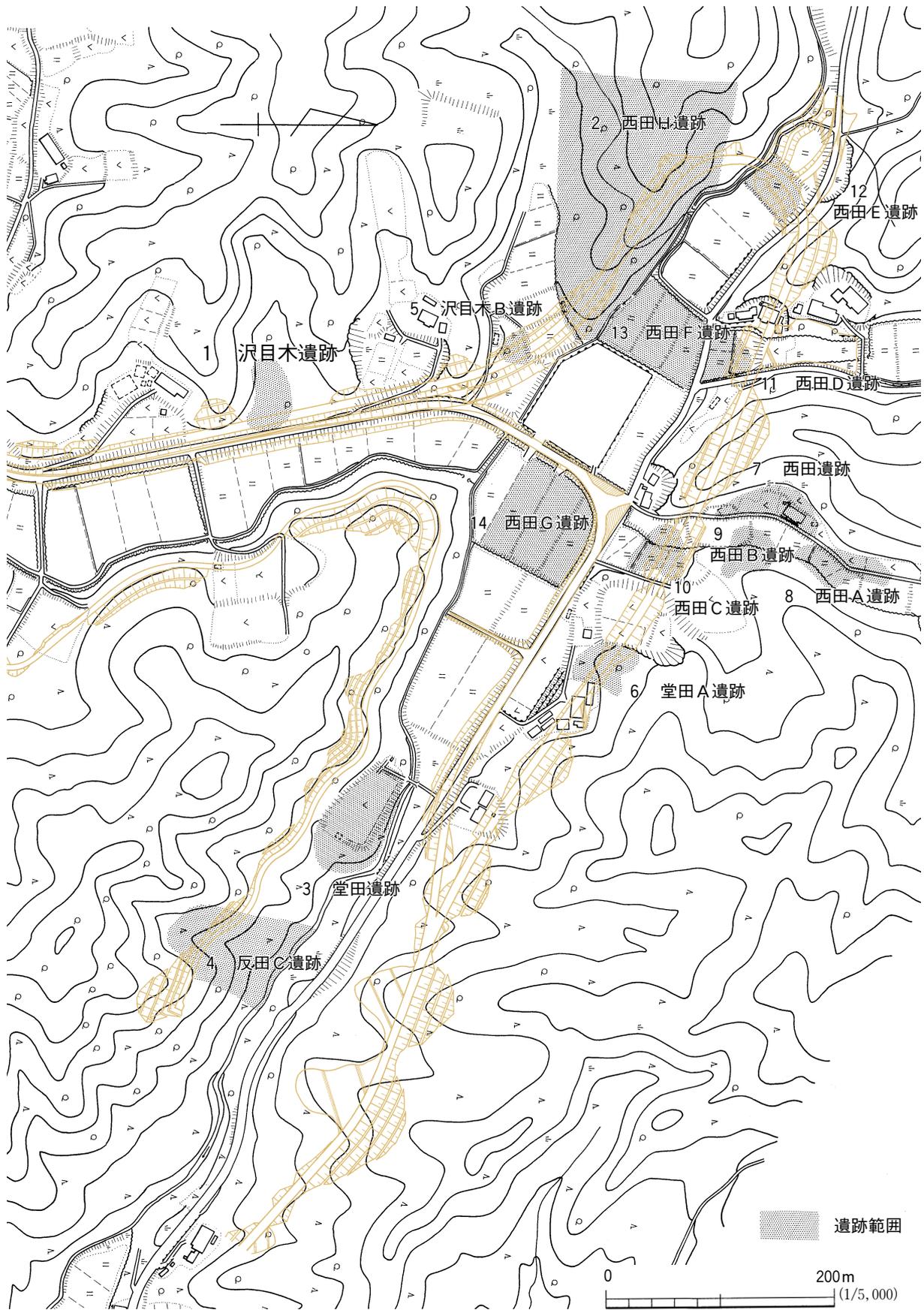


図2 こまちダムと周辺遺跡

代の竪穴住居跡を検出し、要保存範囲7,400㎡が確定して西田H遺跡とした。他の遺跡では、数点の縄文土器や土師器が出土したが、遺構が確認できず工区内での要保存面積は確定しなかった。調査成果は、平成14年3月刊行の『福島県内遺跡分布調査報告8』に掲載されている。(高橋)

第2節 調査経過

沢目木遺跡は平成12年度に(財)福島県文化振興事業団が行った試掘調査の成果により、縄文時代前期・晩期の遺物散布地として登録された遺跡である。平成14年度、こまちダム関連の遺跡発掘調査が開始される運びとなり、沢目木遺跡も発掘調査事業計画に組み入れられた。年度当初、試掘調査の終了している沢目木・西田H・堂田A遺跡の3遺跡について発掘調査を行う計画が立てられたが、3遺跡とも現況が未伐採の山林であったため、伐採が終了し条件整備の整うまで待機することとなった。

5月下旬、沢目木遺跡の伐採が終了したとの連絡が入り、5月27日に調査事務所の設置、発掘器材の搬入など現場立ち上げの条件整備を行った。また併行して重機を導入し、表土の除去作業を開始した。遺跡の東部、県道に面した範囲は厚く盛土されており、法面を設けながら掘削を進めた結果、この範囲から現在の県道が整備される以前の道路跡が確認された。特に北東部は西側の基盤層(地山面)から1m以上削平されており、この範囲に遺構・遺物が遺存する可能性は著しく低く、また作業上の安全面も考慮した結果、深さが3m以上に達した時点で掘削を中止した。

6月上旬、表土除去作業を終了し、作業員を雇用して本格的な発掘作業に着手した。試掘調査において黒色土(LⅡ層)から縄文時代前期及び晩期の遺物の出土が確認されており、遺跡中央～西側を覆うこの遺物包含層の掘り下げから調査に着手した。

表1 こまちダム周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別
1	沢目木遺跡	小野町菖蒲谷字沢目木	縄文早・前・晩期 弥生前期	集落跡・散布地
2	西田H遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文早・前・晩期 奈良・平安	集落跡・狩猟地
3	堂田遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文後・晩期	散布地
4	反田C遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文前期	散布地・狩猟地
5	沢目木B遺跡	小野町菖蒲谷字沢目木	縄文晩期	散布地
6	堂田A遺跡	小野町菖蒲谷字堂田	縄文早期・平安	集落跡
7	西田遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
8	西田A遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文後・晩期	散布地
9	西田B遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文後・晩期	散布地
10	西田C遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
11	西田D遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
12	西田E遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
13	西田F遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
14	西田G遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地

6月中旬、遺物包含層の掘り下げが進捗し、縄文時代前・晩期の他、縄文時代早期や弥生時代前期の遺物もまばらながら出土が認められた。道路建設のため削平された遺跡南東隅の狭い範囲には僅かに黒色土が遺存し、層中から遺物が出土するため、この範囲を2号遺物包含層、遺跡中央～西部の範囲を1号遺物包含層と呼称することとした。また、地山漸移層(LⅢ)まで下げた範囲では竪穴状遺構や土坑などの遺構が検出され始める。6月20日、1・2号遺物包含層の掘り下げが完了し、地形測量を行った後、この範囲の全景写真撮影を行う。

6月下旬にはLⅢ上面において検出した遺構の精査を終了し、遺物の有無を確認するため地山漸移層であるLⅢに数本のトレンチを入れる。その結果、LⅢ層は無遺物層であることを確認し、調査期間の短縮を図るため重機を再投入してこの層を除去した。最終的な遺構検出作業の結果、LⅢ上面で確認しえなかったものを含め、遺構数は竪穴状遺構4基、掘立柱建物跡2棟、土坑2基と確定するに至る。また、この時期に西田H遺跡では立木伐採の進展により調査が可能となったため、重機による表土除去作業を開始した。

7月上旬、遺構精査が本格化する。3基の竪穴状遺構からは無文土器が出土し、この種の遺構が縄文時代早期前葉、撚糸文系土器併行期に属する可能性が高くなる。7月12日にはすべての遺構精査及び地形測量を終了し、遺跡全景の写真撮影を行った。また調査事務所の撤去や発掘器材の搬出も行い、調査員・作業員は西田H遺跡の発掘調査に移行した。

週明け7月15日には、福島県土木部県中建設事務所に対し、福島県教育庁文化課から現地の引渡しを行い、沢目木遺跡発掘調査全工程を完了した。その後、安全面を考慮し、遺跡東部については一部を埋め戻している。調査開始から現地引渡しまでに要した期間は延べ50日間であった。

なお、11月下旬には西田A・B・D・E・F・G・H遺跡、及び遺跡推定地4カ所(B-14～17)の試掘調査を行っている。この結果、B-15・16においては遺構・遺物が検出され、それぞれ反田C遺跡、沢目木B遺跡として登録した。また西田H遺跡の遺跡範囲も広がることが確認された。試掘調査の結果についての詳細は『福島県内遺跡分布調査報告9』(2003)で報告されている。

(横須賀)

第3節 調査方法(図3)

沢目木遺跡は南北約40m、東西約65m、面積1,600㎡を測る範囲である。調査で用いた測量座標の設定は、国土座標IX系の座標値を有する設計杭を基準とした。今回の調査では、任意に調査区北側の地点[X; 141,930・Y; 66,450]を測量原点に定めた。座標値は測量原点の下3桁を利用し、原点はS930・E450、東方向へはE460・E470・E480…、南方向へはS920・S910・S900…と表記する。グリッドの設定は調査区内を東西南北5mの幅に区切り、原点から東にA・B・C…、南に1・2・3…と呼称した。グリッド名はこの組み合わせによりA1・B2・C3などとなる。なお測量原点を調査区外に求めたため、東方向A～E、南方向1・2というグリッドは使用していない。

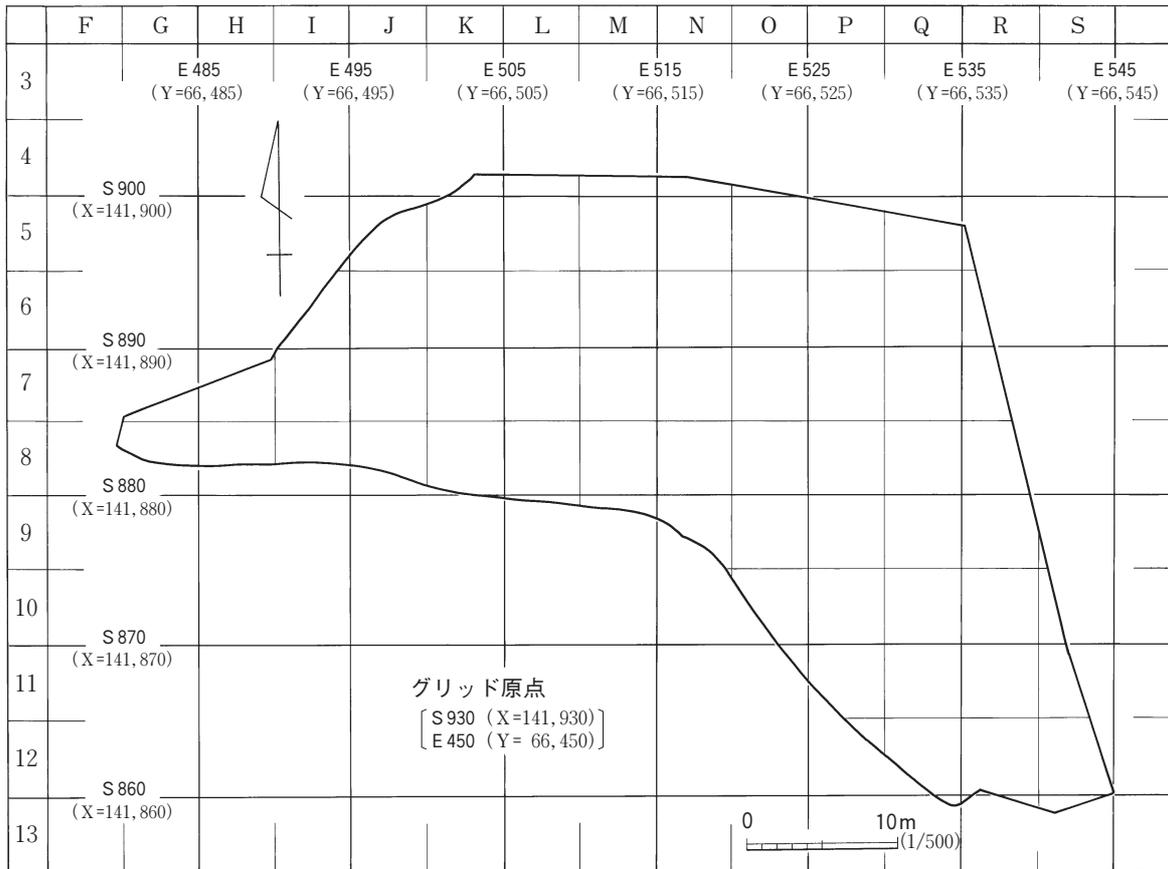


図3 グリッド配置図

堆積土の土層番号は、遺跡の基本土層をLとローマ数字、遺構内堆積土をℓとアラビア数字の組み合わせで表記した。調査区内における堆積土の掘り込みは、表土及び盛土(L I)は重機を用いて行った。また地山漸移層(L III)についても、数箇所にてレンチを入れて無遺物層であることを確認した上で、重機による除去を行っている。遺物包含層としたL IIについては、包含する土器や石器などの遺物の検出に留意しながら人力により掘り込んだ。遺構の掘り込みは、原則として掘立柱建物跡の柱穴や土坑については2分割、竪穴状遺構には土層観察用のベルトを設定し、それぞれ上位の堆積土から掘り下げている。

遺物の取り上げは、原則的に出土位置と層位を記録し、適宜写真撮影を併行して行っている。記録写真撮影は35mmの小型カメラと、必要に応じて6×4.5cmの中型カメラを使用し、フィルムはモノクロ・カラーリバーサルを併用している。実測記録は前述の測量座標を用いて、遺構を1/20、地形測量図を1/200の縮尺で作成した。

沢目木遺跡の発掘調査によって得た調査記録・出土資料などは、当事業団が定めるところの整理基準に沿って整理し、報告書が完成した後、福島県教育委員会に移管している。(横須賀)

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

沢目木遺跡は、福島県田村郡小野町に所在する。福島県は県内を南北に走る奥羽山脈・阿武隈高地などの山地山脈により大きく3地域に分けることができる。太平洋に面した「浜通り」、阿武隈高地と奥羽山脈に東西を区切られ、中央を阿武隈川が北流する「中通り」、奥羽山脈から西側全域の「会津地方」である。

小野町は阿武隈高地のほぼ中央、中通りと浜通りのほぼ中間に位置する。小野町の面積は125.11 km²、人口は12,468人（平成13年10月現在）である。周辺市町村は、東にいわき市、西に郡山市と境を接し、北に田村郡船引町・大越町・滝根町、南に石川郡平田村という位置関係となる。町の東部に矢大臣山（964m）、北西部に黒石山（896m）・高柴山（884m）、西部に一盃山（856m）・日影山（879m）、南西部に十石山（718m）などの山々が連なり、隣接する市町村との境界をなしている。小野町の中心部には右支夏井川が南東方向に向かって流れ、町の西側山地を水源とした車川・黒森川・十石川などの諸支流が流れ込む。標高480～560mの丘陵地はこれら小河川により開析され、その裾部や埋没谷底平野は集落や田畑として利用されている。

小野町の地質（図4）は花崗岩類を主とした深成岩類を主な基盤層とし、一部現河床に沿う段丘上や埋積谷などに未固結の第四紀堆積物が分布している。深成岩類は北西端の黒石山周辺の狭い地域にはんれい岩、小野新町西部を除くほとんどの地域に分布する古期花崗岩類（片状花崗閃緑岩、黒雲母角閃石花崗閃緑岩）、町の北西部、日影山～高柴山周辺に分布する新期花崗岩類（黒雲母花崗岩、桃色花崗岩）に大別される。未固結の第四紀堆積物は、腐植土との漸移層である暗褐色土壌、及び褐色火山灰層、帯黄褐色火山灰層などが認められる。

気候区分は、海洋性気候の浜通り南部と内陸的気候の中通りとの中間に当たり、季節風の影響により非常に変化に富んだ気候を醸成する。また阿武隈高地内の内陸盆地であるため、厳冬酷暑の厳しい環境となり、年変化、日変化が大きい。冬季は雪量が少ないものの、寒さは厳しく降霜や氷結することが多い。夏季は山間部特有のフェーン現象が起こることが多く、雷雨や降雹が多発する地域となっている。またこの季節にオホーツク海高気圧の勢力が強いと、異常低温が続き、北東の冷たい季節風（山背）が吹きつける。年平均気温は10.9℃、年間降水量は1,294mmである。

小野町が位置する阿武隈高地の現在の植生（極相）区分は、冷温帯夏緑広葉樹林帯下部にあたり、温暖帯広葉樹林帯上部への推移地帯に位置している。標高700.0m付近を境にして、山地にはミズナラ林、丘陵や平地にはコナラ林が発達している。また近年までは林業も盛んであり、植林によるスギ林も数多く分布する。沢目木遺跡の標高は480m前後であり、現況はコナラ・クヌギ・スギなどの山林となっていた。（横須賀）

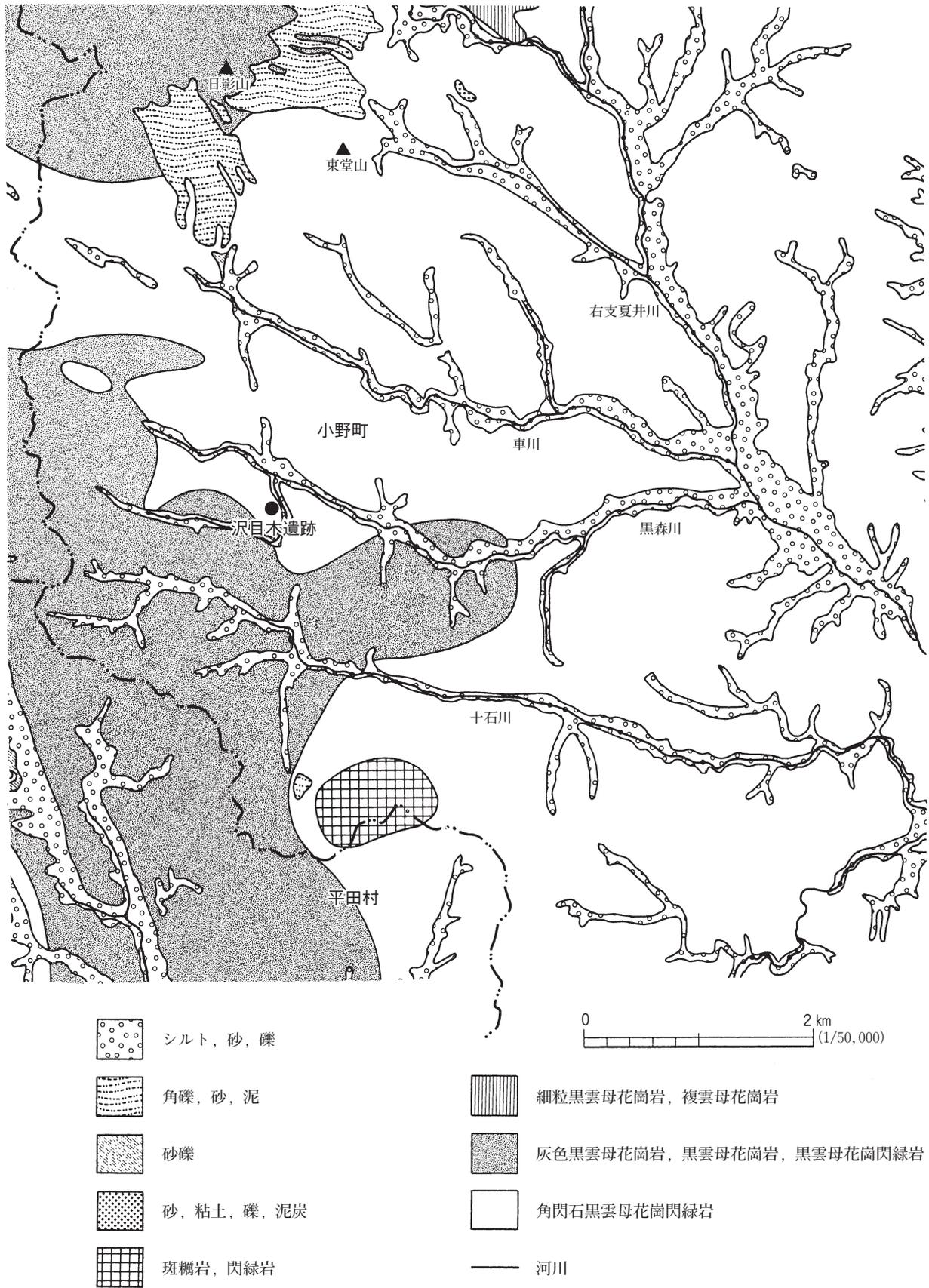


図4 周辺地質図

第2節 歴史的環境 (図5・表2)

小野町内における歴史的環境を『福島県埋蔵文化財地図及び一覧表』(1984・10刊行)、『福島県遺跡地図』(1996・3刊行)、最近の文化財調査報告書を参考に概観していく。『福島県遺跡地図』で町内には117ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。また、平成4年から平成5年にかけて磐越自動車道建設に関連する10遺跡の発掘調査が実施され、報告書も刊行され多大な成果を上げている。以下時代ごとに記述を進める。

町内ではまだ旧石器時代の遺構・遺物は発見されていない。縄文時代になると、遺跡数は爆発的に増加する。この中には、縄文時代草創期に属する御子柴系尖頭器(石槍)が出土した猪久保城跡、早期前半の稲荷台式系土器が出土した小滝遺跡・鴨ヶ館跡、日計式押型文系土器が出土した柳作B遺跡がある。中葉では田戸下層式期や常世式期などの貝殻・沈線文系土器が出土した小滝・糀内・長久保・柳作B遺跡・鴨ヶ館跡などがある。後半期になると鍛冶久保・糀内・畑ヶ田・葎作遺跡や鴨ヶ館跡で土器片と共に竪穴住居跡などの遺構が発見されている。鍛冶久保遺跡では茅山下層式期の竪穴住居跡、鴨ヶ館跡では大畑G式期の竪穴住居跡が検出されている。この他に早期と考えられる落とし穴状土坑が鴨ヶ館跡・糀内・鍛冶久保遺跡で検出されている。

前期では小滝遺跡がある。この遺跡では大木2b・4・6式期の東北系土器と浮島I・III式期と諸磯b式期の関東系土器が出土している。この他に、鴨ヶ館跡では大木6式土器、鍛冶久保遺跡では浮島I式や諸磯b式期、柳作B遺跡では大木3式の竪穴住居跡と土坑・屋外炉と考えられる焼土遺構がそれぞれ発見されている。

小野町内では、縄文時代でも早期中頃から前期前半にかけて比較的まとまって土器片が出土しており、この時期において福島県南部地域では東北系土器と関東系土器とが混在する傾向がある。

中期では町道建設に伴って平成3年に発掘調査が実施された矢大臣山(新田)遺跡が代表的である。大木8a式期の大型竪穴住居跡、大木9・10式期の竪穴住居跡と多量の遺物が出土した遺物包含層が調査された。この他に堀切・清太郎遺跡は耕作中に大木8a・8b式期の土器が採集され、特に堀切遺跡では石囲炉跡とほぼ完形の大木8b式期の土器が出土している。

後期から晩期にかけては矢大臣・猪久保・小滝・長久保・長賀遺跡があるが、遺跡数が減少する傾向にある。矢大臣遺跡では綱取I・II式期の竪穴住居跡や配石遺構が、加曾利B式期は猪久保城跡、瘤付土器や土偶は長久保遺跡から土器片が出土している。晩期では梅ノ木畑遺跡で埋設土器が、長久保遺跡で大洞B式期の土器が出土している。

弥生時代では、万景B・小滝・本飯豊・鍛冶久保・アセミタチA・アセミタチB遺跡、猪久保城跡・鴨ヶ館跡などで遺物が散見される。万景B遺跡では石包丁やモミ圧痕付土器片が、鴨ヶ館跡では中期(龍門寺式期から天神原式期)の土器片が発見されている。竪穴住居跡や土坑など明確な遺構はまだ確認されていない。

古墳時代の遺跡は、落合・安橋・本飯豊・万景E遺跡と大豆柄古墳群がある。このうち落合遺跡と本飯豊遺跡の発掘調査が実施されている。従来の研究成果では、阿武隈高地内の標高480m前後の丘陵地帯では高塚式古墳の分布が少なく、古墳時代の集落跡の存在は疑問視されていた。しかし、平成4年に調査された落合遺跡は古墳時代前期の大規模な集落遺跡で、今後研究指標となり得る良好な一括遺物や外来系の土師器が出土した。また、落合遺跡の北側にある本飯豊遺跡では古墳時代後期の竪穴住居跡や畑跡、土師器・須恵器の他に石製紡錘車・鉄鍬などが出土している。付近には円墳群によって構成される大豆柄古墳群が存在し、落合遺跡との関係が考えられる。祭祀に関する遺物は、安橋遺跡で中期の石製有孔円盤や土製丸玉が出土している。

奈良・平安時代では、落合・本飯豊・糍内・作田B・柳作B・柳作C・鍛冶久保・猪久保・北ノ内・柿人・滝・小滝遺跡など各遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが発見されている。この中には古墳時代から継続する落合遺跡・本飯豊遺跡、奈良時代から平安時代に継続する糍内遺跡・作田B遺跡・柳作B遺跡・柳作C遺跡、また平安時代に1軒または2～3軒の少数の竪穴住居で構成される鍛冶久保遺跡・猪久保城跡・北ノ内移籍・滝遺跡・小滝遺跡などがある。これまでの調査例から、集落の出現時期・変遷・構成について多種多様であることが確認された。

中世において小野町周辺は小野保と呼ばれ、平安時代後期（11世紀後半頃）に安積郡から分出し成立したと考えられている。小野保は現在の小野町・滝根町・大越町の一部を含む地域と考えられている。記録としては建武2年に陸奥国守北畠顕家が結城親朝に宛てた、陸奥国については国宣案において、小野町に関する記述が「小野保」として初めて文献に登場する。これ以後、白川結城・石川・三春田村・相馬・岩城・伊達各氏などの攻防が繰り返され、概ね15世紀初頭まで白川結城氏、その後三春田村氏、天正17（1589）年には伊達政宗が支配するようになる。

この時期の代表的な城館跡として、磐越自動車道建設に伴って発掘調査を実施した猪久保城跡や鴨ヶ館跡がある。猪久保城跡は現存する記録・文献には記載がなく、城主や変遷については全く不明であった。調査の結果、平場16ヵ所、主殿・蔵を含む掘立柱建物跡8棟の他に門跡・柵列・土橋跡・堀跡などの多くの遺構が検出された。調査報告書では15世紀前半に自焼の後に破却されたと推定している。鴨ヶ館跡は郡山と三春方面への分岐点に位置し、掘立柱建物跡や竪穴状方形土坑・堀跡・通路跡・門跡を伴う虎口などが検出され、15世紀後半から16世紀前半まで機能していたと考えられている。豊臣秀吉による奥州仕置き以後、田村郡は蒲生氏郷に宛われ会津領となり、慶長3年（1598）には上杉景勝の支配地となる。

関ヶ原の戦い以後には、再び蒲生秀行・忠郷、さらに寛永4年（1627）に丹羽長重の白河藩領となる。18世紀中頃には、天領や越後高田榊原藩・笠間藩などに分割支配されるが、寛政年間に入り笠間藩分領などとして統治された後に幕末を迎える。この時代の関連遺構として鍛冶久保遺跡では17世紀前半から19世紀前半の屋敷跡や墓坑・陶器窯跡などが検出された。このほかに、本飯豊遺跡では墓坑が、柳作C遺跡では建物跡・土坑・溝跡・畑跡が調査されている。 （高橋）

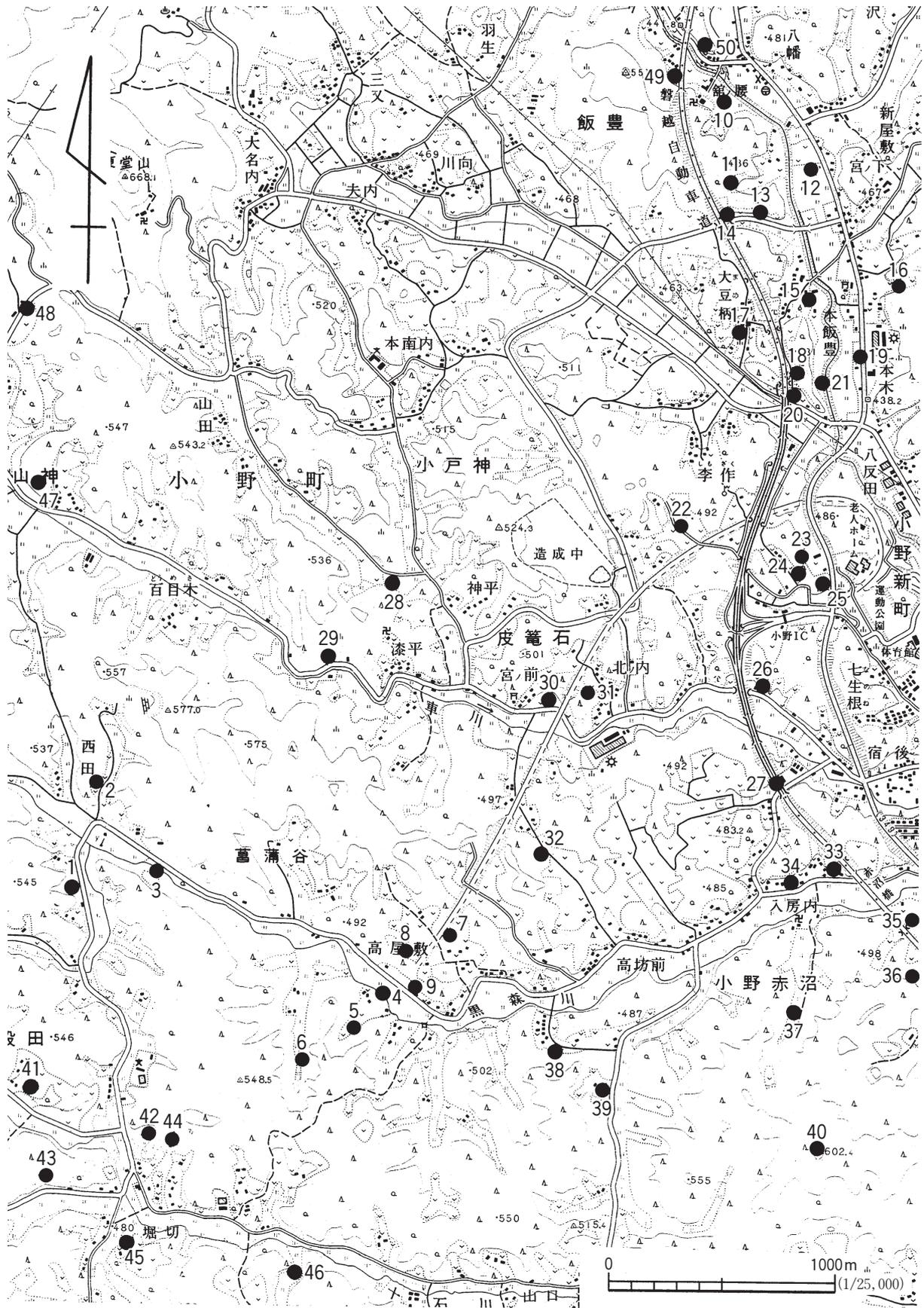


図5 周辺遺跡位置図

表2 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別
1	沢目木遺跡	小野町菖蒲谷字沢目木	縄文・弥生	集落跡・散布地
2	西田H遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文・弥生・奈良～平安	集落跡・狩猟地
3	堂田遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文	散布地
4	反田遺跡	小野町菖蒲谷字反田・鹿島	縄文	散布地
5	鹿島遺跡	小野町菖蒲谷字鹿島	縄文・平安・中世	集落跡
6	反田B遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文	集落跡
7	柳作A遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安	集落跡
8	柳作B遺跡	小野町菖蒲谷字柳作	縄文・近世	集落跡
9	柳作C遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安・近世	集落跡
10	寺ノ下遺跡	小野町飯豊字寺ノ下	縄文・奈良・平安・近世	散布地
11	前久保遺跡	小野町飯豊字河沼・寺ノ下	縄文・古墳～平安	散布地
12	柿人遺跡	小野町飯豊字柿人	古墳～平安	散布地
13	作田A遺跡	小野町飯豊字作田	奈良・平安	散布地
14	作田B遺跡	小野町飯豊字作田	奈良・平安	散布地
15	本飯豊遺跡	小野町飯豊字本飯豊	奈良・平安・近世	集落跡・墓跡
16	一盃森遺跡	小野町飯豊字一盃森	奈良・平安	散布地
17	月清水遺跡	小野町飯豊字大豆柄	奈良・平安	散布地
18	大豆柄古墳群	小野町飯豊字大豆柄	古墳	古墳
19	二本木遺跡	小野町飯豊字二本木	古墳～平安	散布地
20	落合遺跡	小野町飯豊字落合	古墳～平安	集落跡
21	蔦ノ本遺跡	小野町飯豊蔦ノ本	奈良・平安	散布地
22	李作遺跡	小野町皮籠石字李作	奈良・平安	散布地
23	馬番遺跡	小野町小野新町字馬番・七生根	奈良・平安	散布地
24	西馬番遺跡	小野町新町字西馬番	奈良・平安	散布地
25	七生根遺跡	小野町小野新町七生根	奈良・平安	散布地
26	糺内遺跡	小野町籠石字糺内	奈良・平安	集落跡
27	五百成遺跡	小野町籠石字五百成	奈良・平安	散布地
28	神平遺跡	小野町皮籠石字神平	縄文	散布地
29	古防遺跡	小野町皮籠石字古防	縄文・奈良・平安	散布地
30	宮ノ前遺跡	小野町皮籠石字宮ノ前	古墳～平安	散布地
31	北ノ内遺跡	小野町皮籠石字北ノ内	平安・近世	集落跡
32	四郎坊遺跡	小野町小野赤沼字四郎坊	奈良・平安	散布地
33	関根前遺跡	小野町小野赤沼字関根前	奈良・平安	散布地
34	石崎遺跡	小野町小野赤沼字西ノ内	奈良・平安	散布地
35	西作遺跡	小野町小野赤沼字西作	奈良・平安	集落跡
36	猪久保城跡	小野町谷津作字和久・猪久保	縄文・弥生・奈良～中世	城館跡
37	入房内遺跡	小野町小野赤沼字坊入	古墳・奈良	散布地
38	鉢塚遺跡	小野町小野赤沼字鉢沼	縄文	散布地
39	永田原遺跡	小野町小野赤沼字二永田原	縄文・奈良・平安	散布地
40	小塩館跡	小野町谷津作字館	中世	城館跡
41	関場遺跡	小野町雁股田字関場	縄文・奈良・平安	散布地
42	関場B遺跡	小野町雁股田字関場	縄文・平安・近世	散布地
43	仁井殿遺跡	小野町雁股田字仁井殿	縄文	集落跡
44	黒森館跡	小野町雁股田字堀切	中世	城館跡
45	堀切遺跡	小野町雁股田字千保	縄文	散布地
46	神山B遺跡	小野町股田字新切	縄文	散布地
47	西牧館跡	小野町小野山神字八升蒔	中世	城館跡
48	畑田遺跡	小野町小野山神字畑田	縄文	散布地
49	切掛遺跡	小野町飯豊切掛	奈良・平安	散布地
50	鴨ヶ館跡	小野町飯豊字館ノ腰	縄文・弥生・平安・中世	城館跡・集落跡

第3節 遺跡の位置と周辺地形 (図6)

沢目木遺跡は、田村郡小野町大字雁股田字沢目木に所在する。小野町の商業・居住地の中心は、町の中央やや東寄りの小野新町地区である。ここに国道349号線・磐越自動車道・JR磐越東線がそれぞれ南北に走り、磐越自動車道小野インターチェンジやJR磐越東線小野新町駅が設けられている。雁股田地区は小野町の中央西寄り、小野新町からは西へ約4.5kmの距離に位置し、町の中心部からは車を利用すれば10分前後で移動することが可能である。本地区は、北は大字小野山神・大字菖蒲谷、東は大字塩庭、西は郡山市田母神地区、南は平田村蓬田地区と境を接している。本地域には主幹道路として県道矢吹・小野線があり、小野町を南北に縦断する国道349号と平田村を南北に走る国道49号を結んでいる。

雁股田地区の南北両側には、西方の蓬田岳を中心とした山地帯を水源とする黒森川と十石川がそれぞれ東流し、小野新町地区で右支夏井川へと注ぐ。本地区には黒森・十石両河川とこれらの水源となる小支流によって形成された小規模な段丘が点在し、この上に集落が営まれている。本地区の現況は丘陵部が山林、沢周辺は水田となっており、丘陵の中腹や裾部は一部造成され、住宅地やタバコなどを中心とした畑作地となっている。湿地帯である沢地形に設けられた水田は水はけが悪く、



図6 周辺地形と遺跡の範囲

近年まで生産性の向上が困難であった地域である。

沢目木遺跡周辺は、小野町西縁の山地帯から東側に張り出した丘陵が北に向かって流れる黒森川の支流に開析され、支流の東側は険峻な丘陵、西側は埋没沢を挟んで比較的なだらかな丘陵部となる。西側の丘陵は幾筋かの沢により、さらに舌状の小規模な丘陵に分断される。沢目木遺跡はこのような小丘陵の北東裾に広がる遺跡であり、北側の沢地形は現在水田として利用されている。東側は県道矢吹・小野線に臨み、本遺跡の東端、道路の西側は厚い盛土で覆われていた。本遺跡と南側の丘陵の比高は約50mあり、丘陵の北側斜面は比較的険峻となる。沢を流れる水量は豊富で、中腹には緩斜面や平坦面がみられ、尾根上も一部幅広の空間を有するなど集落の立地条件として十分な条件を備えている。遺跡は丘陵の北東裾に位置するため、特に西側は日照条件が悪い。ただし、冬場に強く吹く西風が通りにくい地形環境である。

遺跡範囲については、北側が水田の造成による削平によって画され、東側は地盤の急激な落ち込みが現在の県道部分に潜り込むことによって確定する。また南～南西側は丘陵部の急斜面へと接続し、丘陵尾根から中腹に存在が推定される集落とは遺跡の境界を画すことができそうである。基盤層であるLⅣ上面における標高は最も高い調査区西端部で484.0m、大規模な掘削が認められる北東端部は標高479.5m、削平を免れた範囲での最低標高は遺跡南東端にある2号遺物包含層が遺存した位置で480.0mである。調査区内の比高は約4mであり、南西から北東側に向かって斜度を緩めながら下がる地形となっている。(横須賀)

第4節 遺構の分布 (図7)

沢目木遺跡は東西約65m、南北約40mの範囲に収まり、東側で鉤の手状に南へ折れ曲がる形状となる。調査面積は1,600㎡である。遺跡の北東側からは、現在の県道を敷設する以前、昭和前半期の道路跡が発見され、この範囲はすでに基盤層が大きく削平されていたことが明らかとなった。そのため、遺跡北東部約300㎡の範囲からは遺構・遺物とも検出されていない。調査範囲から検出された遺構は、竪穴状遺構(SX)4基、掘立柱建物跡(SB)2棟、土坑(SK)2基、遺物包含層(SH)2ヵ所である。

遺構の分布には、大きく2箇所の集中域が認められた。遺跡の南東部、P・Q9～12グリッドの位置には竪穴状遺構2基(SX02・03)、土坑1基(SK01)が存在する。2基の竪穴状遺構の水平位置は標高481.0m前後、土坑は標高481.8m前後を測る。竪穴状遺構は出土遺物などから縄文時代早期に比定される。2・3号竪穴は重複するが、プランや堆積土の観察結果から極めて近接した時期の遺構と考えられる。1号土坑からは遺物が出土せず、正確な時期比定は困難であるが、遺構内堆積土はLⅡを起源とするものであり竪穴状遺構とは時期を異にする。

遺跡のほぼ中央部、K～N5～9グリッドの位置には竪穴状遺構2基(SX01・04)、掘立柱建物跡2棟(SB01・02)、土坑1基(SK01)が存在する。1号竪穴、1・2号建物跡、2号土坑の水

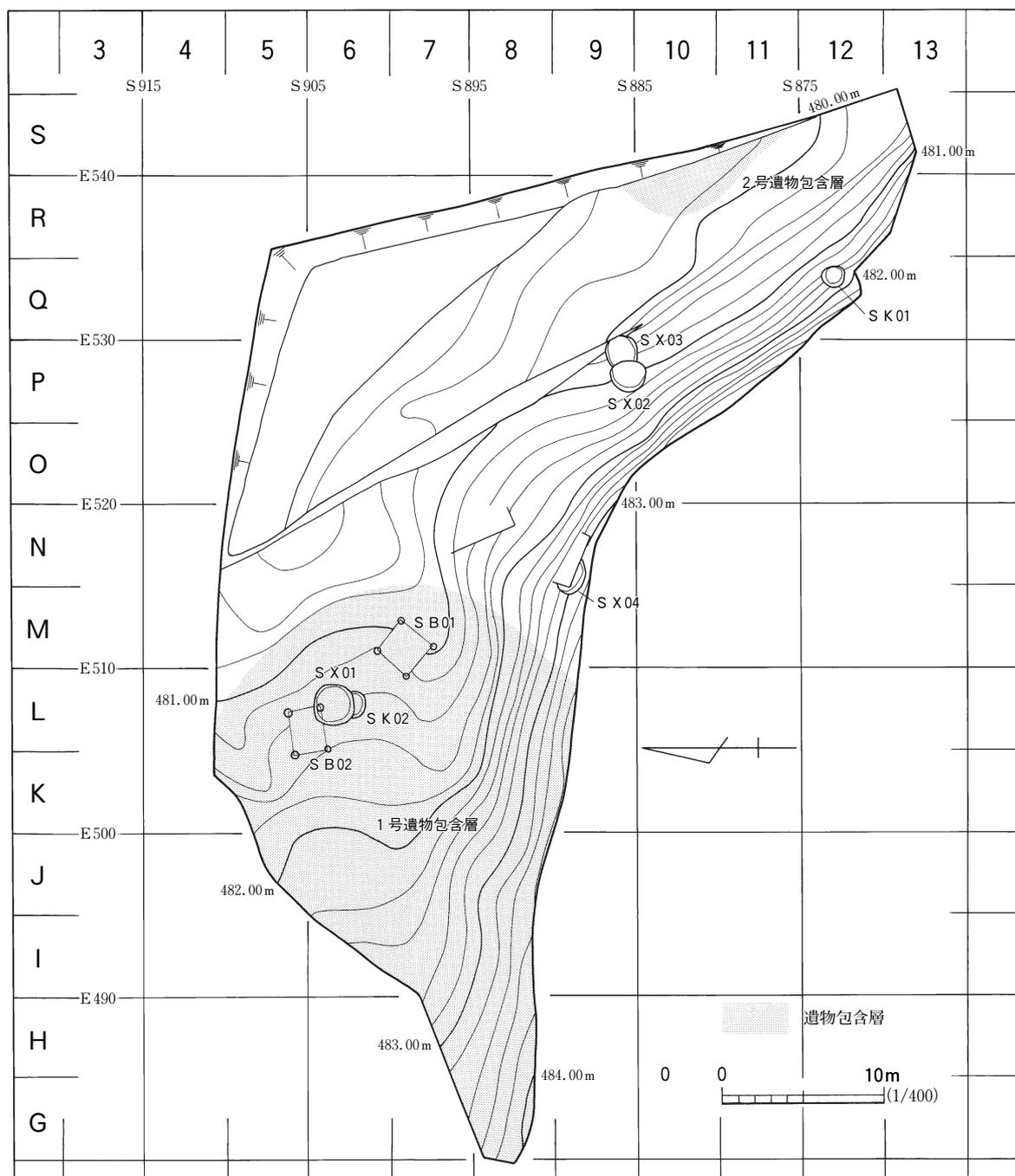


図7 遺構配置図

平位置はほぼ共通し、標高481.2~481.4m前後を測る。4号竖穴はさきの4基の遺構群とはやや離れた距離にあり、水平位置は標高483m前後を測る。1号竖穴とは2号建物跡・2号土坑がそれぞれ重複した位置にあり、2号土坑→1号竖穴→2号建物跡と変遷する。1・4号竖穴からは縄文時代早期の遺物が出土し、遺構のプランや遺構内の堆積土から2・3号竖穴と時期的に併行し、同様の性格を持つ遺構と考えられる。また1号竖穴より古い2号土坑についても、遺構内堆積土から竖穴状遺構と時期的に併行する可能性が高い。1号竖穴より新しい2号建物跡、及び近接する1号建物跡は遺物の出土は認められないものの、柱穴の堆積土はLⅡを起源とするものであり、竖穴状遺構

とは時期を異にする。2基の建物跡は両者とも1間×1間であり、柱穴規模・柱間寸法ともほぼ同規模のものであるが、建物の主軸方向は同一にとらない。

遺物包含層は、遺跡の西半部を中心としたG～M4～9グリッド、約600㎡の範囲に広がる1号遺物包含層と、遺跡の南東隅R・S9・10グリッド、約30㎡の範囲に認められる2号遺物包含層が存在する。1号包含層はLⅡa・LⅡbの2層に分離され、LⅡaは縄文時代晩期～弥生時代前期、LⅡbは縄文時代早期～前期の遺物を主に包含する。遺物が集中する範囲はI～M5～7グリッドであり、包含層範囲の西・南、及び南東方向に行くに従い希薄となる。これは本遺跡の所在する丘陵の形態、勾配と対応した遺物分布と考えられ、丘陵上部に該期集落の存在を推定させる。

2号包含層はそのほとんどを昭和前半期の道路建設時に削平されており、僅かな範囲にのみ黒褐色土が遺存していた。LⅡcとした黒褐色土層中には縄文時代早期の土器が若干包含されており、斜面上位に位置する竪穴状遺構内から出土した土器群と、時期的に併行することが明らかとなっている。そのため本包含層の生成起源は、位置的な関係から、今回の調査で検出しえた遺構群である可能性が高い。またLⅡcは現県道下まで延びるようであり、遺跡の範囲が若干南東側へ広がる可能性が考えられる。
(横須賀)

第5節 基本土層 (図8)

本遺跡は、南側に横たわる丘陵の裾部で基盤層が東側の埋没沢へと落ち込む緩斜面上に位置している。そのため丘陵上部から流れ込んだ黒～黒褐色土が発達しており、一部基盤層が削平された範囲を除き、調査区内の広い範囲で確認された。東部については、旧県道建設時に大きく旧地形が削平されており、現県道建設時の厚い盛土が認められた。ただしこの範囲の南側については、削平が基盤層まで至っておらず、旧地形が僅かに遺存している。北側は盛土層下まで達していないが、既に地表面より3m、基盤層より1m以上下り、遺構・遺物の存在する可能性は認められない。

本遺跡の基本土層は色調や内容物から大きく4層に分けられ、さらに細分することが可能である。観察地点はG8・K5・K9・Q12・S11グリッドの5地点であり、図8中にA～E地点として示した。観察に当たっては、調査区壁やトレンチ壁を利用している。以下層位毎に詳述する。

LⅠ：表土・盛土層。

LⅠa：調査区中央～西側の範囲を覆う表土層。位置によって層厚に差が認められるが、概ね25cm前後を測る。[確認地点A～D]

LⅠb：調査区東側、人為的な削平が認められる範囲を覆う盛土層。南東部は120cm、南西部は3m以上に及ぶ。[確認地点E]

LⅡ：黒～黒褐色土層。遺跡北東部を除き、調査区内全域に認められる。色調、内容物の変化は漸移的であるが、さらに3層に分層することが可能である。

LⅡa：調査区北東部及び南東端を除き分布し、層厚は10～30cmを測る。遺跡中央～西側の地

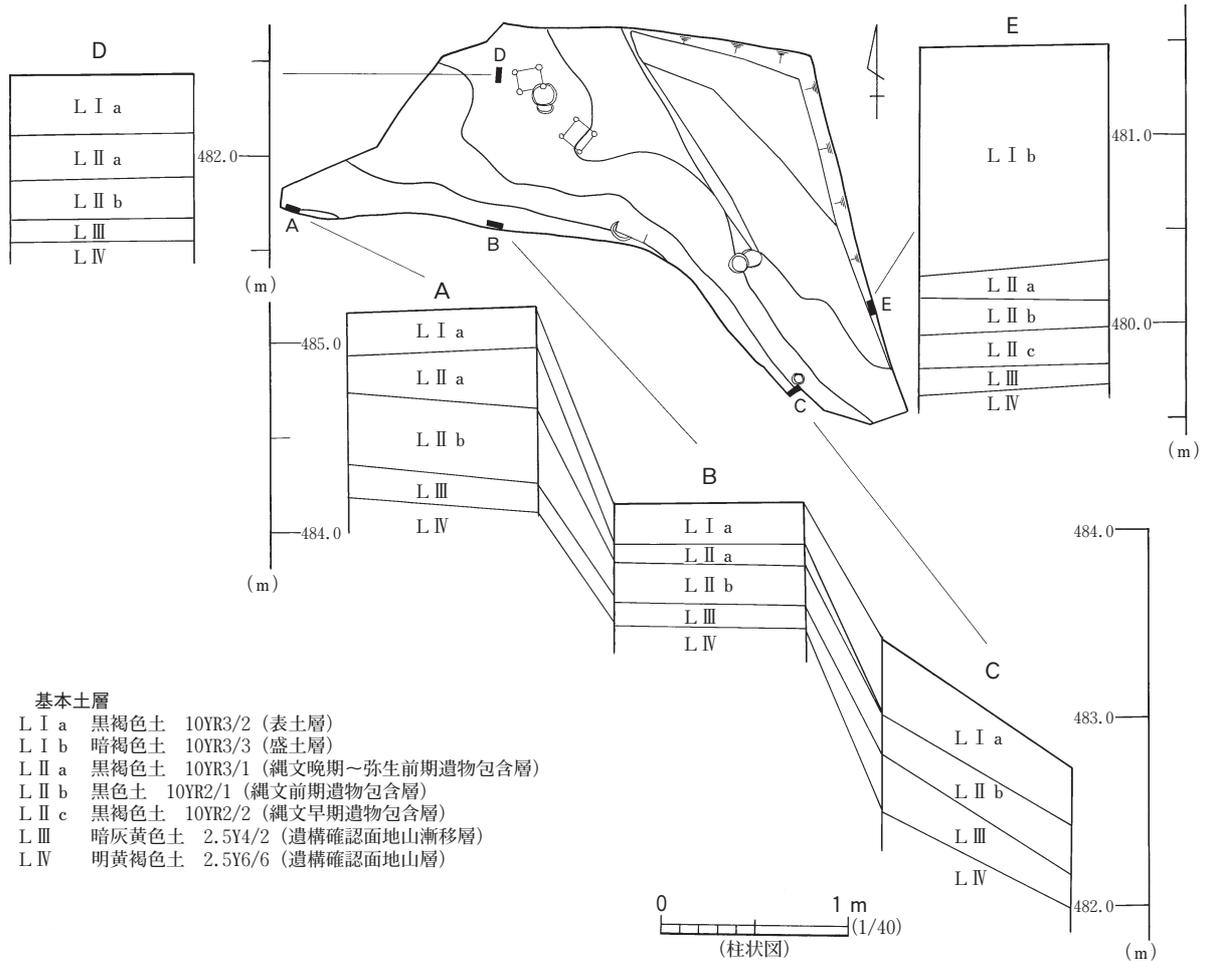


図8 基本土層

点において、主に縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物を包含する（1号遺物包含層）。

[確認地点A・B・D・E]

L II b：調査区北東部を除いて分布し、層厚は10～40cmを測る。遺跡中央～西側の地点において、主に縄文時代前期の遺物を包含する（1号遺物包含層）。L II a層より、色調が若干暗いことで識別される。[確認地点A～E]

L II c：調査区南東部にのみ分布し、層厚は20cm前後を測る。層中には縄文時代早期の遺物が認められた。（2号遺物包含層）。L II a・b層とは層中に雲母を多量に含むことで識別される。[確認地点E]

L III：地山漸移層。L IIを除去後、本層上面で遺構検出作業を行っており、一部遺構の確認面となっている。本層は無遺物層である。[確認地点A～E]

L IV：基盤層（地山）。L III上面で確認しえなかった遺構の確認面である。[確認地点A～E]

(横須賀)

第3章 遺構と遺物

第1節 竪穴状遺構

竪穴状遺構は計4基を調査した。4基とも底面や周囲に柱穴や炉跡などの生活痕跡が認められなかったため、竪穴住居跡とはせず、竪穴状遺構として報告する。いずれも直径2m前後の楕円形、もしくは略隅丸方形に近い平面プランをとる。1・2・4号竪穴からは縄文時代早期前葉頃と考えられる土器が主体的に出土しており、4基の竪穴及び1号竪穴と重複する2号土坑で、該期の遺構群を形成する可能性が高い。2・3号竪穴は重複し、2号竪穴が新しい。1号竪穴・2号土坑と4号竪穴間は約13m、4号竪穴と2・3号竪穴間は約10m離れた位置に存在する。

なお出土土器の図示に際して、必要に応じ拓本図と実測図の両者を併載した。この場合、キャプションの右側にa：拓本図、b：実測図として示している。また、出土遺物については検出時の位置を遺構平面図上で示している（任意縮尺）。

1号竪穴状遺構 SX01

遺 構（図9，図版5・6・10）

1号竪穴状遺構は調査区中央やや北寄り、L6グリッドに位置する。北東方向へ下る緩斜面上に存在し、底面の標高は481.3m前後を測る。遺構確認面はLⅢ上面である。

本遺構は北西側で2号建物跡P3，南側で2号土坑と重複し、2号土坑→1号竪穴→1号建物跡と変遷している。この他、南東側約3mに1号建物跡、同じく南東側約13mに4号竪穴が所在する。なお本遺構はLⅢ上面において遺構プランを確認し精査・記録を行ったが、底面を誤認してしまい、LⅢ除去後再度精査・記録を行うという手順を踏んでいる。

堆積土は4層に分けられ、レンズ状となり自然堆積であることを示す。ℓ1～ℓ3はややくすんだ黒褐色を基調とし、炭化物をまばらに含んでいた。ℓ4は暗オリーブ褐色の層であり、遺構壁面の崩落土を含むと考えられる層である。

遺構のプランは、円形に近い隅丸方形状を呈し、南北長・東西長はそれぞれ2.4m、底面はほぼ水平となり、遺構確認面からの深さは35cm前後を測る。底面に炉や踏みしまりなどの生活痕跡は検出されず、また遺構の周囲を含めて柱穴も認められない。

遺 物（図9，図版16）

本遺構からは堆積土中から土器片6点が出土し、このうち2点を図示した。図9-1はℓ2から出土した無文土器である。外面にはミガキが観察され、器面は非常に滑らかとなる。胎土は長石粒をやや多く含むが、比較的精良、焼成は堅緻である。図9-2はℓ1から出土した小片である。幅5mm程の太沈線が認められ、胎土にはやや大粒の長石を多く含む。

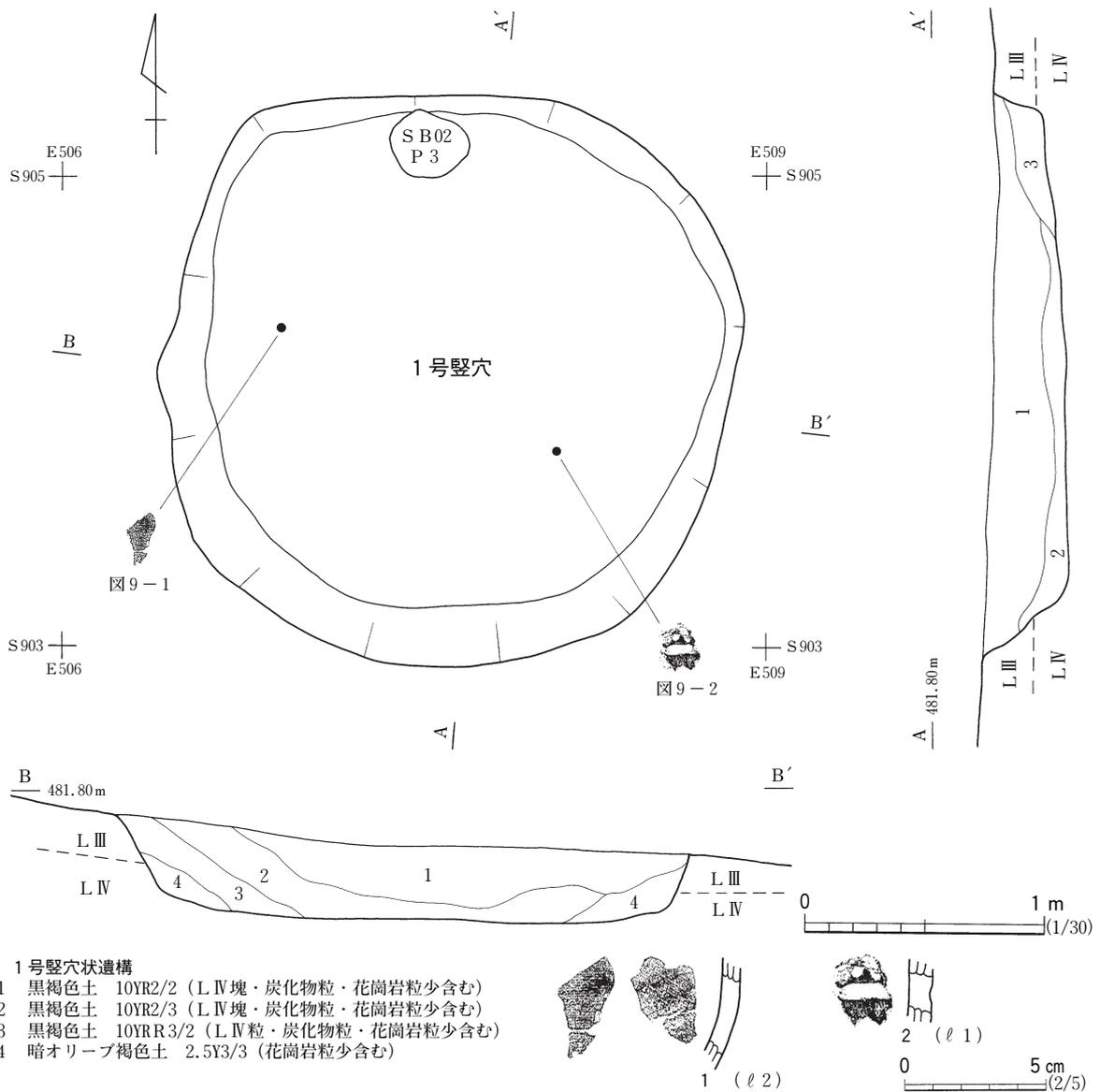


図9 1号竖穴状遺構・出土遺物

まとめ

本遺構は一辺2.5m弱の小型竖穴状遺構である。底面や遺構の周囲に柱穴などの施設が認められず、また踏み締まりなどの痕跡も確認できなかったため、性格については不明とせざるをえない。ただし、遺構のプランや規模、内容は2～4号竖穴と近似しており、これらと同様の性格を有し、ほぼ時期的に併行すると捉えることが可能である。本遺構の時期については、2・4号竖穴から出土した土器群の特徴、及び遺構確認面が縄文時代前期遺物包含層 (SH01L II b) 下であることから縄文時代早期前葉である可能性が高い。(横須賀)

2号竖穴状遺構 SX02

遺構 (図10, 図版7)

本遺構は調査区東側、P9グリッドの南端中央に位置する。遺構は丘陵裾部の東向き斜面で、勾

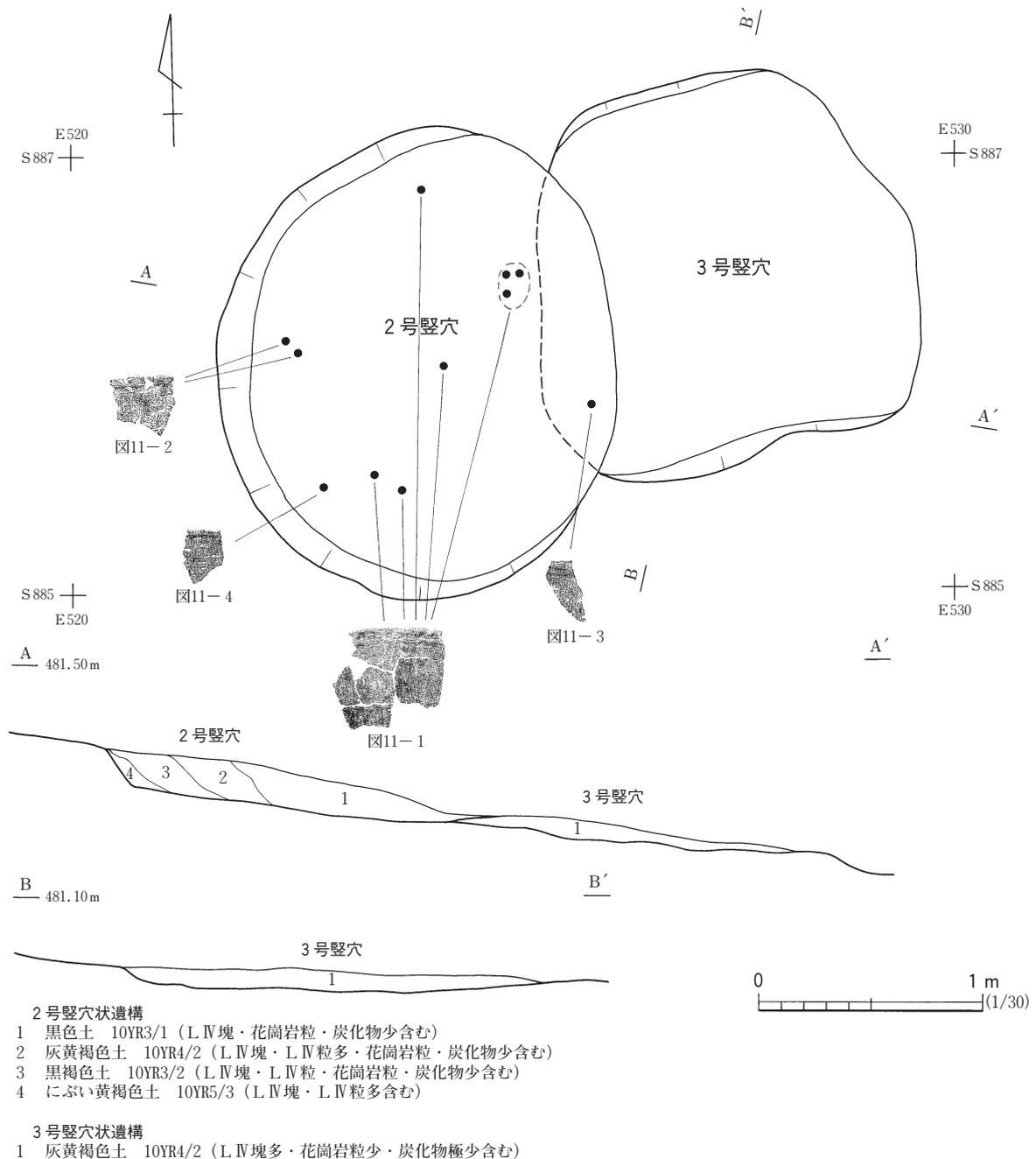


図10 2・3号竪穴状遺構

配が緩くなる標高481.0m付近に立地する。遺構確認面はL IVとした遺跡基盤層上面である。

本遺構は東側で、3号竪穴状遺構と重複している。3号竪穴状遺構の堆積土上に本遺構の堆積土が乗っていることから、本遺構は3号竪穴状遺構よりも新しい。西側約10mにほぼ同時期の所産と考えられる4号竪穴状遺構が、南東側約12mにフラスコ状の1号土坑が所在する。

遺構の掘り下げは、遺構中央に東西方向の土層観察用ベルトを設定して行った。遺構内堆積土は4層に分かれる。ℓ 1～ℓ 3は主に黒褐色土を基調とした粘質土層で、各層中にはL IV塊・炭化物粒が認められる。遺物も混在して出土することから、人為的な埋土と考えたい。ℓ 4はL IV塊・L

IV粒から成る層で、壁際でのみ認められることから、壁体上部の崩落土と判断できる。

本遺構の平面形は、斜面下位にあたる東側が流出して失われていることから断定はできないが、遺存する西側及び南側の形状から、南北方向に若干長い楕円形を呈するものと考えられる。規模は南北長が2.18m、東西長が遺存値で1.84m、検出面からの深さは最深で18cmを測る。

周壁は西側及び南北の半分程が遺存するが、いずれも内湾気味に外傾しながら立ち上がっている。底面はLIVを直接掘り込んだだけのもので概ね平坦であるが、壁際が高く中央部が若干窪んでいる。底面には踏みしまりや貼床の痕跡は認められず、柱穴・炉跡等の施設も認められなかった。

遺物 (図11, 図版16)

本遺構から出土した遺物は縄文土器片17点・石器2点である。縄文土器片はすべてℓ2から出土したものであり、図化したもの同様すべて無文のものである。石器は2点ともに石英の剥片でℓ2・3から出土した。各遺物は出土レベルに差が認められることから、本遺構の機能停止後、ℓ2・3とともに遺構内に廃棄されたと考えられる。

図11-1～4は無文の深鉢である。1は口縁部から胴上部の20%程が遺存するもので、遺構内に散らばっていた7点の破片が接合したものである(図10参照)。器形は胴部が直線的に弱く外傾し、口縁部が小さく屈曲して開く。口唇部は若干肥厚して、外削ぎ状に面取りされ、角は内面側が鋭利

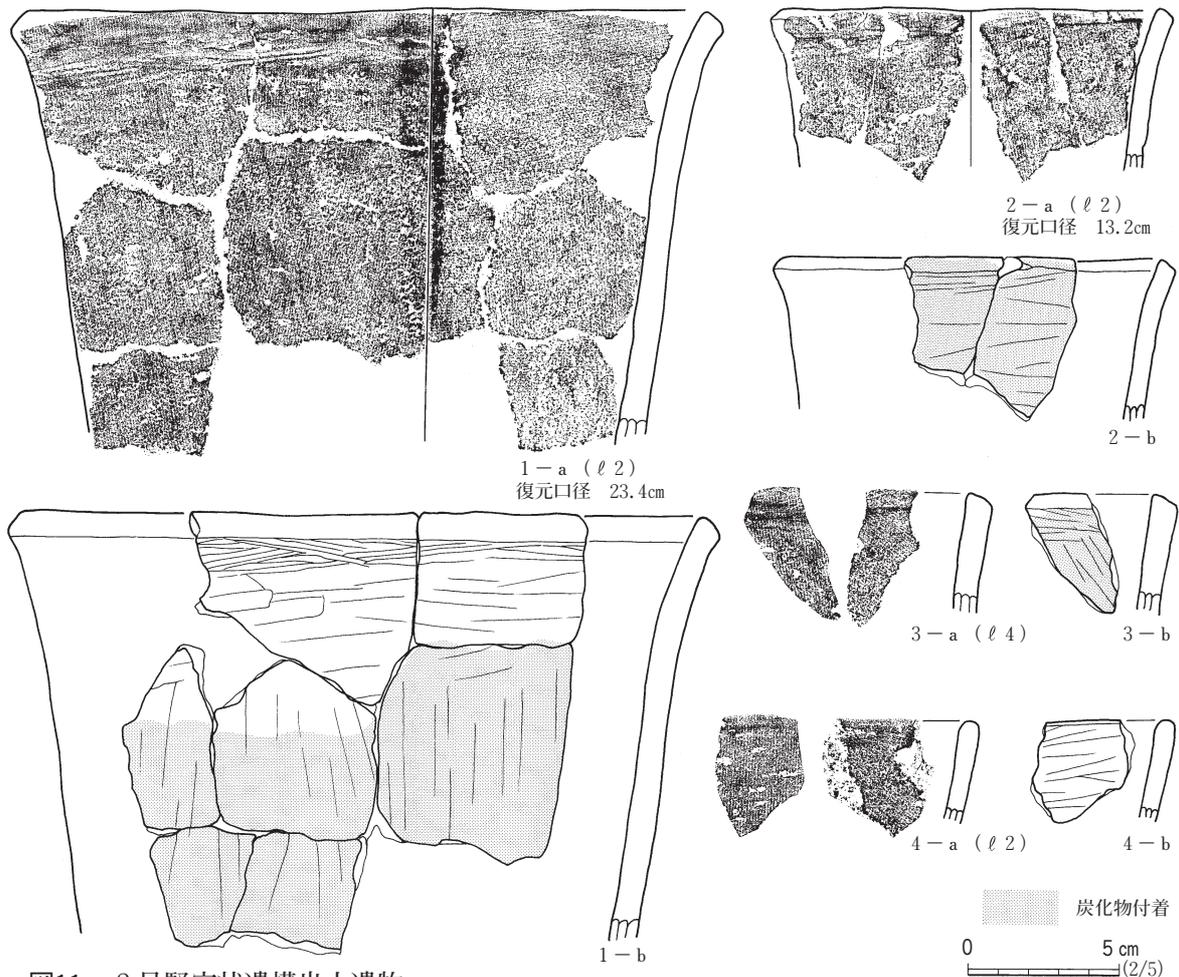


図11 2号竪穴状遺構出土遺物

に、外面側が丸く仕上げられている。外面は口唇部及びその直下に横位のケズリ→ミガキ、胴部に縦位のケズリ→ミガキ（ナデ）が認められる。内面は丁寧なナデにより整えられる。また口縁部外面の屈曲部付近には、単位の細いミガキが横位に観察される。資料外面の下半分には土器使用時の煤が顕著に付着している。2は1と近似する器形を呈するが、推定口径が13cm程の小型品である。口縁部から胴上半部にかけての破片で、器面は横位のケズリの後、丁寧にミガキが施されている。口唇部はやや丸みを帯びた角頭状を呈する。また外面は全面に煤が付着している。3・4は口縁部の破片で、3は弱く外反し、4は内湾しつつ開く器形である。3の口唇部は1・2と同様の形態を呈し、4は肥厚せず、面取りされずに丸く仕上げられている。器面は2点ともに丁寧なナデ及びミガキが施されている。なお、3については形状・厚さ・調整・胎土が4号竪穴状遺構出土資料（図12-1）に近似する。

これらの土器は、胎土に微量の繊維を含み、砂粒が多く含まれ、焼成は堅緻である。いわき市竹ノ内遺跡出土の無文系土器の一部に類例が求められ、縄文時代早期前葉頃の年代が与えられる。

ま と め

本遺構は長軸長が2 m程の平面規模をもつ楕円形の掘り込みである。機能については不明であるが、規模・平面形・底面が平坦であることから住居跡の可能性も考えられる。ただし、柱穴や炉跡等の住居跡と結論づけるだけの根拠が薄いため、竪穴状遺構とした。本遺構の時期は出土遺物の年代観から縄文時代早期前葉の所産と考えている。 (笠 井)

3号竪穴状遺構 S X 03

遺 構 (図10, 図版7)

本遺構は調査区東側、P9グリッドの南東隅付近に位置する。遺構は丘陵裾部の東向き斜面で、配が緩くなる標高481m付近に立地する。遺構確認面はLⅣとした遺跡基盤層上面である。西側で重複する2号竪穴状遺構の調査中に、炭化物を微量含む灰黄褐色土の広がりとして確認した。

2号竪穴状遺構と本遺構との前後関係は、本遺構の堆積土上に2号竪穴状遺構の堆積土が乗っていることから、本遺構が2号竪穴状遺構よりも古い。西側約10mにほぼ同時期の所産と考えられる4号竪穴状遺構が、南東側約12mにフラスコ状の1号土坑が所在する。

遺構の掘り下げは、十字に土層観察用ベルトを設定しておこなった。遺構内堆積土は上部の大半が流出して失われていることから、底面付近にわずかに遺存するのみである。堆積状況は堆積土が薄いことから断定できない。

本遺構の平面形及び規模は、壁の立ち上がりが明瞭でなく、遺構のほとんどが流失していることから断定できないが、堆積土の広がりから推定すると、直径1.7～2 m程度の不整形円形か隅丸方形を呈するようである。検出面から深さは最深部で9 cmを測る。

周壁は先にも述べたように立ち上がりが明瞭ではなく、わずかに遺構の南側が弱く傾斜する程度である。底面はLⅣを直接掘り込んだだけのもので、概ね平坦であるが、東方向に弱く傾斜してい

る。2号竪穴状遺構同様、底面には踏みしまりや貼床の痕跡は認められず、柱穴・炉跡等の施設も認められなかった。本遺構から、遺物は出土しなかった。

ま と め

本遺構は直径1.7～2 m程の堆積土の広がりである。明瞭な立ち上がりがなく、掘り込みというよりは、窪地に近いものである。竪穴状遺構とするのも躊躇されるが、遺構の重複関係上、縄文時代早期前葉と考えられる2号竪穴状遺構よりも古いものであることから、遺構として報告した。機能については不明である。本遺構の時期は2号竪穴状遺構との重複関係から、縄文時代早期前葉頃と考えられる。(笠井)

4号竪穴状遺構 SX04

遺 構 (図12, 図版8・9)

本遺構は調査区中央の南端で、M・N8・9グリッドが交差する部分に位置する。遺構は丘陵裾部の北向き斜面で、標高482.4～483.2m付近に立地する。遺構確認面はLⅣとした遺跡基盤層上面である。

本遺構は平成12年度に実施された試掘調査(福島県教育委員会2001『福島県内遺跡分布調査報告7』)における7号トレンチの南壁で、その断面を認識した。このため、トレンチの南側を精査して、染み状のプランを検出した。遺構はその中央がトレンチによって壊されており、南側の壁面とトレンチの底面に一部覆土が残っただけである。重複する遺構は無く、東側約10mに2号竪穴状遺構が、北西約14mに1号竪穴状遺構及び2号土坑が所在する。これらの遺構は、出土遺物から本竪穴とほぼ同時期と考えられる。

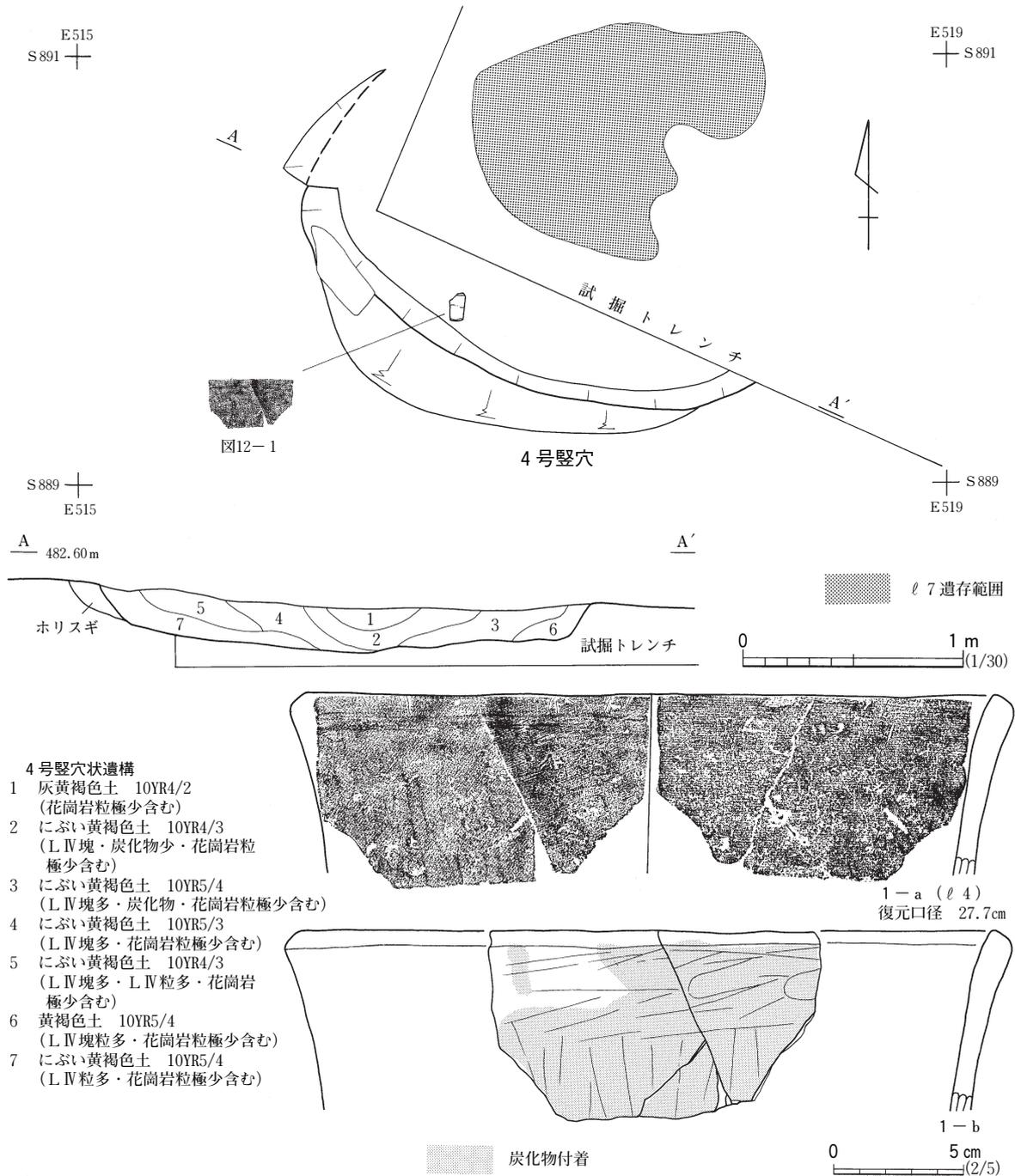
遺構の調査は、トレンチ南壁をセクション面として記録後、遺構の壁出しを行った。遺構内堆積土は7層に分かれた。灰黄褐色土及びにぶい黄褐色土を基調とした粘質土層で、レンズ状堆積を示すことから、自然に埋没したものと考えられる。ℓ3～7はLⅣ塊やその粒子が多量に含まれていることから、周壁の崩落土、ℓ1・2は窪地に溜まった流入土であろう。

本遺構の平面形は、中央から北側が失われているが、東西に長い楕円形を呈するようである。規模は遺存値で東西1.5m、南北1.3m程で、検出面からの深さは14～19cmを測る。

周壁は内湾気味に外傾しながら立ち上がっている。底面はLⅣを直接掘り込んだだけのもので、概ね平坦であるが、壁際が高く中央部が若干窪んでいる。底面には踏みしまりや貼り床の痕跡は認められず、柱穴・炉跡等の施設も認められなかった。

遺 物 (図12, 図版16)

本遺構から出土した遺物は図示した縄文土器片1点のみである(図12-1)。出土層位はℓ4で、南壁際の底面に近い位置で内面を上にして出土した。資料は口縁部から胴上半部にかけての部分で、15%程が遺存する。器形は弱く外反して開いており、口唇部は若干肥厚して、外削ぎ状に面取りされ、角は内面側が鋭利に、外面側が丸く仕上げられている。器面は口唇部・内面及び口唇部直下が



横位のミガキ，胴部外面が縦位のヘラナデ及びミガキにより丁寧に仕上げられている。外面にはほぼ全体的に煤が付着している。2号竪穴状遺構出土資料（図11-3）に近似する。

ま と め

本遺構は大半をトレンチにより壊されていたが，おそらく楕円形のプランと想定される。機能については，規模・平面形及び底面が平坦であることから1・2号竪穴状遺構と同様に，住居跡の可能性も考えられる。ただし，柱穴や炉跡等は検出されず住居跡とする根拠が薄いため，竪穴状遺構とした。本遺構の時期は出土遺物の年代観から縄文時代早期前葉と考えている。（笠井）

第2節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は2棟調査されている。いずれも調査区中央やや北寄り、K～M 5～7グリッドに所在する。2棟とも1間×1間となる小型の建物跡であり、建物の軸線方向は同一にとらない。2号建物跡P 3は、1号竪穴状遺構と重複しこれよりは新しくなる。また2棟の建物跡は規模・構造から共通した性格と併行する年代を指摘することが可能である。ただし、周囲に関連する遺構もなく、遺物も出土していないため、具体的な建物の性格や時期を限定することは避けたい。

なお建物跡を報告するに際して、柱穴寸法は柱痕の中心を結んだ数値で示し、平面図上に0.05mを最少単位として記載している。

1号掘立柱建物跡 S B 01

遺 構 (図13, 図版10・11)

本建物跡は、調査区中央やや北寄りL・M 6・7グリッドに所在する。遺構確認面はL IV上面であるが、本来はL III (漸移層) 上面で確認できたものと考えられる。丘陵裾の北東方向へ傾斜する緩斜面上に所在し、遺構上面の標高は481.0～481.3mを測る。遺構の重複関係はなく、北西側に近接して2号建物跡・1号竪穴・2号土坑が存在する。このうち規模・構造の近似する2号建物跡とは約4.5mの距離を有し、互いに軸線を異にしている。

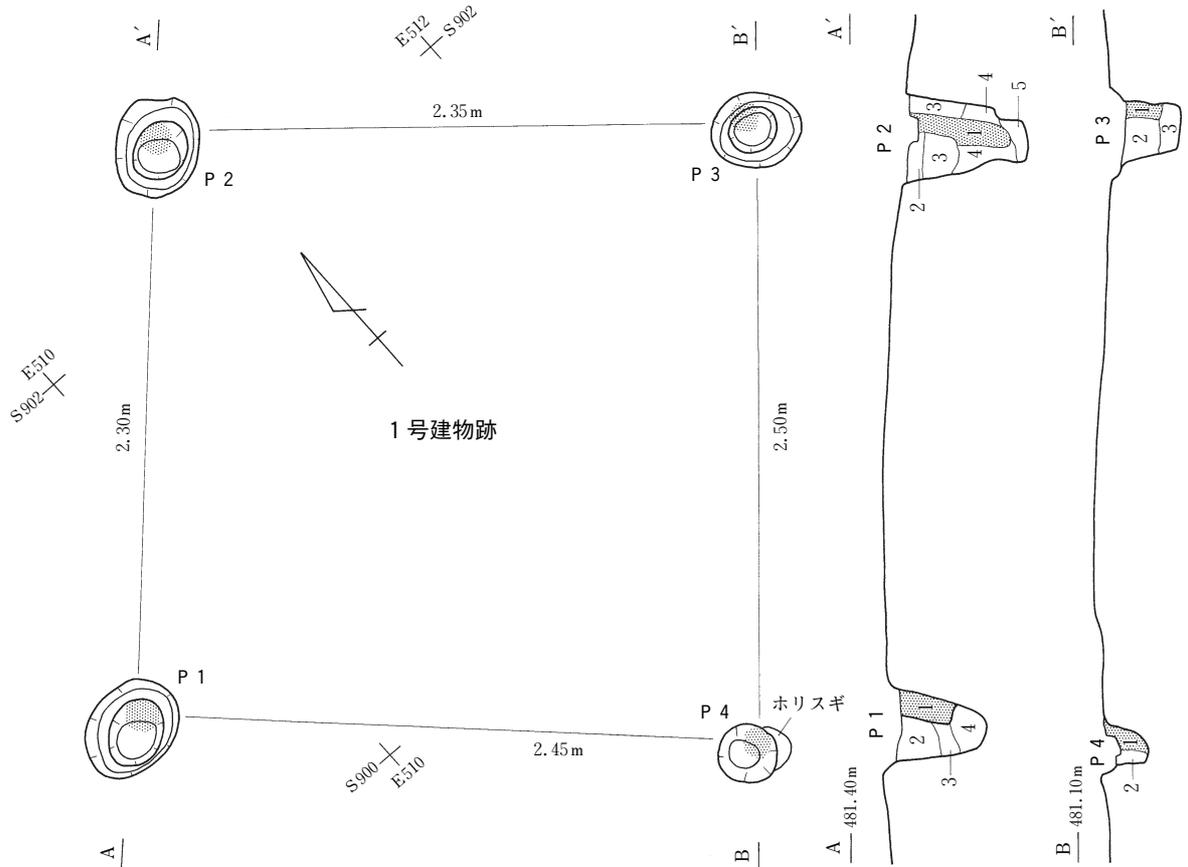
本遺構は正方形に近いプランを呈する1間×1間の建物跡であり、平面積は5.76㎡となる。P 1・P 2間を基準とした建物の軸線方向はN40°Wを測る。柱穴の平面形は4個いずれも円形～楕円形を基調とし、長径は23～43cmを測る。柱間寸法は2.30～2.50mを測り、4辺の平均は2.40mとなる。柱穴底面の標高は480.68～480.86mの幅に収まり、大きな差異は認められない。検出面からの深さは高位に位置するP 1・P 2が39・48cmと深く、低位のP 3・P 4が18・29cmと浅い。そのため、本建物跡が立地していた当時、周辺は平坦に近い地形であった可能性が考えられる。

柱痕は4個の柱穴すべてから検出され、柱痕径は7～11cmを測る。柱痕跡を含め、掘形埋土にはL II起源と考えられる黒褐色土が認められ、掘形埋土はこの黒褐色土とL IV起源の黄褐色土による混土である。なお柱穴内から遺物は出土していない。

ま と め

本建物跡は1間×1間の小型建物跡である。北西に隣接する2号建物跡とは、規模や柱穴の形状、建物の構造から、時期的に併行し、同様の性格を有すると考えられる。遺構の性格については、明確にする材料を持ちえない。

本遺構の帰属時期については、堆積土にL II起源と推定される黒褐色土が認められるため、近接して存在する縄文時代早期の遺構 (S X 01・04, S K 02) とは異なる時期の所産であると考えられる。ただし、周囲における遺物の出土状況や、建物の構造から縄文時代晩期～弥生時代前期に属す



- 1号掘立柱建物跡
- P 1
- 1 黒色土 10YR2/1 (柱痕)
 - 2 黒褐色土 10YR3/2 (L IV塊・L IV粒少含む)
 - 3 黒褐色土 10YR3/1 (L IV塊含む)
 - 4 黒褐色土 10YR3/1 (L IV塊・L IV粒多含む)
- P 2
- 1 黒色土 10YR2/1 (柱痕)
 - 2 黒色土 10YR2/1 (L IV塊少含む)
 - 3 暗褐色土 10YR3/3 (L IV塊・L IV粒少含む)
 - 4 黒褐色土 10YR3/1 (L IV塊・L IV粒極少含む)
 - 5 暗褐色土 10YR3/3 (L IV粒少含む)

- P 3
- 1 黒色土 10YR2/1 (柱痕)
 - 2 黒褐色土 10YR3/1 (L IV粒極少含む)
 - 3 黒褐色土 10YR3/2 (L IV塊・L IV粒少含む)
- P 4
- 1 黒色土 10YR2/1 (柱痕)
 - 2 暗褐色土 10YR3/2 (L IV塊・L IV粒少含む)

図13 1号掘立柱建物跡

る可能性を指摘しておきたい。

(横須賀)

2号建物跡 SB02

遺 構 (図14, 図版10・12)

本建物跡は、調査区中央やや北寄りK・L5・6グリッドに所在する。遺構確認面はL IV上面であるが、本来はL III (漸移層) 上面で確認できたものと考えられる。丘陵裾の北東方向へ傾斜する緩斜面上に所在し、遺構上面の標高は481.1~481.4mを測る。本建物跡P 3と1号竪穴は重複関係にあり、本建物跡が新しい。この他、南側約2mに2号土坑、南東側約4.5mに1号建物跡が存在する。規模・構造の近似する1号建物跡とは軸線を異にする。

本遺構は東西に長い長方形プランを呈する1間×1間の建物跡であり、平面積は5.22㎡となる。

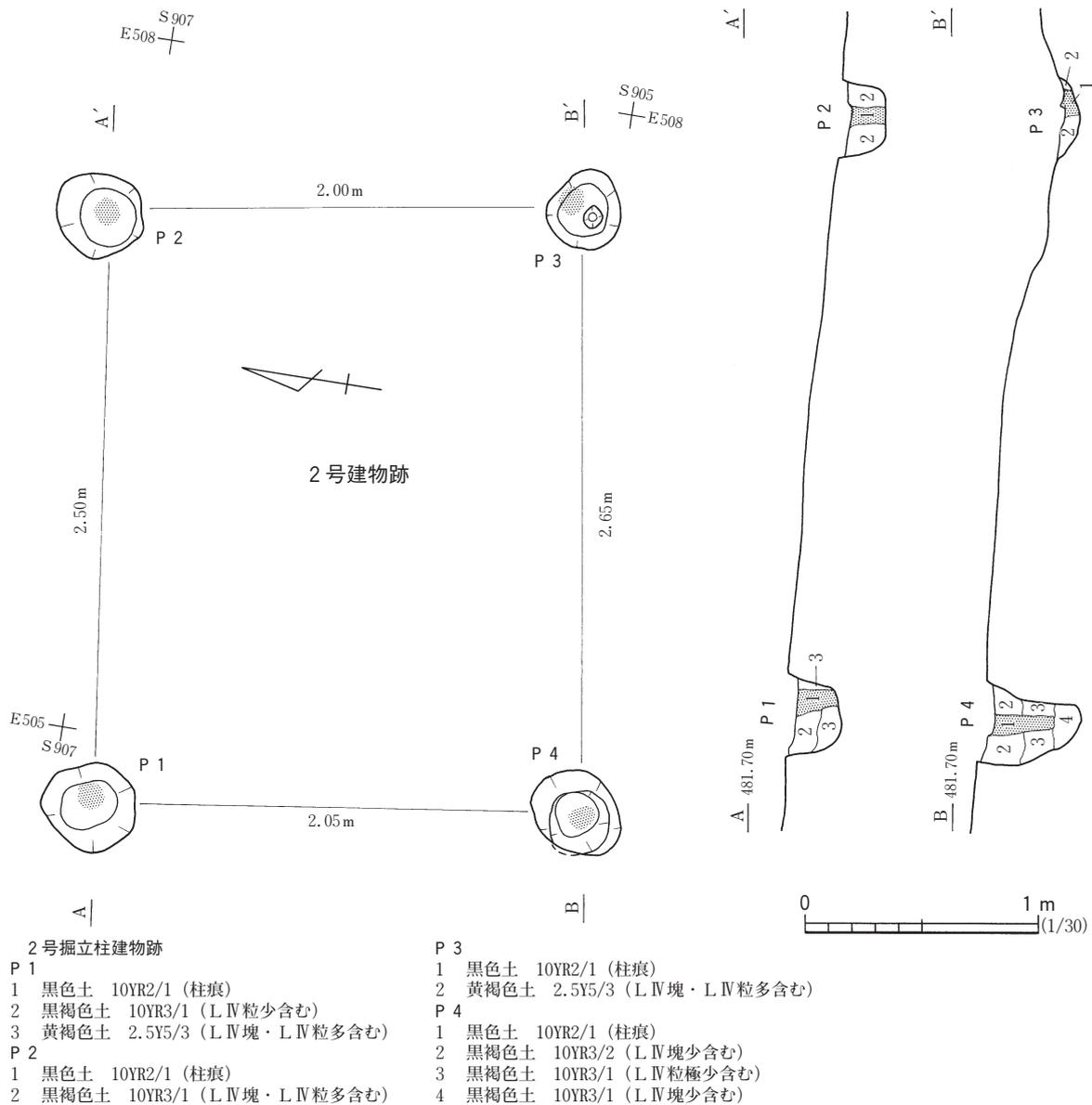


図14 2号掘立柱建物跡

東西桁行き方向を基準とした建物の軸線方向はN80° Eを測る。柱穴の平面形は4個いずれも円形～楕円形を基調とし、長径は33～41cmを測る。柱間寸法は桁行きで2.50m・2.65mを梁行きで2.00m・2.05mを測る。柱穴底面の標高は480.1～481.3mの幅に収まり、大きな差異は認められない。検出面からの深さはP4のみ42cmと深く、他の3個は14～23cmと浅い。

柱痕は4個の柱穴すべてから検出され、柱痕径は8～10cmを測る。掘形埋土にはL II起源と考えられる黒褐色土が認められ、L IV起源の黄褐色土との混土となる。柱穴内からは、遺物は出土していない。

まとめ

本建物跡は1間×1間の長方形小型建物跡である。南東に隣接する1号建物跡とは、規模や柱穴の形状、建物の構造から、時期的に併行し、同様の性格を有すると考えられる。縄文時代早期に属

する1号竪穴とは重複関係にあり本遺構が新しいが、本遺構の堆積土にLⅡ起源と推定される黒褐色土が認められるため、時期的に近接する可能性は低い。時期について詳らかにする材料は持ちえないものの、周囲における遺物の出土状況や建物の構造から、縄文時代晩期～弥生時代前期に属する可能性を指摘しておきたい。(横須賀)

第3節 土 坑

土坑は2基調査した。2基は互いに離れた位置に存在し、規模・内容とも異なる。2号土坑は縄文時代早期と推定される1号竪穴と重複し、これと年代的に近接する可能性が高い。

1号土坑 SK01 (図15, 図版13)

本土坑は調査区南東側のQ12グリッド北東隅に位置する。地形的には下り勾配の北東斜面で、標高481.4～481.8m付近に立地している。本土坑は平成12年度に実施された試掘調査(福島県教育委員会2001『福島県内遺跡分布調査報告7』)における6号トレンチの南西隅で確認されていたものである。遺構検出面はLⅣ上面で、明黄褐色の地山に明瞭な黒褐色の円形の範囲が確認できた。重複する遺構はない。北西側12mに2・3号竪穴状遺構が所在する。遺構の調査は北東側を半截して掘り下げ、記録を行った後、残った南西側の北西部分をさらに半截して斜面上位からの土の流入状況を観察した。

遺構内堆積土は6層に分層できた。土層の堆積状況から自然堆積と判断され、漸次埋没していったものと考えられる。堆積順序は、次のとおりである。周壁の崩落土と判断できるℓ5・ℓ6が最初に崩れて壁際に堆積し、続いて黒色土であるℓ4が流入する。再び周壁の崩落土であるℓ3が壁際に堆積した後、黒色土を基調としたℓ1・ℓ2が窪地と化した遺構を埋める。

本遺跡の平面形は不整な円形を呈している。規模は南北75cm、東西72cm、検出面からの深さは最も深い南西側で35cmを測る。周壁は北側および東側では、ほぼ垂直か外傾するが、南側及び西側では床面近くが10cm程抉れている。底面は平坦である。

本遺構からは遺物が出土していないなど、その所属を明らかにする材料をもたない。また、性格についても明らかとならない。(笠井)

2号土坑 SK02 (図15, 図版10・13)

本土坑は調査区中央北寄り、L6グリッドに所在する。北東方向に傾斜する緩斜面上に位置し、遺構確認面はLⅣ上面である。検出面の標高は481.4mを測る。遺構の北側で1号竪穴と重複しており、本土坑が古い。この他近接して北側に2号建物跡、南東側に1号建物跡が存在する。

遺構内堆積土は3層に分けられ、堆積状況は主に斜面上位からの自然堆積であることを示す。堆積土はLⅣ起源の土粒を含み、色調はくすんだ暗褐色を基調とする。またℓ2に中からは若干の炭

生時代前期の遺物を包含していた。2号包含層は僅かに遺存した範囲から縄文時代早期の遺物を出土している。

本遺跡は平成12年度に試掘調査され、既に報告済みである（『福島県内遺跡分布調査報告7』）。試掘調査では多数の遺物が出土し、その際のトレンチの面積は大きな割合を占める。そのため、特徴的な遺物について本調査分と併載した。トレンチの位置は平面図上で示し、遺物点数については適宜位置するグリッドに振り分けた。また出土層位は本調査の層位と対応させ、試掘LⅡ→LⅡa、試掘LⅢ・Ⅳ→LⅡbとして記載している。試掘調査報告書に記載のある遺物については、右下に試掘調査報告書の挿図番号を付した（例：試25-10）。

1号遺物包含層 SH01

概要（図16，図版14・15）

本包含層は調査区の中央から西側，G～M4～8グリッドの範囲で確認された。試掘トレンチは5・8～11・13～15号トレンチがこの範囲に存在する。遺物はLⅡとした黒～黒褐色土より出土しており，上記の範囲を包含層と認識したものである。LⅡは色調からさらに分層が可能であり，上位の黒色土をLⅡa，下位の黒褐色土をLⅡbと分層した。相対的ではあるが，主にLⅡaからは縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭，LⅡbからは縄文時代前期後半の土器が出土している。

本包含層の広がる範囲は，北東方向になだらかに下る緩斜面上に位置する。包含層上面あるいは中位から遺構は検出されず，包含層の形成要因は南～南西側に横たわる小丘陵に求められる。この小丘陵は，調査区と約50mの比高を有し，尾根の面積も狭い。ただし，丘陵の中腹には平坦に近い緩斜面が数箇所認められ，ここに集落が存在した可能性は高い。

遺物（図16～24，図版17～22）

時期比定の可能であった土器の総点数は545点であり，図16の下半に分布状況を示した。また，時期別・層位別の土器分布状況は図17・18にそれぞれ示す。時期別による土器の分布状況に顕著な偏りは見出せない。なお1点のみ縄文時代早期の土器が認められている。

図19 縄文時代早期中葉から前期後半の土器群である。1は幅2mm前後の細沈線文を横位多条に施文し，その下に幅5mm前後の斜位太沈線文を配する。太沈線文の断面形は丸みを帯び，丸棒状工具により押し引かれている。胎土には長石を多く含み，色調はにぶい黄橙色，焼成は堅緻である。縄文時代早期中葉，田戸下層式期に比定される土器片である。

2～8は胎土に多量の繊維が混和されており，長石を多く含む。色調は褐色を呈するものが多い。すべてにS字状連鎖文が認められ，同一個体を含む可能性がある。縄文時代前期前半，大木2b期の土器群である。

9～18は縄文時代前期後半期に属する関東系の土器群である。9は文様帯の破片が一定量認められた。口縁部から大きく開き，平縁となる深鉢であり，復元口径は26.0cmを測る。地文にはLR縄文が認められ，口縁部から胴部にかけて半截竹管による文様が描かれる。文様帯は平行する横位沈

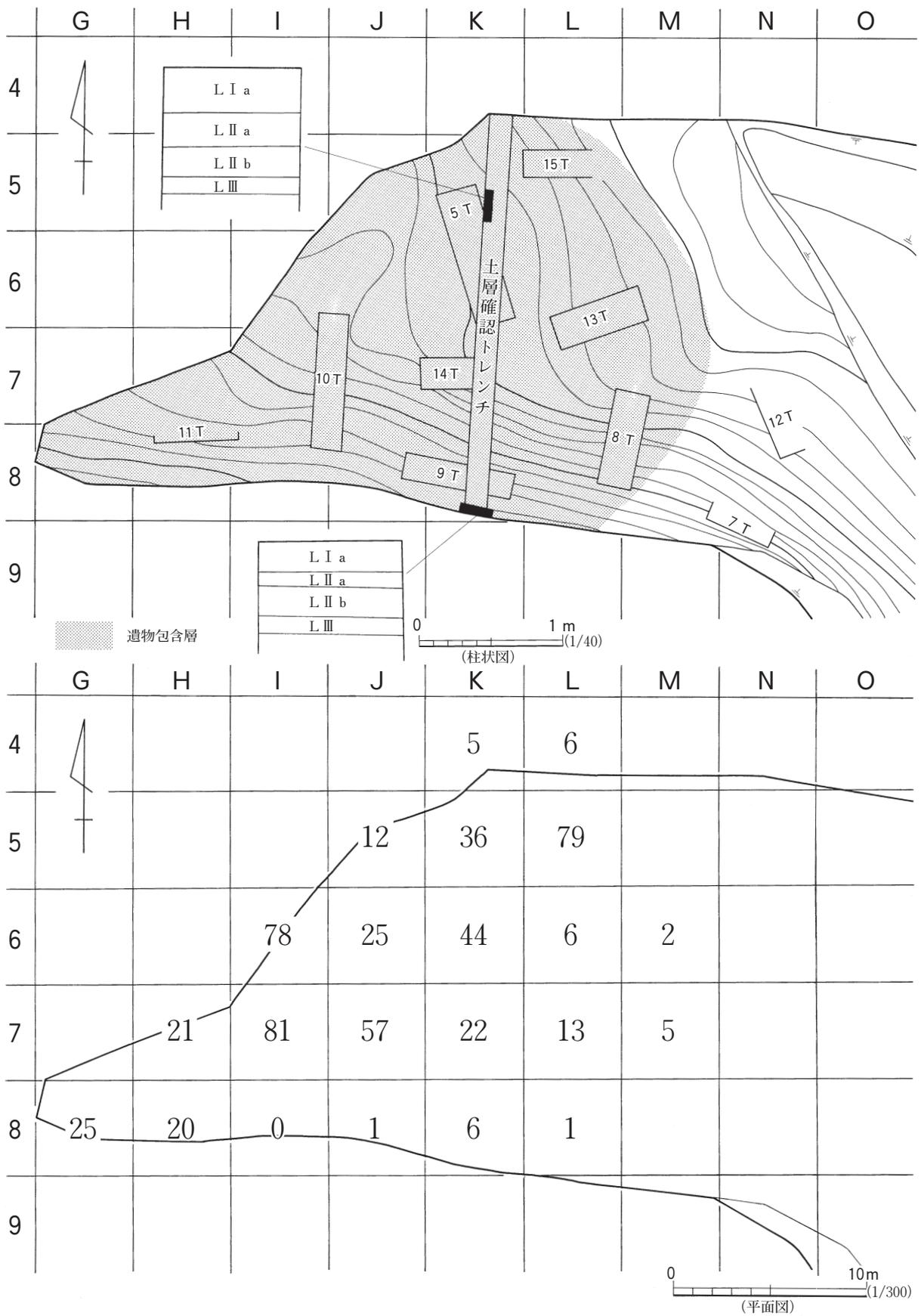
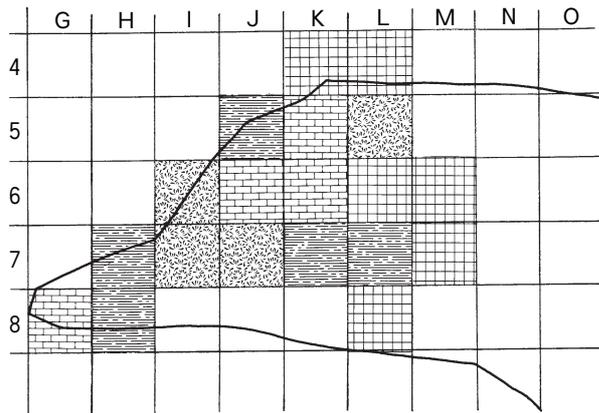
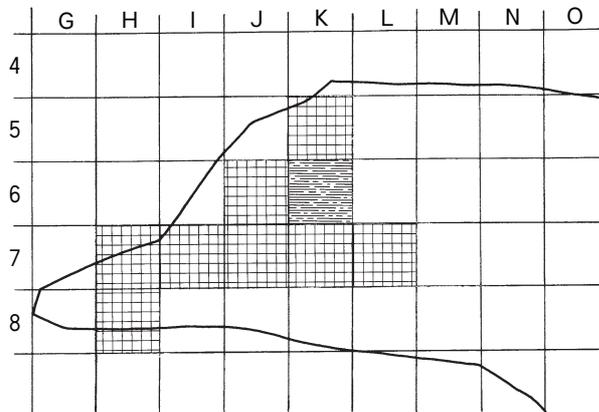
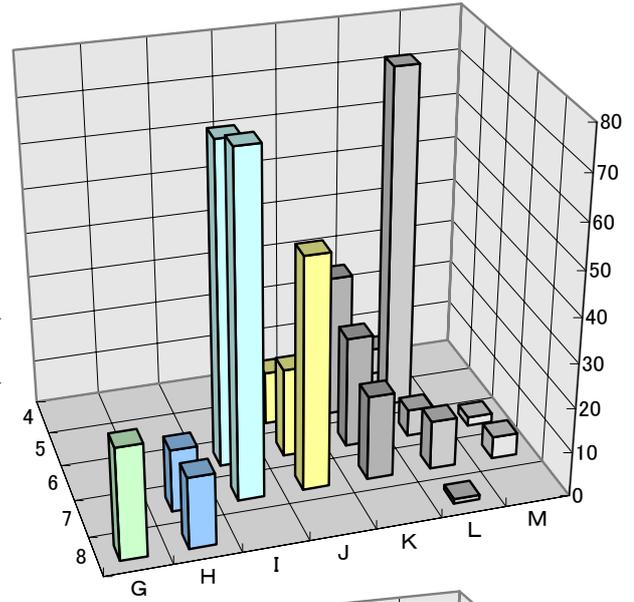


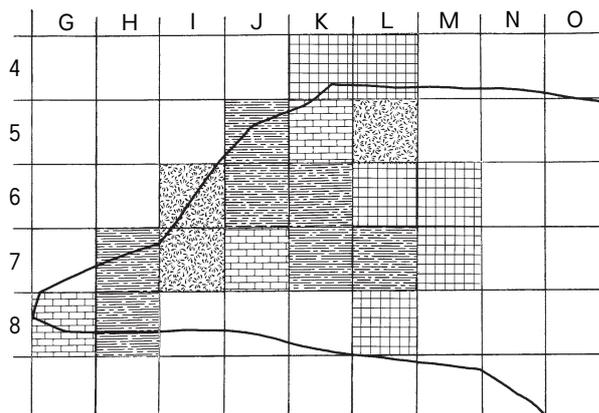
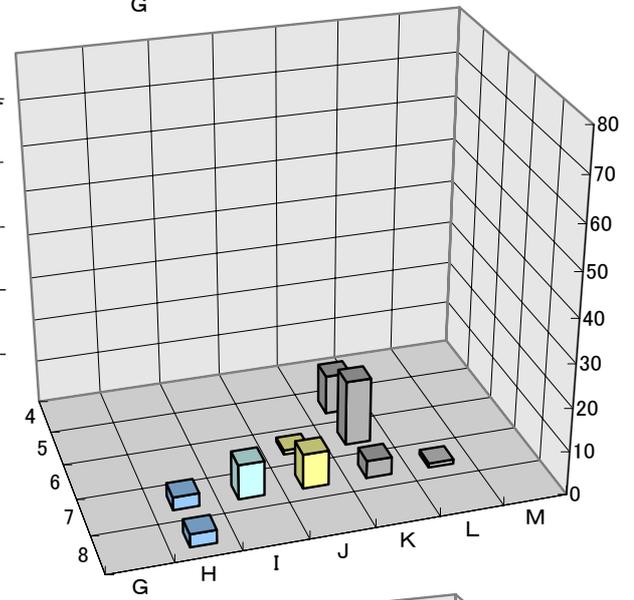
図16 1号遺物包含層範囲・出土遺物分布状況



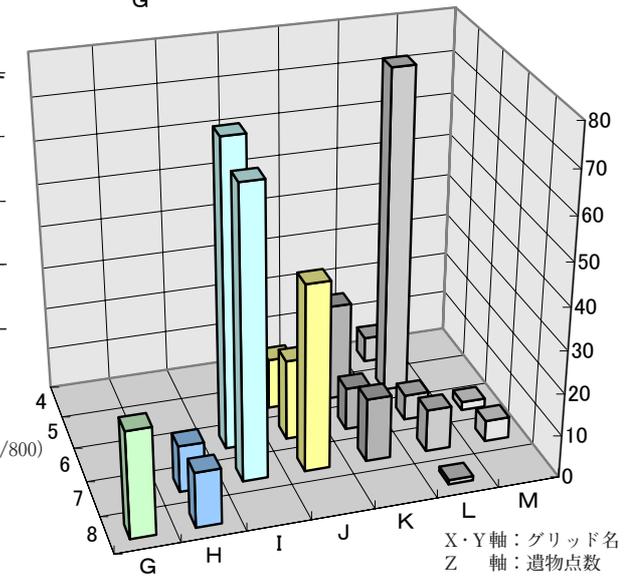
縄文前期 合計 476点



縄文前期L II a 52点



縄文前期L II b 424点



X・Y軸：グリッド名
Z 軸：遺物点数

図17 時期別遺物分布状況(1)

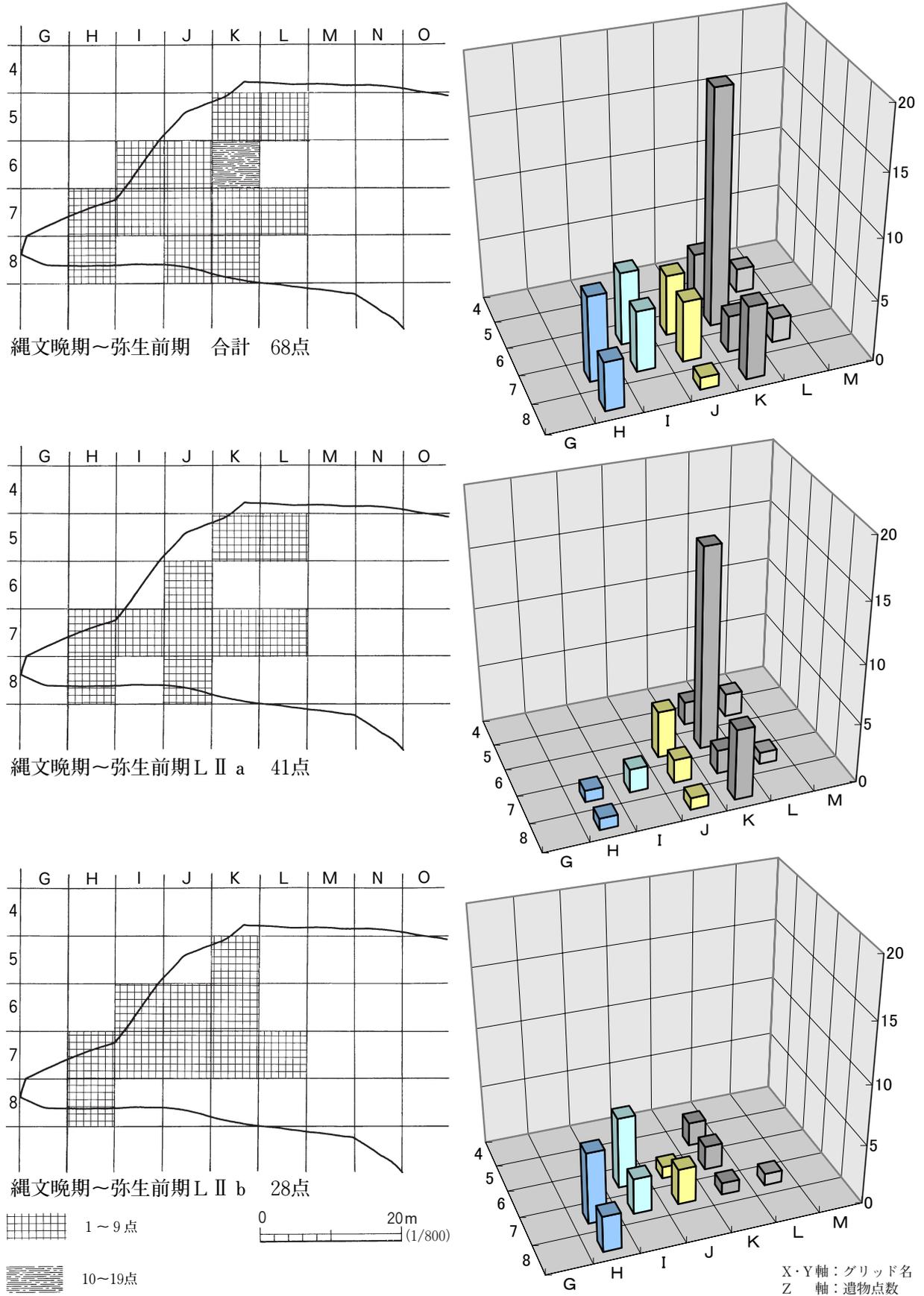


図18 時期別遺物分布状況（2）

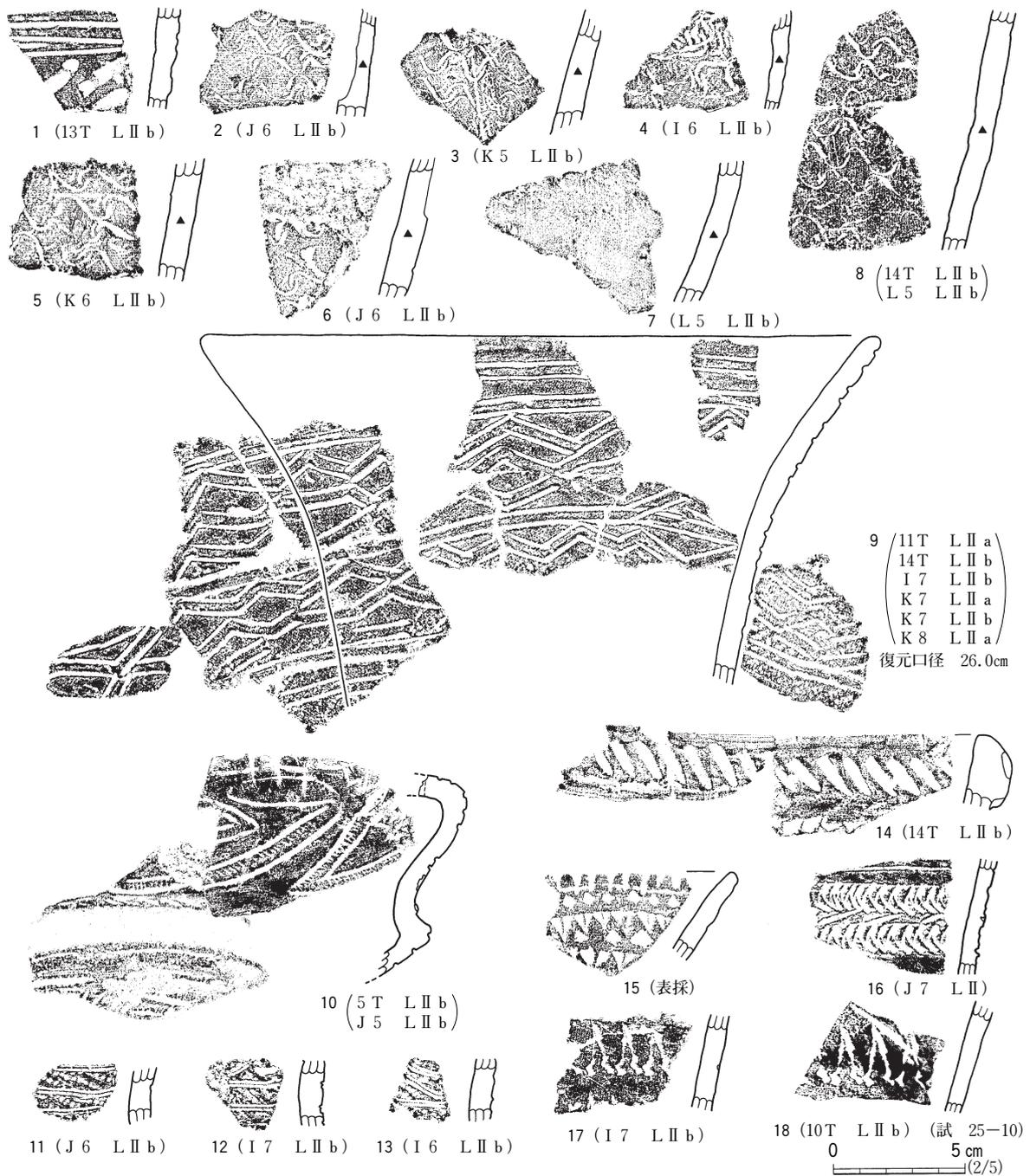


図19 1号遺物包含層出土遺物(1)

線によって2段構成となり、上・下の各区画帯には連続山形文を2段に配し、菱形風の文様が描出されている。10は貫通孔の認められる浅鉢形土器である。孔は3箇所確認できた。平行沈線間に短沈線を充填する入組木の葉文が認められ、屈曲部直上には刻目を有する浮線文が横位に巡る。11～13は土器の文様構成・胎土などから同一個体と考えられる。幅2.5mm程の極めて細かい横位、あるいは波状の平行沈線が施文され、地文にはRL縄文が認められる。

14・15は深鉢の口縁部である。14は口縁部に斜位の深い短沈線を巡らす。また、口縁部下端には三角文が認められ、横位に巡ると考えられる。内面には丁寧な横位のミガキが観察され、器面は光

沢をもつ。15は口唇部に縦の条線を巡らせ、これに重なるように一本沈線が横走する。またこの下には横位に巡る三角文列が多段に施文されている。16には変形爪形文が認められ、文様帯の下端を区画しているものと考えられる。17・18には波状貝殻文が認められる。胎土の特徴として、9・11～13は粒の大きい長石及び雲母を多く含み、この他は比較的精良である。色調は11～14が橙色、他は褐色～暗褐色を呈している。

9～13は諸磯式系、14～18は浮島式系の土器群と考えられ、概ね諸磯b式期、浮島Ⅱ～Ⅲ式期に比定されよう。11～13については、大木系に属する可能性も考えられる。

図20 縄文時代前期後半～末葉の土器群である。1～3の口唇部端は平坦状につくられ、1には小突起が認められる。3点とも口縁部と胴部が結節回転文によって画され、口縁部は無文である。1～3は同一個体である可能性が高い。4は口縁部まで直線的に立ち上がる器形を呈し、口唇部は外削ぎ状となる。文様帯は認められず、RLの単節斜縄文が多段に施文されている。内面には横・斜方向の擦痕状のナデが顕著に認められる。5は口縁部無文帯内、及び口縁部と胴部の境に横走する2段の平行沈線が認められる。6・7は口縁部に幅広の半截竹管による深い平行沈線が横走する。7は口縁部と胴部を画す沈線から、斜方下位に伸びる沈線が確認できる。8・9は斜位及び横位に有節平行沈線が認められ、文様を描出するようである。10・11は1条の有節沈線のみ確認できるが、8・9と同様に半截竹管による有節平行沈線である可能性が高い。12は口縁部が直線的に開き、口唇部端には口縁部に平行した刻目をつける。また胴部には2条の沈線が斜位に認められるが、文様として意識されたものか判然としない。地文は単節RL斜縄文である。

1～12の胎土には長石、雲母が多く含まれ、また焼成は堅緻であるなど共通した要素が認められる。以上は大木系の土器群である可能性が高く、縄文時代前期後半、大木4式期に比定される。

13は口縁部が外反し、若干肥厚する小型の深鉢であり、復元口径は18.0cmを測る。口縁部は無文となり、直下に隆線が巡る。胴部は単節LR斜縄文が施文されている。14は口唇部端に等間隔の刻みが認められる。15の口縁部は隆帯によってメガネ状の突起を造出している。口縁部直下は、細かい刻みの入ったソーメン状の粘土紐を貼り付けて文様を描く。またボタン状貼付文も認められる。16は口縁部の外反する深鉢で、復元口径21.4cmを測る。口縁部下端には、連続した三角形の掘り込みが浅く造出される。頸部以下の胴部には僅かに結節回転文及びLR斜縄文が観察される。17は口縁部が「く」の字状に外反する大型の深鉢であり、復元口径は33.6cmを測る。口唇部及び口縁部下端に刻みを付した隆線が巡り、これを跨ぐように口唇部から垂下する縦位の隆帯が付されている。頸部以下には単節LR斜縄文が観察される。18・19は板状に伸びる口縁部片であり、上端がやや肥厚する。18の口縁部は波状を呈し、波頂部には3条の刻みが認められる。18・19とも口縁部下端に斜位の深い刻みを付した隆帯が巡る。また両者とも口縁部上半にLR斜縄文が施文される。20も板状を呈し、波状となる口縁部の破片である。波頂部には1条の刻みが付され、無文帯を挟んで斜めに刻みが付された隆帯が巡る。隆帯の下位には結節回転文、これ以下に複節RL斜縄文が認められる。21も板状を呈する口縁部片であり、波状口縁となる。波頂部に刻みなどは認められない。

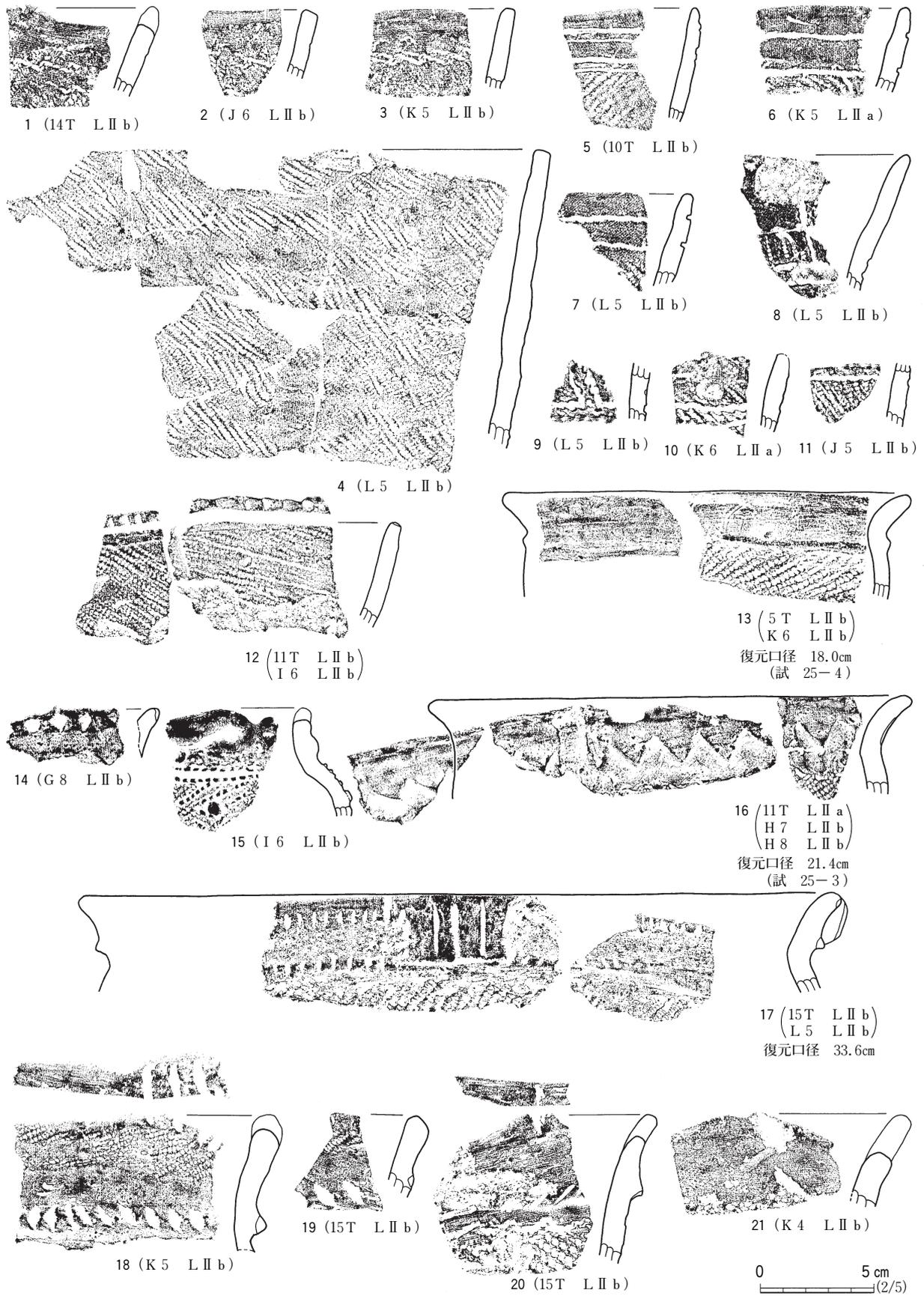


图20 1号遺物包含層出土遺物 (2)

13～21の胎土には長石が多く含まれており、橙～赤褐色の色調を呈するものが多い。これらの土器群は縄文時代前期末、大木6式期に比定される。

図21 1は胴部に最大径を持ち、「く」の字状に外反して肥厚する口縁部に至る深鉢である。復元口径は34.2cmを測る。口縁部は平縁であり、複合口縁状となる口縁部下端には棒状工具による刺突が巡る。刺突列の下位、頸部周辺は無文帯となり、斜位の刻みを付した隆帯によって胴部と画される。また、隆帯の下位、幅4cm程の範囲は細かい刻みの入ったソーメン状の粘土紐を貼り付け、幾何学的な文様を描出している。胴部地文は単節LR斜縄文であり、結節回転文が横走する。内面は丁寧なミガキにより器面が滑らかに整えられ、光沢を有している。胎土には長石、ウンモが多く含まれ、焼成は堅緻、色調は橙～赤褐色を呈する。縄文時代前期末、大木6式期に比定される。

2～4及び図22-1～11は胴部片まとめたものである。2は胴部上半にくびれを持ち、口縁部が外反する深鉢と考えられる。多段に結節回転文が巡り、地文はRLの単節斜縄文が施文される。3・4についても2と同様の器形を呈する深鉢の胴部片と考えられる。3には単節RL斜縄文、4には単節LR斜縄文が施文されている。これらは、器形や器厚などの特徴から縄文時代前期後半、大木4式期のものである可能性が高い。

図22 1～11は時期比定の難しい胴部片である。1・3は単節RL斜縄文、2は複節RL斜縄文がそれぞれ施文されている。3は底部付近、6は頸部周辺の破片である。5には結束の縄圧痕文、6には結節回転文が認められる。4は横位に3条の沈線が認められ、一部斜位に刻まれた沈線が確認できる。地文は単節RL斜縄文であり、沈線は地文上に施文される。内面は横方向にケズリに近いナデが明瞭に観察される。胎土には長石や雲母を非常に多く含む。以上は胎土・器形・器厚などの特徴から、縄文時代前期末、大木6式期のものである可能性が高い。この他、7～10は結束羽状縄文、11には非結束羽状縄文が施文されている。

12～14は底部及び底部付近の破片である。12は底部が張り出す器形であり、復元底径は10.0cmを測る。内外面及び底面とも文様は認められず、調整痕も明瞭でない。13は底部付近の破片であり、結節回転文及び単節LR斜縄文が認められる。14も底部が僅かに張り出す器形を呈し、復元底径は11.0cmを測る。外面の調整痕が明瞭に観察でき、内面には炭化物の付着が顕著に認められた。そのため、拓本記録をa、破片実測及び炭化物の付着範囲を示したものをbとして併載している。外面の調整は底部周辺を横位、それ以外は縦位の顕著なケズリ痕が認められる。これは、底部付近の張り出しの造作とこれに伴う器形の調整を意図したものと考えられる。内面にも縦位のナデが認められるが、外面ほど顕著ではない。内面に付着した炭化物は、濃淡があるものの、遺存部のほぼ全域に認められた。

図23 縄文時代晩期末から弥生時代前期を中心とした土器群である。1～3・6・7は鉢形土器の口縁部片である。1は深鉢の口縁部であり、大きく「く」の字状に外反する器形を呈する。口縁部の上端には2条の平行沈線を巡らしている。3についても同様の沈線が2条確認され、口縁部内面上端にも1条の沈線が巡る。2は小さく内湾した後、外反する口縁部の小片である。内湾する屈

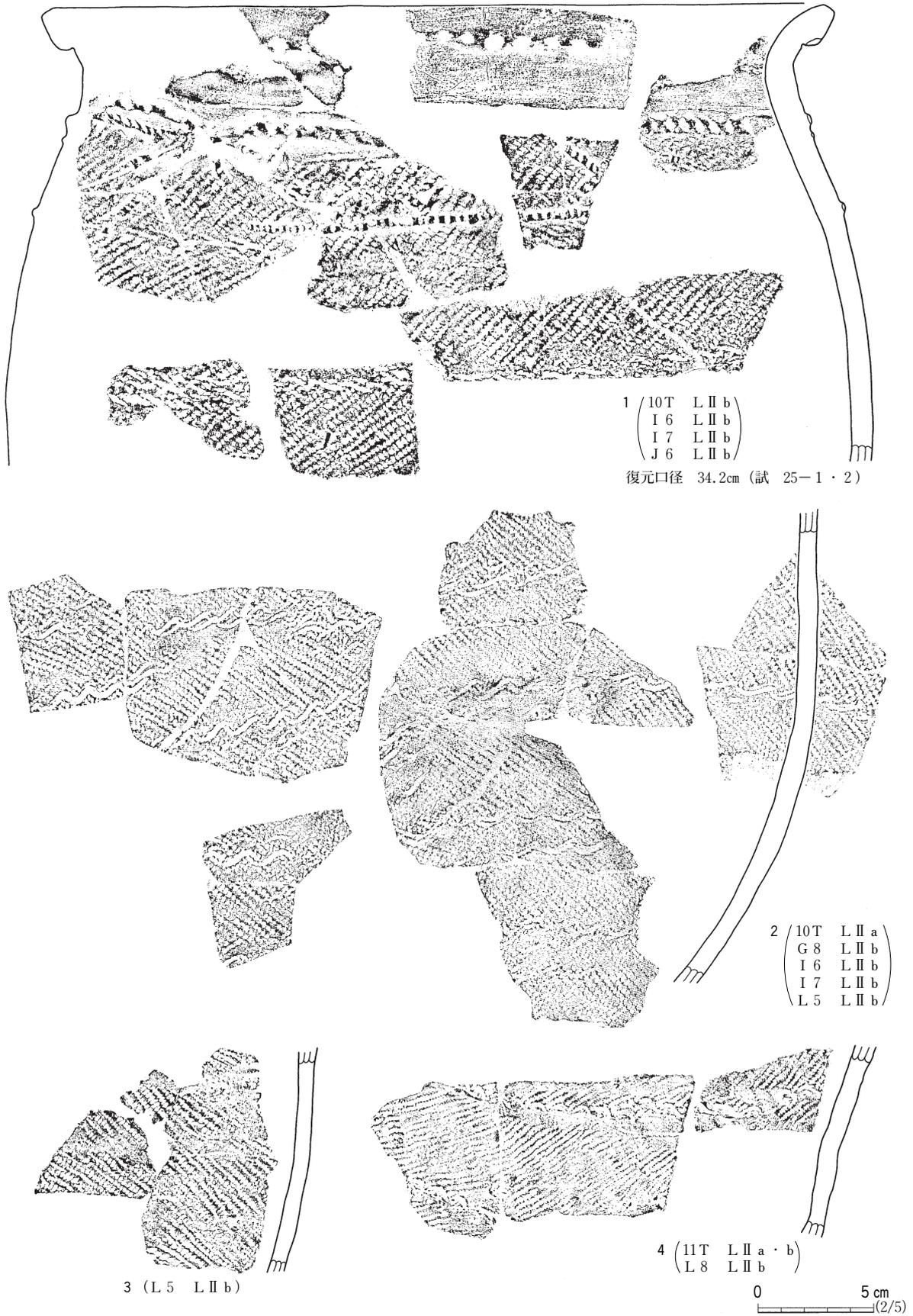


图21 1号遺物包含層出土遺物 (3)

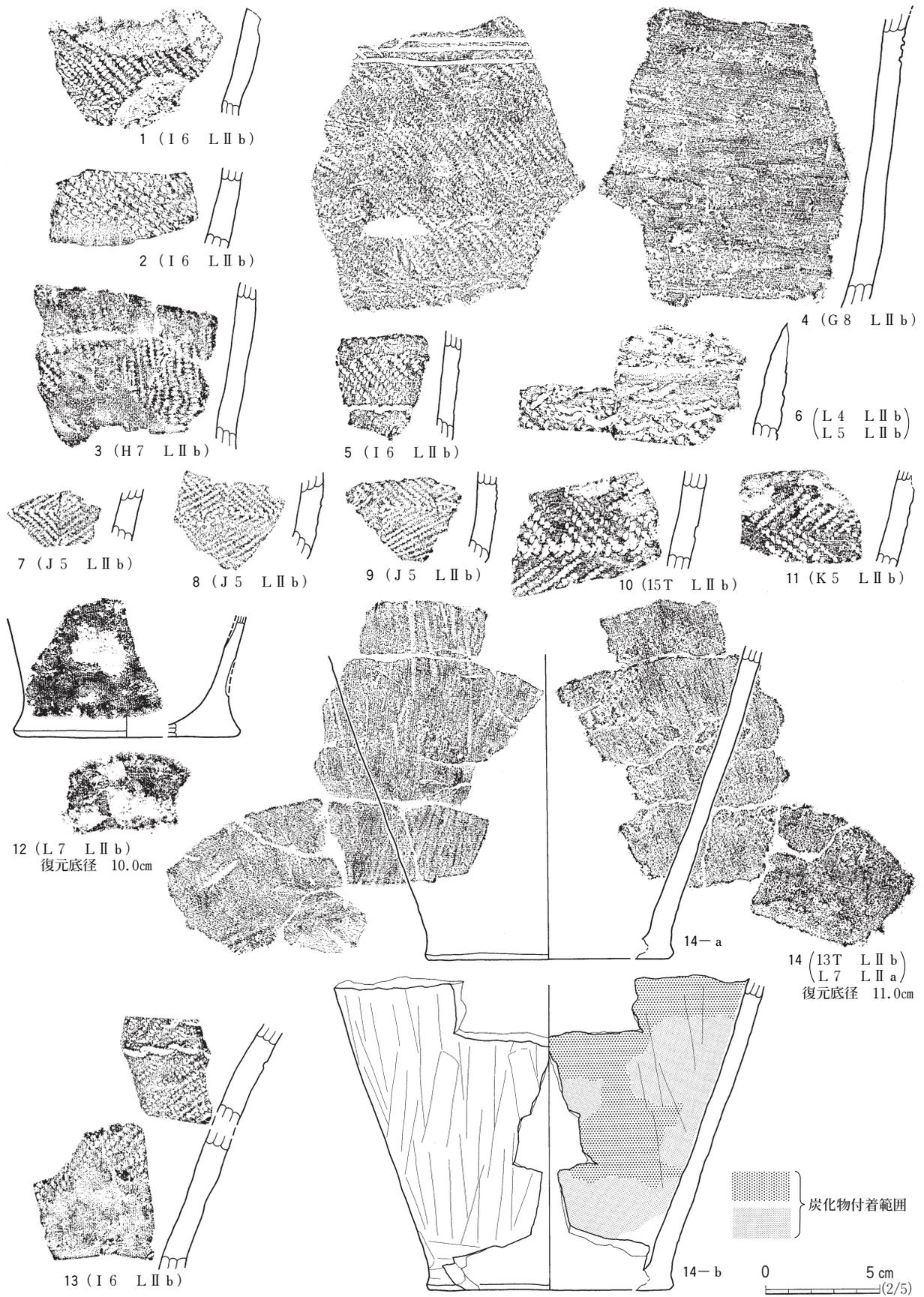


图22 1号遺物包含層出土遺物 (4)

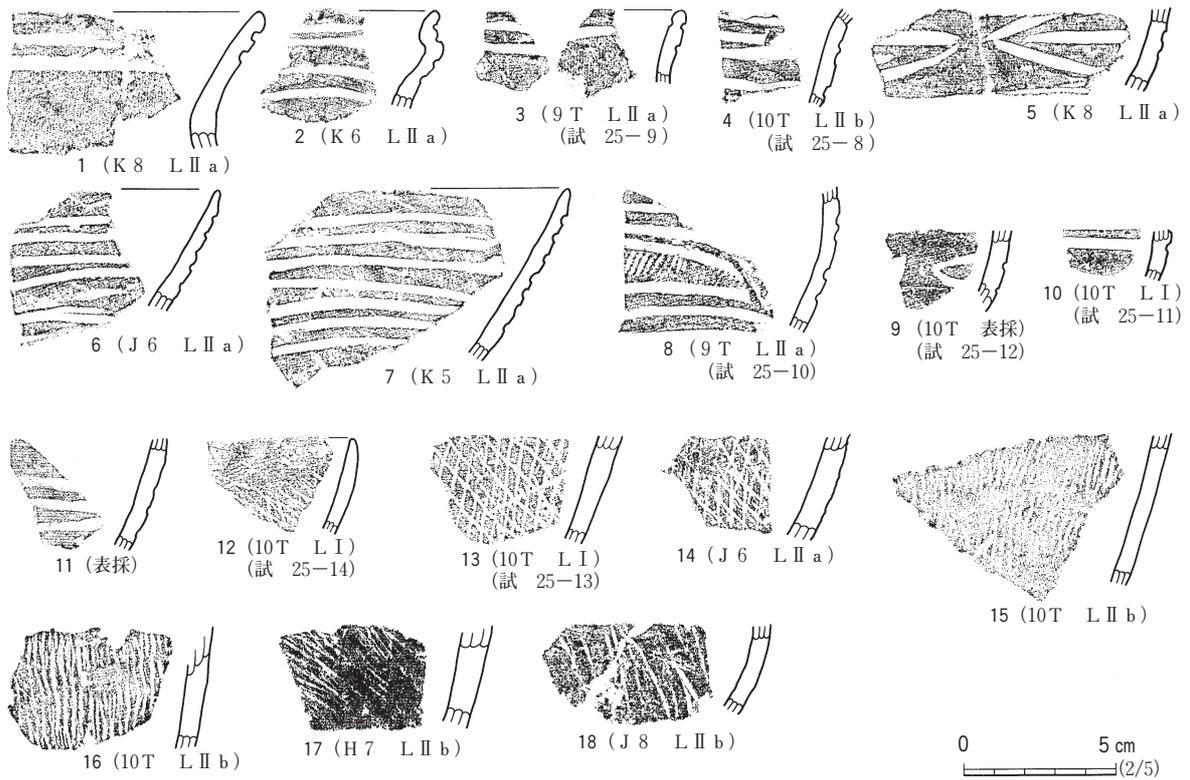


図23 1号遺物包含層出土遺物 (5)

曲部の上下にそれぞれ2条の沈線を巡らす。6・7は同一個体である可能性が高い。鉢の口縁部と考えられ、緩やかに内湾する器形である。外面は無文地に横位の沈線が重層的に巡る。なお沈線内には赤彩された痕跡が若干確認される。4・5・8～11は鉢形土器の口縁部、あるいは胴部の破片である。4には上位の沈線から伸び、下位の沈線を塞ぐπ字文が、5・9には変形工字文がそれぞれ確認される。また、8の沈線間中には磨消縄文が認められる。

12は粗製土器の口縁部である。口縁部直下は無文帯となり、地文に網目状撚糸文が認められる。13～18は地文のみ認められる粗製土器の胴部片である。13・14は網目状撚糸文、15・16には縦位の条痕文が、17・18にはハケメ状の条痕文が施文されている。以上の土器群は弥生時代初頭頃を中心として、縄文時代晩期末～弥生時代前期、概ね大洞A'式～御代田式期の土器群として捉えることが可能である。

図24 石器は5点のみ図示しえた。1・2は石鏃である。1は凸基有茎鏃、2は挟り込みの深い凹基有茎鏃であり、石材は両者とも流紋岩である。3は試掘調査時に出土した石槍である。全長8.6cm、基部幅3.9cmを測り、石材は流紋岩である。4は二次的な調整が認められたため不定形石器とした。石材は珪質頁岩である。5は分銅形の打製石斧である。石材は粘板岩が用いられている。

まとめ

本遺物包含層からは、縄文時代早期中葉（田戸下層式期）、前期前半（大木2b式期）、前期後半（諸磯b式期・浮島Ⅱ～Ⅲ式期・大木4式期）、前期末（大木6式期）、晩期末～弥生時代前期（大洞A'～御代田式期）と大きく4時期の遺物が認められたことになる。特に主体となるのは前期後半

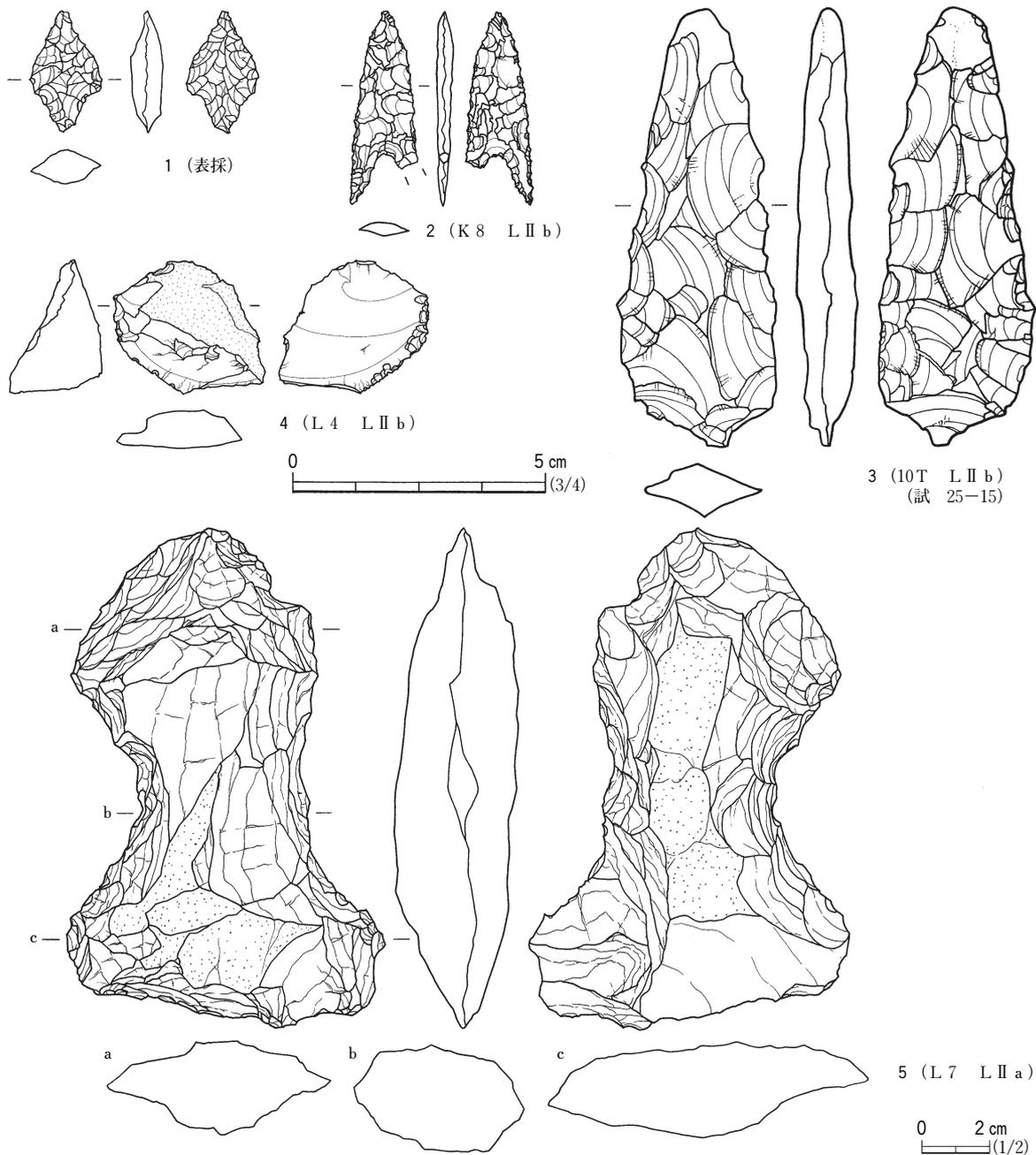


図24 1号遺物包含層出土遺物(6)

～末にかけての遺物であり、周辺に該期集落の存在を予想させるに十分な量といえよう。本包含層の形成要因となった集落は、地形的な観点から南～南西側に横たわる丘陵の尾根、あるいは中腹の緩斜面上にその存在が求められる。(横須賀)

2号遺物包含層 SH02

概要(図25, 図版15)

本遺物包含層は調査区の南東端, R・S10・11グリッドの範囲で確認された。調査区東端からは昭和前半期の県道が確認され, その敷設時に原地形が大幅に改変されている。包含層となる黒褐色

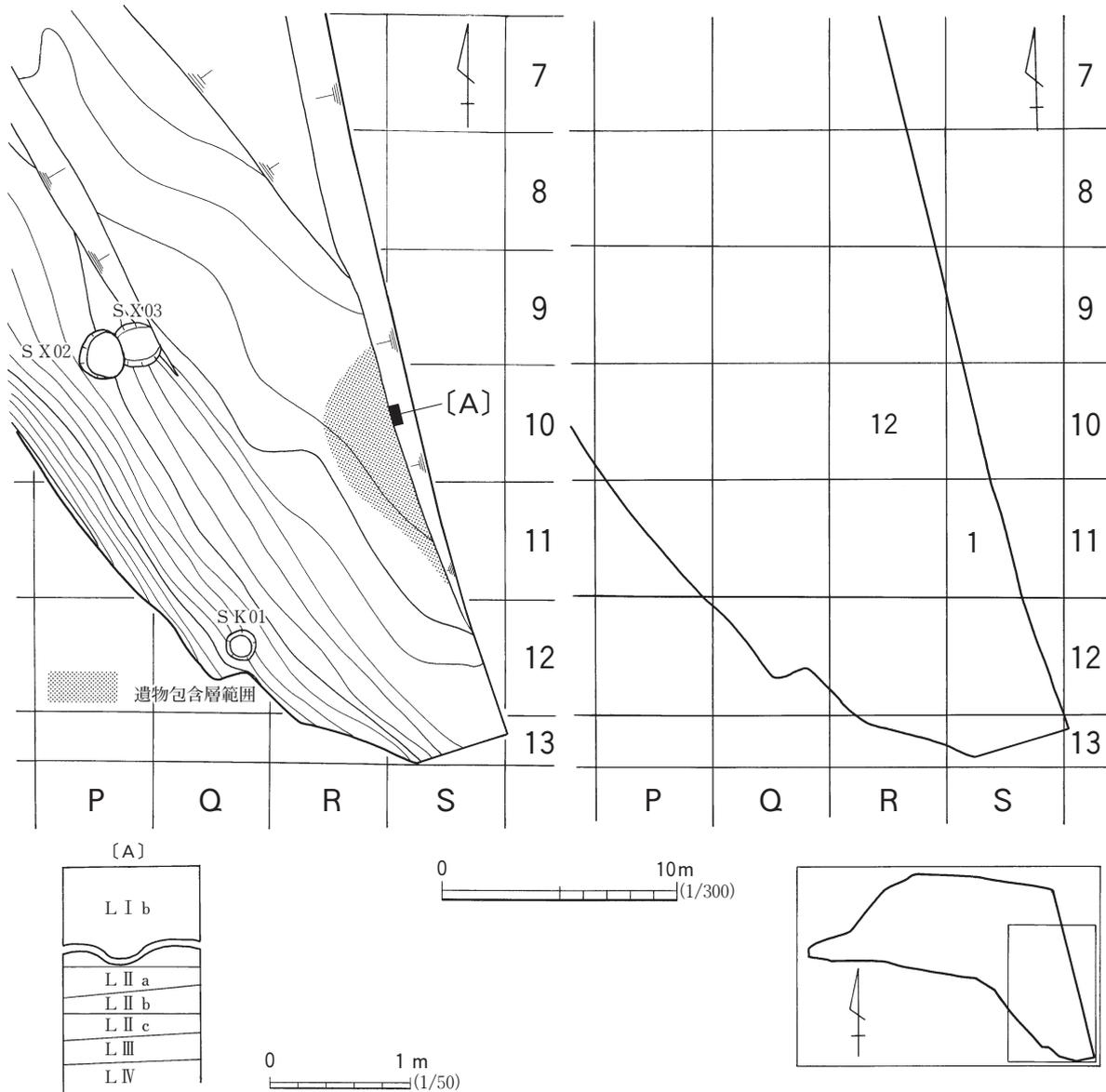


図25 2号遺物包含層範囲

土は辛うじて削平を免れ、確認されたものである。そのため本来この黒褐色土及び包含される遺物は、地形的な観点からさらに北西方向に広がっていたものと考えられる。また黒褐色土は東側現県道下まで伸びており、包含層範囲がさらに拡大する可能性がある。

黒褐色土は1号包含層同様分層が可能であり、色調からL II a～L II cとした。L II cはこの範囲にのみ認められ、雲母を多量に含む特徴がある。遺物はすべて土器であり、ほとんどがこのL II c中から確認されている。

遺物 (図26, 図版23)

出土総点数は13点のみであり、このうち8点を図示しえた。2・3はL II b下位、1・4～7はL II c、8はL II c上面から出土したものであり、胎土中に1～7には少量、8には多量の繊維が混入されている。1～3は無文土器の口縁部である。1は口唇部が平坦状を呈し、口縁部端がやや肥厚する。外面には横方向のミガキが観察される。2は遺存状態が良くないが、口縁部端はあまり

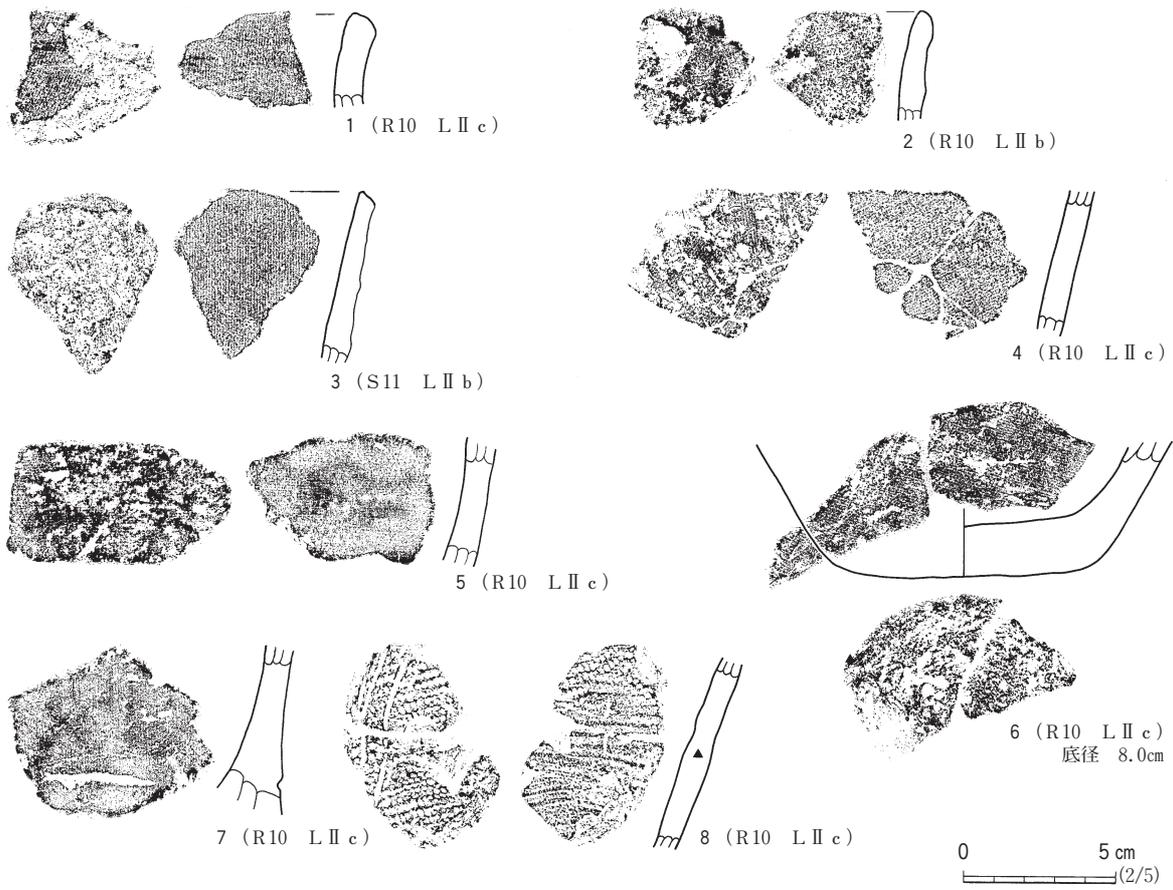


図26 2号遺物包含層出土遺物

肥厚せず、わずかに平坦状となる。3は外面が剥落しているが、1と同様平坦状を呈すると考えられる。4は無文土器の体部片である。調整は判然としない。5～7は底部及び底部周辺の破片であり、同一個体と考えられる。底部は平底だが、完全な平坦とはならない。底部周辺には横方向のケズリ痕が明瞭に残り、最終的にはミガキが施されている。内面は非常に平滑である。1～7は層位的に乱れも少なく、器形や調整の特徴、確認された範囲で無文土器のみの組成となることから、縄文時代早期前葉、撚糸文系土器期末葉に比定される。

8は縄文時代早期末、縄文・条痕文系の土器である。外面には単節LR斜縄文が施され、縦位の平行沈線が認められる。内面上部には縄文が、中位から下位には条痕文が認められる。

ま と め

本包含層からは、縄文時代早期前葉（撚糸文系土器期末葉）、早期末葉（縄文・条痕文土器期）の遺物を10数点確認した。時期比定が可能なものについては、1点を除いて、早期の無文土器である。本包含層の上位において、該期の遺構群（竪穴状遺構4基、土坑1基）が調査されている。そのため、本包含層の形成要因は西～北西側に展開するこれら該期遺構群に求められる。（横須賀）

第4章 ま と め

沢目木遺跡からは、縄文時代早・前・晩期、弥生時代前期の遺物が出土し、縄文時代早期の遺構群を確認している。年代は幅広いが、各時期の遺物とも出土量は多くない。ここでは比較的資料のまとまっている縄文時代早期及び同前期後半～末葉の土器について、その特徴を抽出し、編年的位置付けを中心に検討していきたい。また、縄文時代早期の遺構群についても若干触れておきたい。

第1節 縄文時代早期

1. 縄文時代早期の無文土器について

1・2・4号竪穴状遺構、2号遺物包含層から出土した縄文時代早期無文土器群について、その特徴をまとめ、編年的位置付けを中心に検討していきたい。なお適宜略号を用いる（例：2号竪穴状遺構→2号竪穴・SX02）。

1) 沢目木遺跡出土の無文土器（図27）

①出土状況 図示した個体数は14点、内訳は1号竪穴（1点）、2号竪穴（4点）、4号竪穴（1点）、2号包含層LⅡb・c（7点）である。SX02では口縁部片4片とも無文土器である。またSH02出土土器は層位的乱れが少なく、包含層の範囲が限られるため時期的に限定が可能である。

②特徴の抽出 以下、観察属性ごとにまとめる。

器形：口縁部の破片は8点であり、すべて深鉢である。口縁部の形態は、僅かに外反（SX02-1・2、SX04-1）、ほぼ直立（SX02-3、SH02-2・3）、やや内湾（SX02-4）する。底部2点は同一個体であり、平底である（SH02-5・6）。

計測値：推定が可能な個体は口縁部3点、底部1点。口径23.4～27.7cmの大型（SX02-1、SX04-1）、口径13cmの小型（SX02-2）が存在する。底径は推定8.0cmを測る（SH02-6）。

口唇部：平坦状（SX02-1～3、SX04-1、SH02-1・3：これらの口唇部は完全な平坦ではなく、やや丸みを残す）。丸頭状（SX02-4、SH02-2）に分かれる。また口縁部に至って肥厚するものがある（SX02-3、SX04-1、SH02-1）。

器厚：大きく、0.8cm以上～1.0cm未満の厚手（SX02-1・3、SX04-1、SH02-1・3～5）、0.5cm以上～0.8cm未満のやや薄手（SX02-2・4、SH02-2）に分かれる。

器面調整：外面の口縁部周辺は横方向ケズリ→同方向ミガキが施され、滑沢を有する。外面の胴部は縦方向ケズリ→同方向ミガキである。内面は横～斜方向のナデを基本とし、整えられる。

繊維含有：微量の繊維を含有するものが存在する（SX04-1、SH02-5・6）。

胎土：長石や石英粒をやや多く含む点で、共通する。

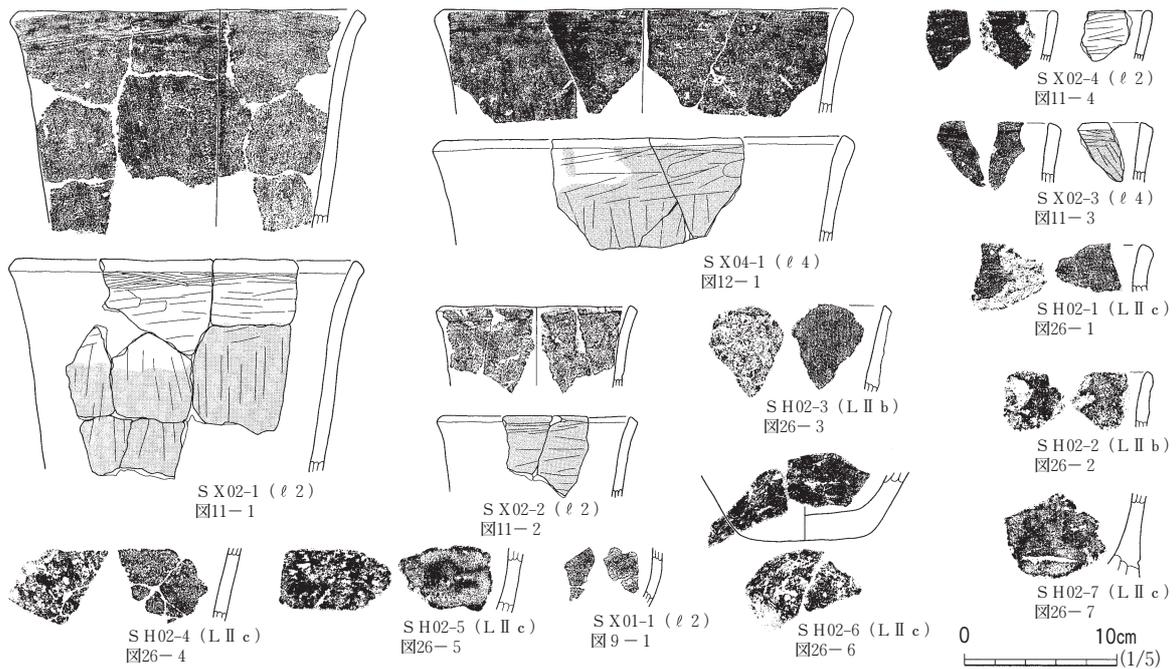


図27 縄文時代早期の無文土器

2) 県下における無文土器の編年的検討

次に福島県下における縄文時代早期の無文土器について整理し、本遺跡資料の編年的位置を明らかにしたい。ここで扱う無文土器は、本稿の性格上、撚糸文系土器期後半以降のものに限りたい。

①方法論の提示と観察属性の抽出 県下において無文土器を出土した遺跡のうち、資料としてまとまっている22遺跡を対象とする(図28)。まず無文土器の属性から編年的指標となるものを抽出し、属性毎に分類する。次にこれを層位的見地が得られる遺跡(塩喰岩陰・松ヶ平A遺跡)、時期的に限定が可能な遺跡(大村新田・沢目木・一里段A・前原A遺跡・仲ノ縄B遺跡)の資料と対照させ、その段階表象を顕在化させる。最後に層位的検討・型式学的連続性の検討・伴出資料を基に序列化を行う。明確な型式学的表象が少なく、かつ属性ごとのバリエーションが豊富な無文土器の理解については、個々に土器を分類するのではなく、「群」として捉えることの有効性を優先させたい。

無文土器の観察属性としては、器厚・器形・口唇部断面形・調整手法・計測値・胎土・繊維含有の有無が挙げられる。このうち変化の方向性を捉えるのに有効な、器厚・器形・口唇断面形・調整手法を分類属性とする。図29上に観察属性毎の分類項目を並記した。これらは、あくまで相対的な分類である。なお基準資料とした上記7遺跡の資料についてはすべて実見を行っている。

②無文土器の変遷 本来であれば研究史の整理や個々の資料についての詳述など検討過程の提示が必要であるが、本稿の制約上ここでは先述した方法で各遺跡の資料を序列化し、段階表象を提示してゆく。また段階の右に基準資料を提示する(図29)。

第I段階 [塩喰岩陰遺跡(芳賀1994) SH-L 8~L 7 b, 大村新田遺跡(芳賀1989) SH, 仲ノ縄B遺跡(山岸1993) S I 05・09]

組成: 仲ノ縄B遺跡 S I 05・09は無文土器のみ, 他の2者は撚糸文・縄文施文の土器を伴出する。

器厚：5mm前後（A）を測る資料が圧倒的である。注意すべきは塩喰岩陰遺跡L7b層から8mm前後（B）を測る、やや厚手の無文土器が少量出土している。

口唇部形態：丸頭状で端部が内外面とも肥厚（I）するもの、丸頭状（II）のものが主体を占める。

器形：わずかに内傾した後外反する（a）、ほぼ直立する（b）、内湾する（c）が認められる。

外面調整：表面に滑沢を有する（②）も認められるが、ナデ（①）が主体である。口唇部周辺のみ横位、これ以下の胴部は縦・斜位に調整を行うものが多い。内面には指頭圧痕を残すものが認められる。

編年的位置：伴出した撚糸文系土器の特徴から、夏島式～稲荷台式古相に併行する時期とする。ここでは、東北地方に分布するいわゆる「薄手無文平底土器」についての議論は行わないが、本段階は東北的な「薄手無文平底土器」と関東的な「撚糸文系尖底土器」（芳賀1989）が相互に影響し合った地域的な一様相と理解している。仲ノ縄B遺跡S I 05・09の資料は撚糸文・縄文施文の土器を伴わないが、その影響については指摘されており（山岸1993・1996）、属性内容からも本段階に含めた。この他、本段階に併行すると考えられる資料は赤沢B遺跡（佐藤2001）、高渡遺跡（伊東2001）に認められる。

第II段階（塩喰岩陰遺跡SH-L7a、仲ノ縄B遺跡S I 08）

組成：塩喰岩陰遺跡では撚糸文・縄文施文の土器を伴出するが、圧倒的に無文土器の割合が高い。仲ノ縄B遺跡S I 08は無文土器のみが出土している。

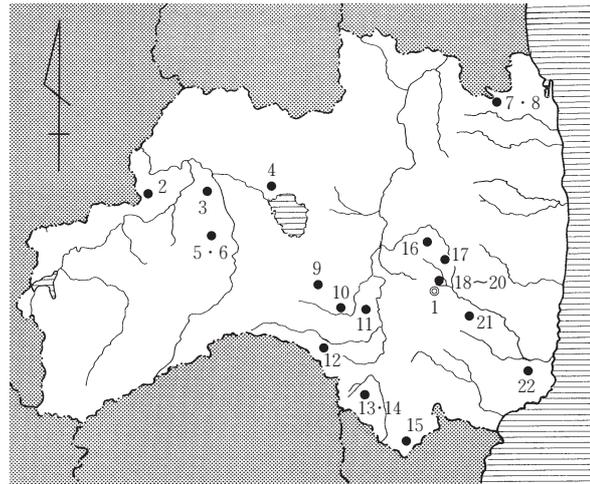
器厚：5mm前後の（A）も存在するが、8mm前後の（B）が圧倒的となる。

口唇部形態：（I）はその割合を減らし、丸頭状の（II）が主体となる。また、この段階において口唇部や内・外角に丸みを残す平坦状の（III）、尖頭状となる（IV）が出現している。

器形：前段階に見られた（a）・（c）は少なく、直立する（b）が主体的になる。また、この段階にわずかに外反する（d）が出現している。また平底の底部の存在が注意される。

外面調整：口唇部周辺に横位、胴部に縦・斜位のミガキ（②）を加えるものも多く、表面は滑沢を有する。また前段階に比して横位調整の幅が広がる。内面は横～斜位のナデが顕著である。

編年的位置：伴出した撚糸文系土器の特徴やミガキ調整の卓越、外反する器形の出現などの属性内容から、稲荷台式新相～稲荷台式直後の時期に併行するとしておきたい。仲ノ縄B遺跡S I 08の資料については、口唇部形態や器厚などの属性内容から本段階に含めた。これはS I 09との重複関係とも



No.	遺跡名	位置	No.	遺跡名	位置
1	沢目本	小野町雁殿田	12	二里段A	白河市白坂
2	塩喰岩陰	西会津町	13	中丸	棚倉町福井
3	大村新田	会津坂下町勝	14	日向前B	棚倉町棚倉
4	角間	磐梯町更科	15	高渡	矢祭町宝坂
5	北平	会津高田町松坂	16	仲ノ縄B	船引町春山
6	下谷ヶ地平C	会津高田町松坂	17	馬場平B	大越町栗出
7	松ヶ平A	飯館村大倉	18	小滝	小野町吉野辺
8	羽白C	飯館村大倉	19	鴨ヶ館	小野町飯豊
9	寺山A	長沼町江花	20	長久保	小野町飯豊
10	前原A	天栄村大里	21	竹之内	いわき市三和町下市管
11	赤沢B	矢吹町赤沢	22	龍門寺	いわき市平下荒川

図28 無文土器出土遺跡

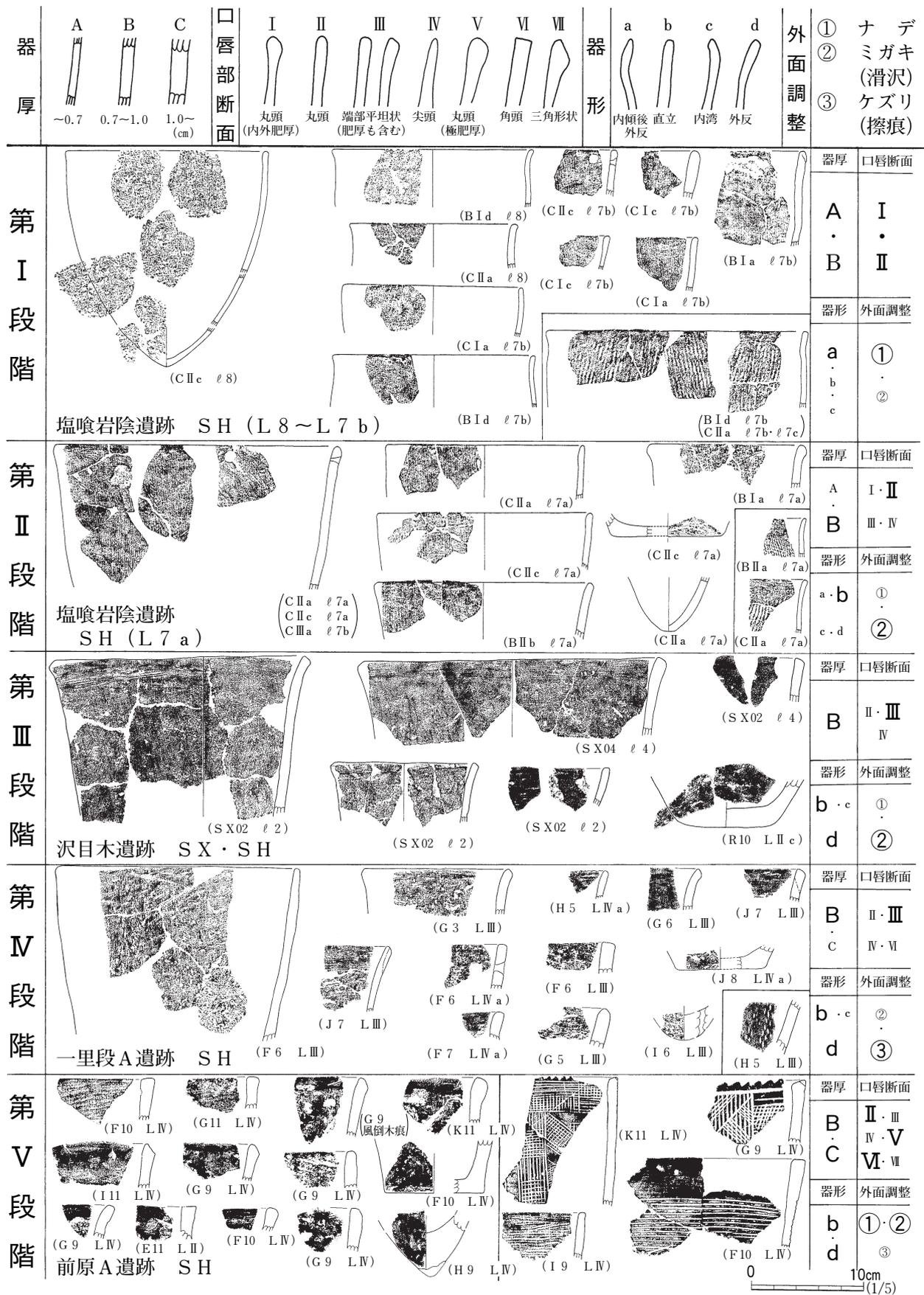


図29 県内における無文土器の変遷

矛盾しないが、第Ⅰ段階としたS I 05・09資料との属性内容に差異は少なく、仲ノ縄B遺跡出土の無文土器は時期的に連続し、Ⅰ・Ⅱ段階の過渡的な資料と位置付けられるかもしれない。

本段階は、稲荷台式期の撚糸文系土器を伴うことが多く、ミガキ調整の卓越化・横位調整幅の拡大・平坦状口唇部の出現・口縁部外反する器形の出現など、関東からの影響を顕著に受けた段階と捉えている。この他、角間遺跡（山岸1990）、龍門寺遺跡（高島1985）の資料がこの段階に併行する可能性が高い。なお、鴨ヶ館跡（1994）の資料は第Ⅱ・第Ⅲ段階の過渡期と捉える。

第Ⅲ段階（沢目木遺跡S X・SH-LⅡ b・c、松ヶ平A遺跡（鈴鹿1984）SH-LⅦ a・b）
組成：ほぼ無文土器のみで組成を充足する。

器厚：すべて（B）の範疇に収まるが、8～10mmの比較的厚手のものと6～7mmの薄手のものが認められる。沢目木遺跡の資料をみると、この器厚の差は土器の大・小に比例するようである。

口唇部形態：（Ⅰ）は認められず、口唇部に平坦が意識された（Ⅲ）が圧倒的に増加する。（Ⅱ）も多く、（Ⅳ）も少数存在する。

器形：（a）は消失し、口縁部がわずかに外反する（d）が主体となる。また、（b）・（c）も存在する。確認される底部は平底が多い。

外面調整：前段階から引き続き、口唇部周辺に横位、胴部に縦・斜位のミガキ（②）を加え、表面は滑沢を有する。横位調整の幅は依然として広い。内面は横～斜位のナデである。

編年的位置：ほぼ無文土器のみで組成を充足させること、及び属性の型式学的連続性から前段階と分離することが可能である。また第Ⅳ段階とした外面の擦痕が顕著な無文土器群は初期沈線文系土器を伴出することが多く、型式学的連続性からも本段階の後に位置付けた。編年的位置は、前後の関係から小林氏による撚糸文系土器第5様式（小林1966・原田1991）の前半から中頃に併行するとしておきたい。なお、井上氏の示した厚手タイプ2類及び薄手タイプ（井上1996）はこの段階に併行すると認識している。両者の差は沢目木遺跡でみられる土器の大・小に比例するものであろう。この他、竹之内遺跡（馬目1982）SⅠや馬場平B遺跡（大竹1991）・日向前遺跡B地点（井上1995）の資料、中丸遺跡（井上1983・1987）・馬場平B遺跡（本間1993）資料の一部が併行すると認識している。

第Ⅳ段階 [一里段A遺跡（今野2000）SH]

組成：一里段A遺跡では、ほぼ無文土器のみで組成を充足する。ただし、本土器群と同内容の土器を出土する遺跡では、初期沈線文系土器を伴出することが多い。

器厚：8mm前後の（B）が主体となるが、10mm以上を測る（C）が出現している。また、前段階同様（B）中にも薄厚が認められる。

口唇部形態：（Ⅱ）・（Ⅲ）・（Ⅳ）が数多く認められ、バリエーションが豊富となる。

器形：前段階に引き続き口縁部がわずかに外反する（d）が主体となり、（b）・（c）も存在する。

底部は尖底及び平底の両者が認められる。

外面調整：口唇部周辺に横位、胴部に縦・斜位のケズリ（③）を施し、表面に顕著な擦痕を認める。

ケズリによる器面調整は本段階を最も表象する属性であり、本段階の土器は「擦痕土器」「擦痕文土器」とも呼称される。内面に非常に丁寧なミガキを加え、表面を滑沢に仕上げるものが多い。この他、前段階に顕著であった(②)についても少数だが存在する。

編年的位置：栃木県天矢場遺跡の資料を検討した中村氏は、従来平坂式として理解されてきた「擦痕土器」をこれと分離し、新たに天矢場式を提唱している(中村2002)。また、初期沈線文系土器である竹之内式に伴う「擦痕土器」とは時期的に前後関係にあるとの理解を提示した。両者の差異としては、竹之内式土器伴出の有無の他、大型化・調整の粗雑化を挙げている。今回の検討では、無文土器から両者を明確に分離することはできなかった。しかし本段階の相対的な新古については、次段階とした沈線文土器に伴う無文土器の属性内容から、存在する可能性が高いと考えている。よって本段階は撚糸文系土器第5様式後半～初期沈線文系土器期に併行する時期と捉えておく。なお、井上氏の示した厚手タイプ1類(井上1996)は本段階に併行すると認識する。県内において「擦痕土器」のみの組成となるのは一里段A遺跡の他、高渡遺跡において認められ、初期沈線文土器を伴出する例として竹之内遺跡SH、角間遺跡、長久保遺跡(中野1992)、中丸遺跡などが挙げられる。

第V段階 [前原A遺跡(大平1991)SH]

組成：沈線文系土器を伴う。

器厚：8mm前後の(B)が主体となるが、10mm以上を測る(C)も数多く存在する。

口唇部形態：(Ⅱ)・(Ⅲ)・(Ⅳ)に加え、特徴的な口唇部が著しく肥厚する(Ⅴ)・内外角が鋭角で、極めて平坦な口唇部を有する(Ⅵ)・断面が三角形状に落とされる(Ⅶ)などが数多く認められ、バリエーションが豊富となる。これは沈線文系土器との形式的な関連性で理解される。

器形：口縁部が外反する(d)が主体となる。(b)・(c)も存在する。底部は尖底及び平底の両者が認められる。

外面調整：ミガキ(①)やナデ(②)が中心となるが、一部にケズリ(③)が残る。

編年的位置：沈線文系土器である三戸式～田戸下層式土器に伴い出土する。本段階については、未だ明確な例が少なく、多くの検討課題が残る。

3) 沢目木遺跡資料の編年的位置

以上の検討から本遺跡資料を県下における無文土器の第Ⅲ段階に位置付け、撚糸文系土器期末葉に併行するとの結論を提示した。資料の属性内容からすれば、平坦な口唇部端やミガキ調整の卓越、平底の存在など、主に東関東に分布し「花輪台Ⅱ式」(吉田1948)とされた無文土器群の一部との関連が最も強いように思われる。ただし第Ⅲ段階とした無文土器の属性内容については、いずれも稲荷台式新相～同直後併行期とした第Ⅱ段階において萌芽、あるいは継承しており、型式学的に第Ⅲ段階へとスムーズに移行するようである。第Ⅱ段階は関東撚糸文系土器文化圏の影響を顕著に受けたものと理解したが、底部平底土器の存在に代表される伝統は引き続き認められ、第Ⅲ・第Ⅳ段階へと継承されている。第Ⅲ段階に併行する撚糸文系土器が本県では客体的であり、「花輪台Ⅱ式」とされる土器群に平底の底部が顕著に認められることは、むしろ関東(北～東関東)へ大きな影響を与え

た土器群との位置付けも考えておきたい。ともあれ現段階では、第Ⅲ段階の無文土器群を関東擦糸文系土器文化圏の影響のみで理解することには慎重でありたい。

第Ⅲ・第Ⅳ段階の連続性については、一里段A遺跡の資料に第Ⅲ段階の属性表象を認める例が少数存在し、型式学的検討からも矛盾は少ない。ただし、ミガキからケズリという器面調整の大きな転換については検討すべき課題として残る。第Ⅲ段階の資料にはミガキの前段階としてのケズリの痕跡が確認されるが、両者が共伴する一里段A遺跡の資料からはその漸移的な変化は看取できない。竹之内遺跡の初期沈線文系土器（竹之内：図46-1）の胴上半部（文様帯部分）のミガキ調整・平坦状の口唇部形態・器厚といった諸属性は本稿第Ⅲ段階資料と共通し、胴下半には本稿第Ⅳ段階の特徴である擦痕が顕著に認められる。そのため、本県における本稿第Ⅳ段階の無文土器群や初期沈線文系土器は、本稿第Ⅲ段階の無文土器群を祖型とし、中村氏が天矢場式とした北～東関東に分布する「擦痕土器」の影響を要素の一つとして顕著に受け、成立した可能性を述べておきたい。

2. 縄文時代早期の遺構について

縄文時代早期の遺構は竪穴状遺構4基（S X 01～04）、土坑1基（S K 02）が調査されている。2・3号竪穴、1号竪穴・2号土坑は重複するが、時期的に大きな隔たりは看取できない。いずれの遺構も施設などが伴わず、性格を特定する材料に乏しい。このような該期の小型の竪穴状遺構については、県内にも若干の類例が認められる。ここでは一辺（直径）2～3mの円形～隅丸（長）方形プランであり、かつ施設や生活痕跡の認められない該期の竪穴を「小型竪穴」と規定し、その資料を集成して（図30）今後の課題としたい。

1) 沢目木遺跡の「小型竪穴」

すべて規模が一辺（直径）2～3m前後を測る、隅丸方形～円形を呈する小型の竪穴である。丘陵の裾部の限られた範囲に一定の間隔をおいて散在する。これらの竪穴からは炭化物の付着した土器類が出土するものの、柱穴や炉、床面の踏みしまりなど、生活痕跡や住居施設は検出されない。

2) 小型竪穴の類例

龍門寺遺跡「小竪穴状遺構」（廣岡1985）：滑津川の支流、草木川北岸の丘陵の南端に存在する。周囲は南へ下がる緩斜面となっており、周囲に同内容の遺構は検出されていない。遺構の西半のみ調査され、施設や生活痕跡は認められない。プランは隅丸長方形を呈し、規模は長辺2.9mを測る。堆積土中から稲荷台式併行期の擦糸文土器、本稿第Ⅱ段階の無文土器が出土している。

赤沢B遺跡「4号住居跡」（佐藤2001）：隈戸川の支流、二瀬川東岸の河岸段丘上に存在する。西側の急斜面に面した平坦部に位置する。柱穴や踏みしまり、炉などは検出されない。プランは隅丸長方形を呈し、規模は2.6×2.3mを測る。堆積土中から本稿第Ⅰ段階の無文土器を出土する。なお、隣接して同時期の遺物を出土し、施設や生活痕跡を持たない「3号住居跡」が存在する。この遺構は不整な隅丸方形を呈し、規模は長辺で4.5×4.1mを測る。

一里段A遺跡「2号土坑」（今野2000）：阿武隈川の支流、社川上流域の河岸段丘南端に存在する。

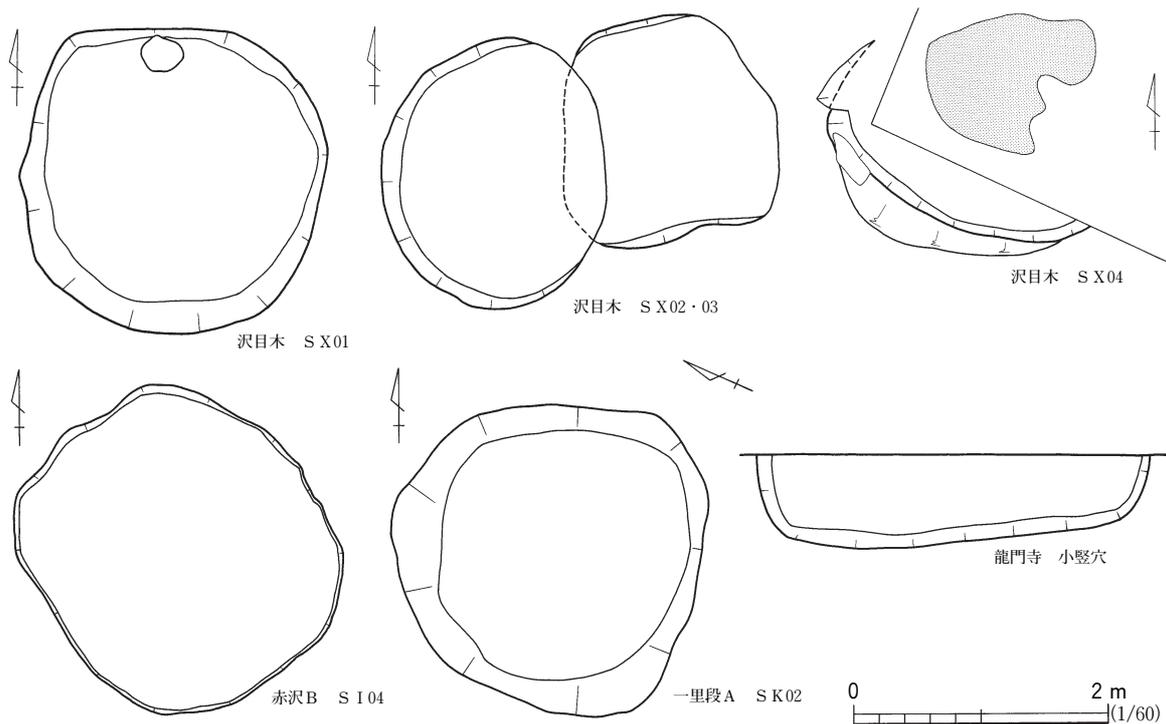


図30 縄文時代早期の「小竪穴」

南へ下がる緩斜面に位置し、周囲に他の遺構は存在しない。施設・生活痕跡は認められず、堆積土からは燃糸文土器片が出土している。プランは円形を基調とし、規模は直径2.5mを測る。

仲ノ縄B遺跡「9号住居跡」(山岸1993)：大滝根川の支流に南面した丘陵裾に位置する。南に下がるやや急な斜面に立地し、2基の竪穴と重複する。プランは楕円形を基調とし、規模は直径3.2mを測る。施設や生活痕跡は認められない。重複する8号住居跡も同時期・同規模・同プランの遺構であるが、床面に土坑状の施設を伴う。また、やや離れて踏みしまり・柱穴の認められる竪穴住居跡(5号住居跡：隅丸長方形・長辺7.5m)が調査されている。

3) 小 結

以上の様相をまとめれば、「小竪穴」とする条件とした①一辺(直径)2～3m、②円形～隅丸(長)方形プラン、③施設や生活痕跡の皆無の他、④河川沿いの丘陵裾に分布し、日当たりの良い緩斜面上に構築される。⑤炭化物の付着した土器片を出土することが多い、などの特徴が挙げられる。「小竪穴」の分布形態は、沢目木遺跡では3基が散在した状況で検出され、単独で存在するもの(龍門寺・一里段A)、大型の竪穴状遺構・住居跡を伴うもの(赤沢B・仲ノ縄B)など一様ではない。ただし、いずれも大規模な遺構群とはなっていない。

県内における燃糸文系土器期の竪穴住居跡は、薄手無文土器を出土する時期(仙台内前：SI02・仲ノ縄B：SI05・岩下向A：SI08など)から本遺跡と前後する時期(竹之内：SI・馬場平B：SI07)まで認められる。いずれも炉跡は明確でないが、先に挙げた②・④・⑤については「小型竪穴」と共通し、大規模な遺構群としての形態はとらない。

以上の検討からは、竪穴住居跡とされる遺構と大きな条件の相違は認められず、現状では小型の

住施設（活動拠点）とする以上の見解は得られない。今後、資料の蓄積を待ちたい。（横須賀）

第2節 縄文時代前期

縄文時代前期後半の土器は、関東系の諸磯式期・浮島式期の資料が出土し、在地の大木4式期の資料が伴出する。また前期末では大木6式期の資料が出土している。

1. 縄文時代前期後半の土器について（図19-9～18, 図20-1～12）

すべて1号包含層からの出土である。図19-9は半截竹管による平行沈線を重層的に用い、横位の平行沈線を区画として2段の菱形文状の文様を描出している。この菱形文状の文様は、諸磯a式にみられる肋骨文が縦位区画の消失など形骸化・省略化した段階と捉えられる。図19-10は有孔の浅鉢形土器であり、貫通孔は内湾する口縁部を巡るように穿たれるようである。文様は浮線文・入組木の葉文が認められ、入組木の葉文は平行沈線間に短沈線を充填する。以上2点については文様・器形などの特徴から諸磯b式古～中段階を中心とした時期に併行すると考えられる。

図19-14・15は口縁部に斜め・縦の短沈線・条線が付され、その直下には三角文が巡る。図19-16は文様帯区画に用いられたと考えられる幅広の変形爪形文が施文されている。図19-17・18は胴部地文となる貝殻復縁による波状貝殻文の資料である。以上5点は文様の特徴から浮島Ⅱ～Ⅲ式を中心とした時期に併行する資料である。

図20-1～20, 図21-2は在地の大木4式系の資料とし、図19-11～13についてもここに含まれる可能性がある。口縁部無文帯と胴部地文を画す平行沈線が認められるもの（図20-5～7）、有節平行沈線により文様が描出されるもの（図20-8～11）が特徴的である。また文様帯を持たず、口縁部まで地文が及ぶ資料も多く、口唇部に刻み（図20-12）や小突起（図20-1）を付すものが認められる。地文は単節の斜行縄文に結節回転文が施文されているものが多い。

関東系の諸磯・浮島式系と在地系の大木式系土器の併行関係については、近年県内で良好な一括資料が得られている。矢吹町赤沢B遺跡184号土坑からは大木3式と諸磯b式古段階の資料が共伴し、遺構外出土遺物の様相から浮島I b式を加えた併行関係が指摘されている（佐藤2001）。また本年度調査・報告される下郷町南倉沢遺跡4号土坑では大木4式と浮島Ⅱ式新相の資料が共伴するようである。本遺跡において諸磯b式古～中段階・浮島Ⅱ～Ⅲ式・大木4式系の土器が共伴するという様相は、一括資料などから導きだされる併行関係と矛盾せず、少なくとも時期的に連続する可能性が高い。

この時期の資料を、阿武隈山系における小野町とその周辺地域に求めれば、小野町鍛冶久保遺跡（木田1993）、同小滝遺跡（松本1993）、船引町仲ノ縄B遺跡（山岸1993）などが挙げられる。いずれも関東系の土器を伴っており、本時期における関東系文化の強い影響が認められる。

2. 縄文時代前期末の土器について (図20-13~21, 図21-1)

1) 沢目木遺跡出土資料の特徴

すべて1号包含層から出土したものであり、代表的なものを図31に集成した。数量が限定されるため分類作業は行わず、以下観察属性ごとに特徴をまとめる。

器形：口縁部が「く」の字状に外反し、胴部に膨らみをもつ深鉢が中心となるが、図20-15のみ金魚鉢形を呈する。口縁部の特徴として、わずかに肥厚する (図20-13・17~19)、隆帯を付す (図20-15)、複合口縁状 (図21-1)、波状口縁 (図20-18・20・21) となる例が挙げられる。

文様帯：無文帯を含め口縁部に限定され、胴部との境界に隆帯・隆線を巡らせる例が多く (図20-13・16~21)、図20-13以外は斜位の刻みを付す。この他、胴部上半にまで施文範囲が及ぶ例もみられる (図20-15, 図21-1)。

文様：口縁部を装飾するものが多い。図20-15は隆帯をメガネ状に付す。図20-16は三角形状の浅い掘り込みを巡らす。図20-17は口縁部端と頸部に刻みを付した隆線を巡らし、一部縦位に橋梁状の隆帯を付す。図20-18・19は口縁部上半にL R縄文、図20-18・20は波頂部に刻みを入れる。図21-1は複合部下端に円形刺突文を巡らす。胴部上半に施文される図20-15, 図21-1は刻みを付した細隆線を貼り付け、直線を基本とした文様を描く。図21-1は施文範囲が頸部下約4cm幅に限定され、文様帯下端は隆線を横走させて画す。図20-15にはボタン状貼付文が認められる。

地文：単節斜行縄文がほとんどであり、結節回転文を多段に横走させるものが多い。

2) 編年的位置付け

本土器群は上記に挙げた属性から大木6式期の資料と判断できる。本土器群の類例を阿武隈山系、小野町周辺に求めれば、小野町小滝遺跡 (松本1993)、同鳴ヶ館跡 (石本1994)、同鹿島遺跡 (能登谷2002) などで散見される程度である。県下に限れば、磐梯町法正尻遺跡 (松本1993)、石川町薬師堂遺跡 (松本1983)、会津高田町上道上B遺跡 (長島1983)、同町鹿島遺跡 (本間1993) などで良好

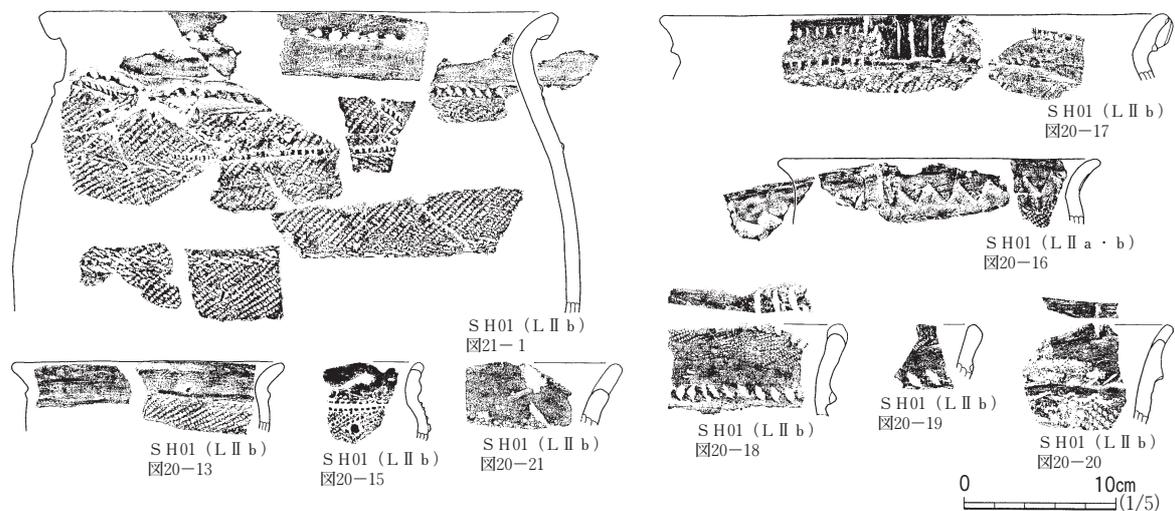


図31 縄文時代前期末の土器

な資料が得られている。

法正尻遺跡では、沼沢パミスを指標とした層位的成果が得られており、大木6式期とした土器型式の新古を判断する良好な資料となる。これによると、法正尻遺跡で分類されたa～l類のうち、パミス直上からはg～l類が、直下からはa～f類が主体的に出土しており、そのまま新・古相を示すものとされる。本遺跡資料を法正尻遺跡資料と対比させれば、口縁部下端しに三角形の掘り込みを付すb類、口縁部が外反し、複合口縁状を呈するc類、刻みを付した細隆線を貼り付け、直線的な文様を描くe類などが共通する。また新相としたg～l類にみられる内湾する口縁部や刻みを付した細隆線により曲線的なモチーフを描くものなどは本遺跡では認められない。

以上の層位的、形式的検討より、本遺跡資料は大木6式期でも古相の時期に限定される資料と位置付けることが可能である。先に挙げた小滝・鹿島・上道上B遺跡、鴨ヶ館跡の資料も、各報告書において考察されているようにほぼ時期的に併行する。法正尻遺跡では明確な類例の少ない図20-13や図20-18～21に類似する資料も上道上B・鹿島・小滝遺跡などで確認されている。(横須賀)

第3節 まとめ

1. 遺物について

土器は縄文時代早期～弥生時代前期という幅で捉えられたが、大きく①縄文時代早期前葉、②同前期後半、③同前期末、④同晩期末～弥生時代前期の4時期に分かれる。①は縄文時代早期前半、撚糸文系土器期末葉に比定した。遺構内とその周囲から出土した良好な一括資料であり、近年高揚しつつある関東周辺における該期土器編年研究の一助となりえる。②は関東系諸磯b式古～中、同浮島Ⅱ式新相～Ⅲ式と在地系大木4式に併行する資料と位置付けた。本時期についても近年関東系と在地系土器との明確な共伴例が増えてきており、徐々に地域間編年が明らかとなっていくものと考えられる。③は未だまとまった資料が少ない前期末葉、大木6式期の土器である。該期については沼沢パミスを指標とした細分案も示されているが、今後は北接する地域との差異を明らかにしていく必要がある。④については出土数が少なくあまり触れることができなかったが、県内においては数少ない資料である。該期の土器群は須賀川市牡丹平遺跡(山内1983)や同市松ヶ作A遺跡(吉田2001)などで良好な資料が得られている。石器石材は流紋岩・粘板岩・珪質頁岩であり、花崗岩地帯である小野町周辺からは採集できない。県外も含めた周辺地域からの搬入と考えられる。

2. 遺構の変遷(図32)

縄文時代早期と時期不明の遺構に2分される。それぞれⅠ・Ⅱ期として以下補足する。

Ⅰ期：縄文時代早期前葉 [竪穴状遺構4基(SX01～04)、土坑1基(SK02)]

これらの遺構群は丘陵の北東～東裾で検出されている。2・3号竪穴と1号竪穴・2号土坑が重複しているが、大きな時期差は認められない。竪穴状遺構の性格が捉えられない以上、これら遺構

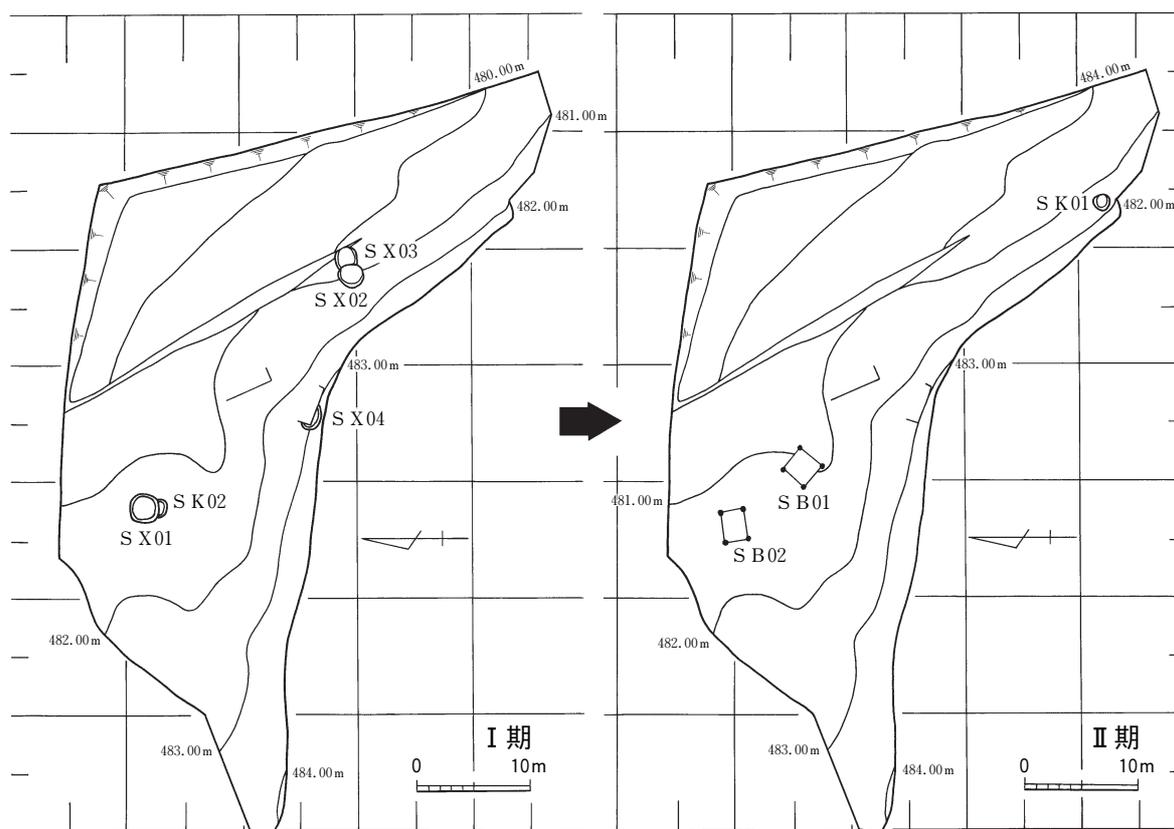


図32 遺構の変遷

群全体についても詳らかとならないが、炭化物の付着した土器を伴っており、人々による何らかの活動拠点であった可能性は高い。

Ⅱ期：時期不明 [掘立柱建物跡2棟 (S B 01・02), 土坑1基 (S K 01)]

I期の遺構群と立地は同じである。2号建物跡と1号竖穴の重複関係、及び本遺構群の堆積土観察から時期的に本群が後出する。阿武隈山系において1間×1間の建物跡は、日向前南遺跡(鈴鹿1987)や浜井場B遺跡(山崎1988)などで確認され、本遺跡に隣接し、同時期に調査を行った西田H遺跡でも多数検出されている。これらの建物群は縄文時代後～晩期に比定され、本遺跡から併行する時期の遺物は出土していない。ただし、後続する縄文晩期末～弥生前期の土器を確認しており、遺物の出土状況を勘案すれば、該期の建物跡である可能性も提示しておきたい。

以上2時期の変遷が推定されたが、縄文晩期末～弥生前期としたⅡ期の建物跡の年代が正しければ、縄文時代前期後半・末に属する遺物の起源が問題となる。これについては報文中で触れているように、本遺跡の南に位置する丘陵上に該期集落が存在する可能性が高いと考えている。

3. 調査の概括と今後の課題

本遺跡の調査の結果、縄文時代早期前葉、撚糸文系土器期の資料が遺構・遺物ともややまとまって確認された。小野町における該期の資料は、鴨ヶ館跡(大字飯豊)及び小滝遺跡(大字吉野辺)から稲荷台式併行期の撚糸文系土器及び無文土器が、長久保遺跡(大字飯豊)からは本稿第Ⅳ段階

に相当する無文土器が出土している。しかし、いずれも包含層から数点のみ出土したにすぎず、今回の成果は小野町における縄文時代早期前葉の歴史に貴重な資料を提供するものである。

また、小野町の周囲を含めた阿武隈山系からは縄文時代早期～前期にかけての遺構・遺物が多数発見されることが多く、本遺跡からも早期前葉・前期後半～末葉の土器が出土している。関東・東北地方の狭間に位置する本地域は、遺構・遺物に多方面からの影響が看取される。資料の蓄積が進んだ現在、地域の特性を浮き彫りにする調査成果の総括が必要となってきた。(横須賀)

引用・主要参考文献

- 白崎 高保 1941 「東京稲荷台先史遺蹟」『古代文化12-8』東京考古学会
- 吉田 格 1948 「茨城県花輪台貝塚概報」『日本考古学1-1』日本考古学研究所
- 岡本 勇 1953 「相模平坂貝塚」『駿台史学3』駿台史学会
- 西村正衛・金子浩昌 1960 「千葉県香取郡鶴崎貝塚」『古代45・46』早稲田大学考古学会
- 小林 達夫 1966 「縄文時代早期前半に関する問題」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』
多摩ニュータウン遺跡調査会
- 中村紀夫・橋本澄夫 1972 『天矢場遺蹟』栃木県教育委員会
- 鈴木 道之助 1978 「花輪台式土器とその終末」『史館10』史館同人
- 宮崎 朝雄 1981 「撚糸文土器」『縄文文化の研究3』雄山閣
- 馬目順一・吉田生哉 1982 『竹之内遺跡—縄文時代早期の調査—』いわき市教育委員会
- 井上 國男 1983 「棚倉町中丸遺跡出土の早期縄文土器」『福島考古24』福島県考古学会
- 松本茂・大越道正 1983 「薬師堂遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告13』福島県教育委員会
- 長島 雄一 1983 「上道上A・B遺跡」『会津高田町遺跡試掘調査報告』会津高田町教育委員会
- 原田 昌幸 1983 「撚糸文期の竪穴住居跡」『土曜考古7』土曜考古研究会
- 山内幹夫・寺島文隆 1983 「牡丹平遺跡」『阿武隈地区遺跡分布調査報告(中部第二地区)(Ⅲ)』
福島県教育委員会
- 鈴鹿 良一 他 1984 「松ヶ平A遺跡(第2次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』福島県教育委員会
- 野内 秀明 1984 「三浦半島における無文土器群の様相」『横須賀市人文博物館研究報告28』
横須賀市人文博物館
- 高島好一・廣岡敏 1985 『龍門寺遺跡—重要幹線街路事業に伴う調査—』いわき市教育委員会
- 中村 五郎 1986 『東北地方の古式縄文土器の稿年』『福島の研究』清文堂出版
- 井上國男・畠山真一 1987 「棚倉町中丸遺跡出土の無文土器—新資料の報告—」『福島考古28』福島県考古学会
- 鈴鹿 良一 他 1987 「日向南遺跡(第3次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅸ』福島県教育委員会
- 原田 昌幸 1987 「撚糸文系土器終末期の諸問題(Ⅱ)「平坂式土器」の再検討」
『物質文化48』物質文化研究会
- 原田 昌幸 1988 「花輪台式土器論」『考古学雑誌74-1』日本考古学会
- 山内幹夫・松本茂 他 1988 「羽白C遺跡(第一次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告12』福島県教育委員会
- 山崎充浩・阿部俊夫 1988 「浜井場B遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告25』福島県教育委員会
- 芳賀英一・藤谷誠 1989 「下谷ヶ地平B・C遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ』
福島県教育委員会

第4章 まとめ

- 芳賀英一・丹野隆明 1989 「大村新田遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅶ』福島県教育委員会
- 原田 昌幸 1990 「撚糸文系土器終末期の諸問題（Ⅳ）「稲荷原式土器」の検討」
『物質文化54』物質文化研究会
- 山岸 英夫 他 1990 「角間遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告8』福島県教育委員会
- 大竹 憲治 他 1991 『大越・馬場平B遺跡』大越町教育委員会
- 大平好一・井憲治 1991 「前原A遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告8』福島県教育委員会
- 原田 昌幸 1991 「撚糸文系土器様式」『考古学ライブラリー61』ニューサイエンス社
- 本間宏・丹野隆明 他 1991 「鹿島遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告11』福島県教育委員会
- 松本茂・山岸英夫 他 1991 「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告11』福島県教育委員会
- 大竹憲治・中野拓大 1992 『長久保遺跡の研究』小野町教育委員会
- 金子直行・宮崎朝雄 1992 「田戸遺跡資料」『山内清男考古資料4』奈良国立文化財研究所
- 本間宏・井憲治 1992 「北平遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告14』福島県教育委員会
- 本間宏・佐藤啓 他 1993 「馬場平B遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告20』福島県教育委員会
- 松本 茂 他 1993 「小滝遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告21』福島県教育委員会
- 木田寿憲・飯村均 他 1993 「鍛冶久保遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告23』福島県教育委員会
- 山岸 英夫 他 1993 「仲ノ縄B遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告19』福島県教育委員会
- 石本弘・斎藤竜一 1994 「鴨ヶ館跡（第2次）」『東北横断自動車道遺跡調査報告27』福島県教育委員会
- 芳賀英一・小暮伸之 1994 「塩喰岩陰遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告25』福島県教育委員会
- 井上國男・畠山真一他 1995 『日向前遺跡B地点』棚倉町教育委員会
- 高柳 圭一 1995 『佐原市鶴崎貝塚発掘調査報告書』千葉県文化財センター
- 井上 國男 1996 「久慈川上流域における縄文時代早期無文・沈線文土器の様相」
『論集しのぶ考古 目黒先生頌寿記念』論集しのぶ考古刊行会
- 山岸 英夫 1996 「薄手の無文土器について」『論集しのぶ考古 目黒先生頌寿記念』
論集しのぶ考古刊行会
- 今野徹・石本弘 他 2000 「一里段A遺跡」『福島県文化財センター白河館（仮称）遺跡発掘調査報告』
福島県教育委員会
- 市川 一秋 2001 『寺山A遺跡発掘調査報告書』長沼町教育委員会
- 伊東裕輔・星幸則 2001 「高渡遺跡発掘調査報告」『国道349号改良工事に伴う発掘調査報告書1』
矢祭町教育委員会
- 斎藤竜一・香川慎一 2001 「こまちダム建設予定地」『福島県内遺跡分布調査報告7』福島県教育委員会
- 佐藤 啓 他 2001 「赤沢B遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告10』福島県教育委員会
- 吉田 秀亨 他 2001 「松ヶ作A遺跡」『県道古殿須賀川線（うつくしま未来博道路）遺跡発掘調査報告』
福島県教育委員会
- 香川慎一・三浦武司 2002 「こまちダム建設予定地」『福島県内遺跡分布調査報告8』福島県教育委員会
- 中村信博・中村紀男 2002 『天矢場遺跡一民間開発に伴う天矢場遺跡第2次発掘調査報告書一』茂木町教育委員会
- 能登谷宣康・国井秀紀 2002 「鹿島遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告16』福島県教育委員会
- 笠井崇吉・香川慎一 2003 「こまちダム建設予定地」『福島県内遺跡分布調査報告9』福島県教育委員会

写 真 图 版



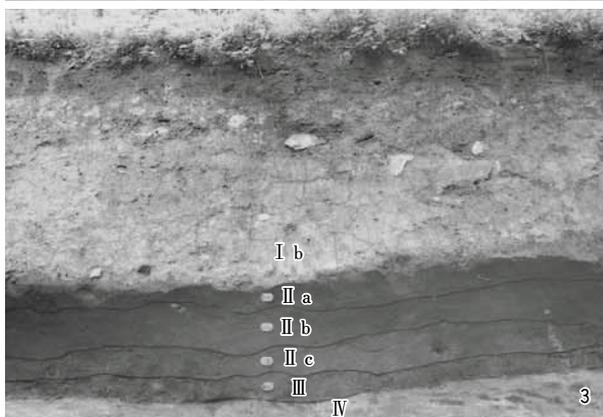
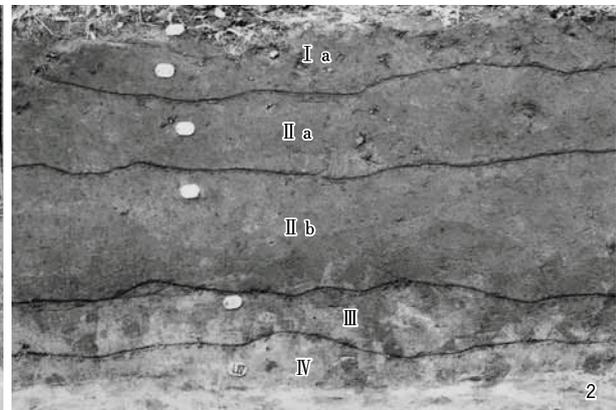
1 調査後遠景（東から）



2 調査区中央～西側全景（東から）



3 調査区中央～東側全景（南から）

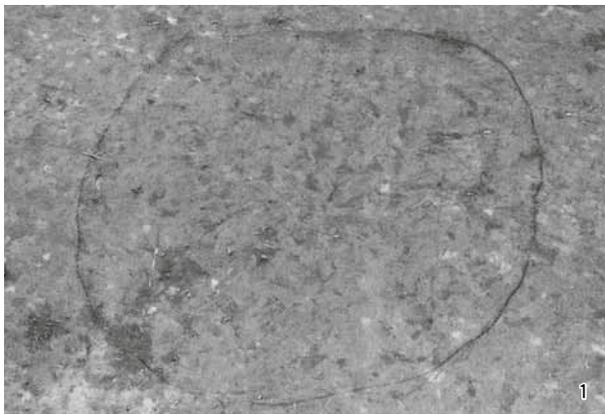


4 調査区状況

1 調査区全景（東から） 2 調査区西側基本土層（北から）
3 調査区東側基本土層（西から） 4 表土除去作業（南から）

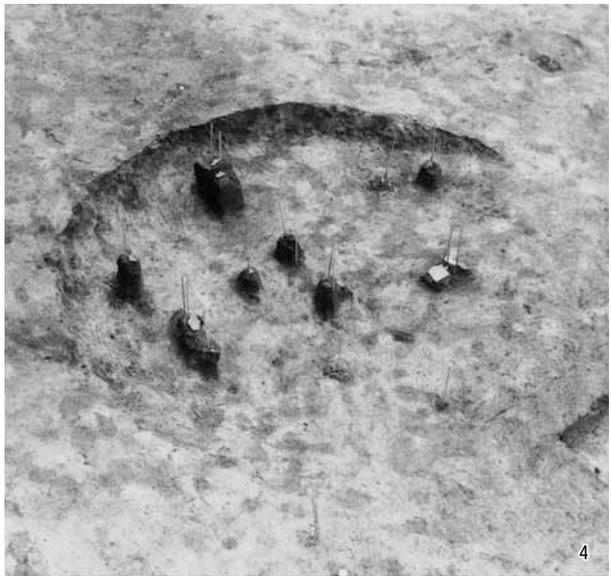


5 1号竪穴状遺構完掘全景（東から）



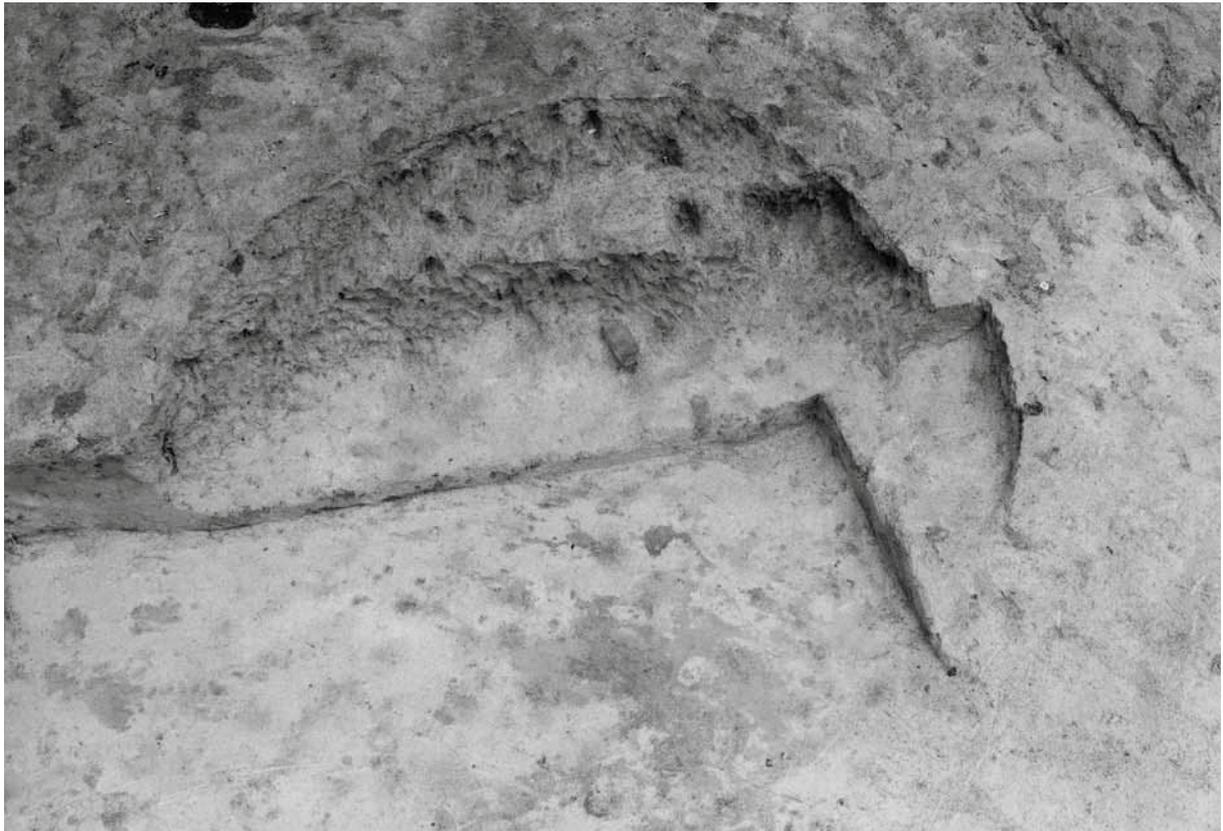
6 1号竪穴状遺構

1 検出状況（東から） 2 土層断面（東から）
3 土層断面（南から）

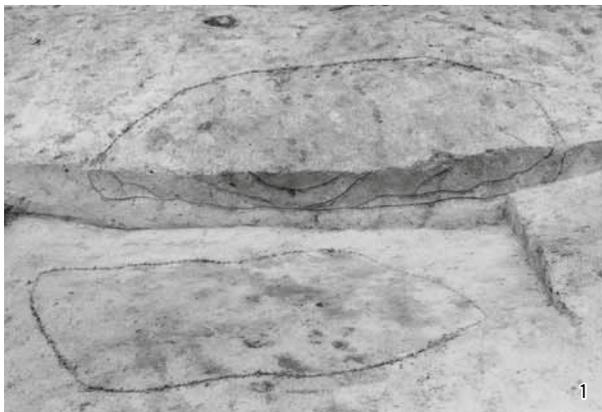


7 2・3号竖穴状遺構

- 1 2号竖穴完掘全景（南東から）
- 2 2号竖穴検出状況（南から）
- 3 2号竖穴土層（北東から）
- 4 2号竖穴遺物出土状況①（南東から）
- 5 2号竖穴遺物出土状況②（東から）
- 6 2・3号竖穴完掘全景（東から）



8 4号竖穴状遺構全景（北から）



1



2



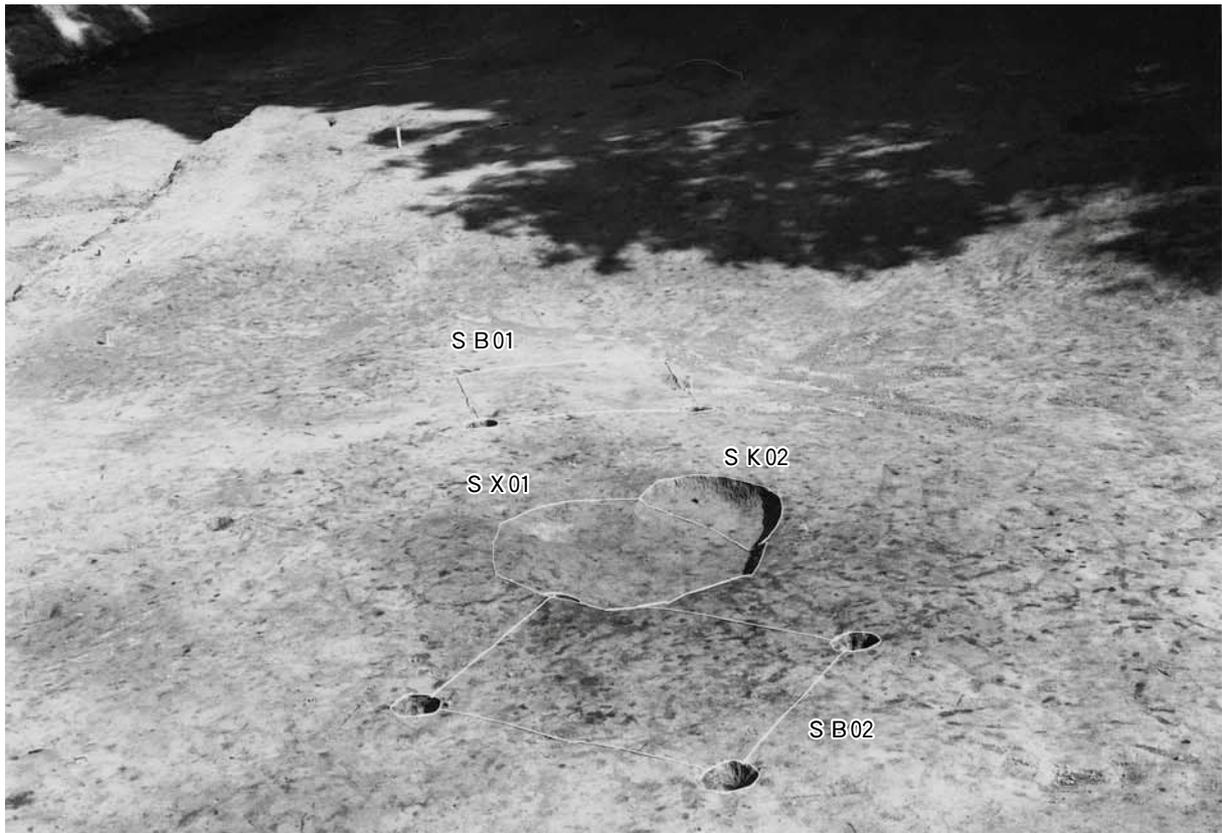
3



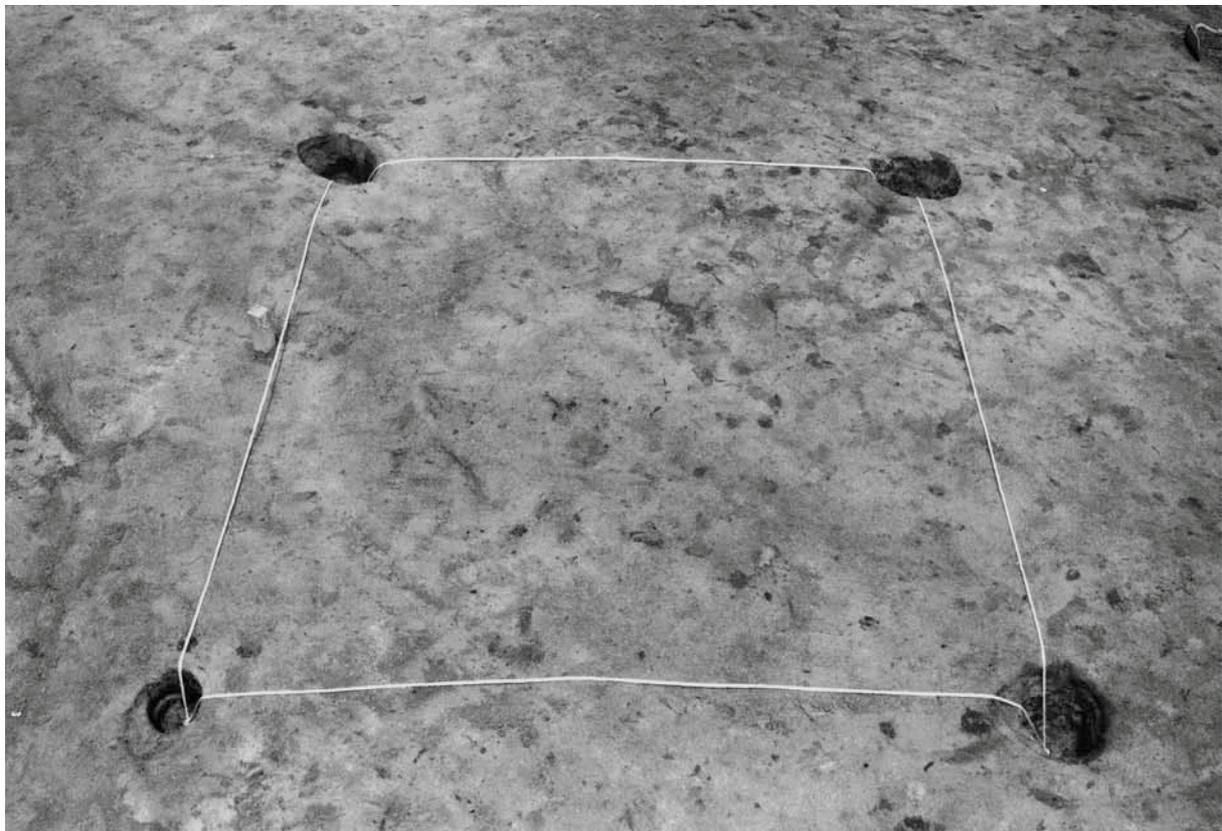
4

9 4号竖穴状遺構

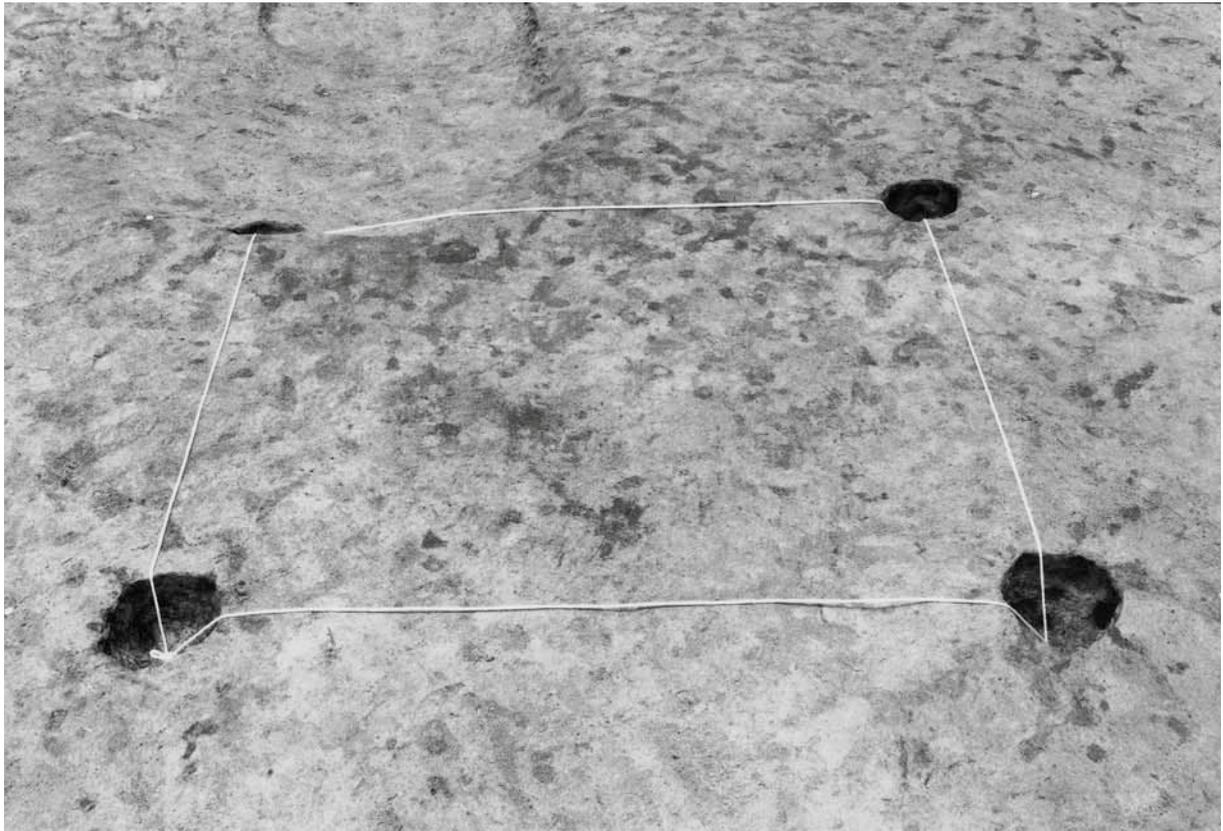
1 検出状況（北から） 2 土層断面（北から）
3 遺物出土状況①（北から） 4 遺物出土状況（南西から）



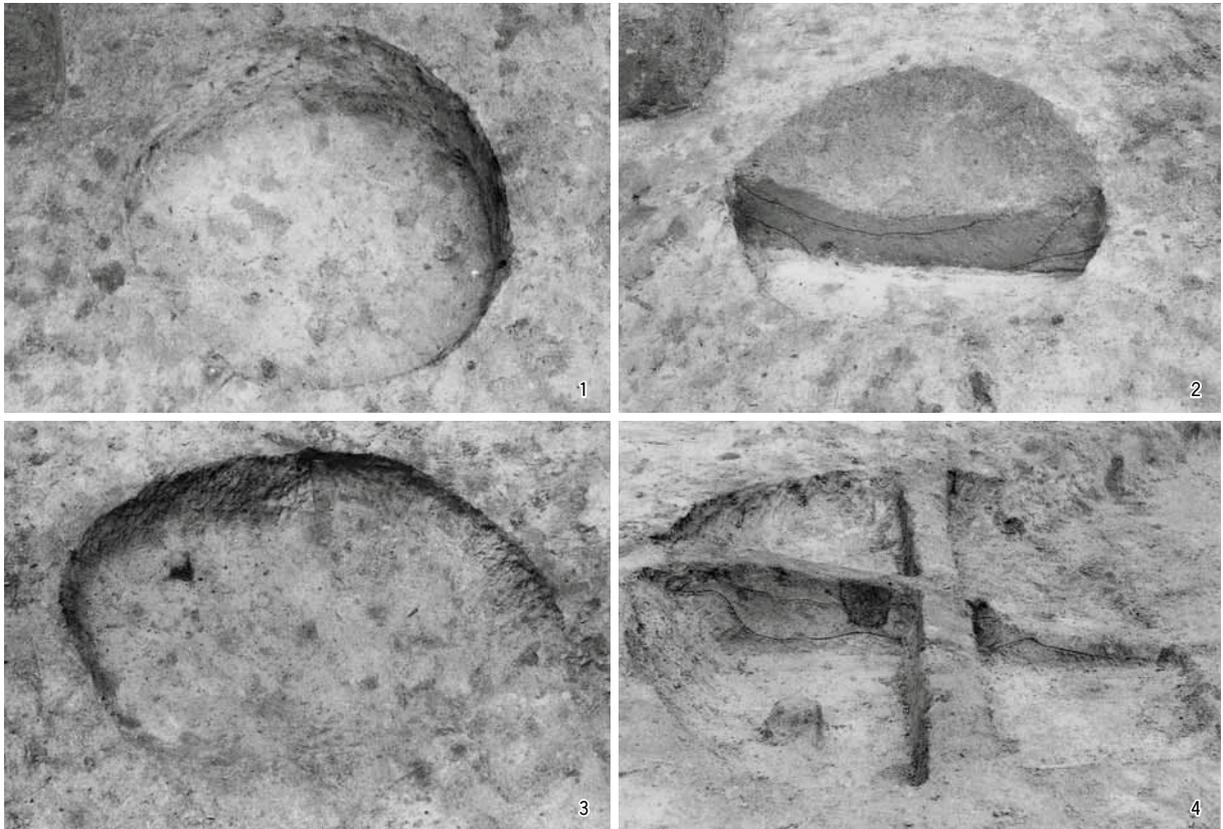
10 1号竖穴状遺構，1・2号建物跡，2号土坑全景（北東から）



11 1号掘立柱建物跡完掘全景（南東から）



12 2号掘立柱建物跡完掘全景（南から）



13 1・2号土坑

1 1号土坑完掘全景（東から） 2 1号土坑土層断面（東から）
3 2号土坑完掘全景（南から） 4 2号土坑土層断面（東から）



14 1号遺物包含層完掘状況（東から）

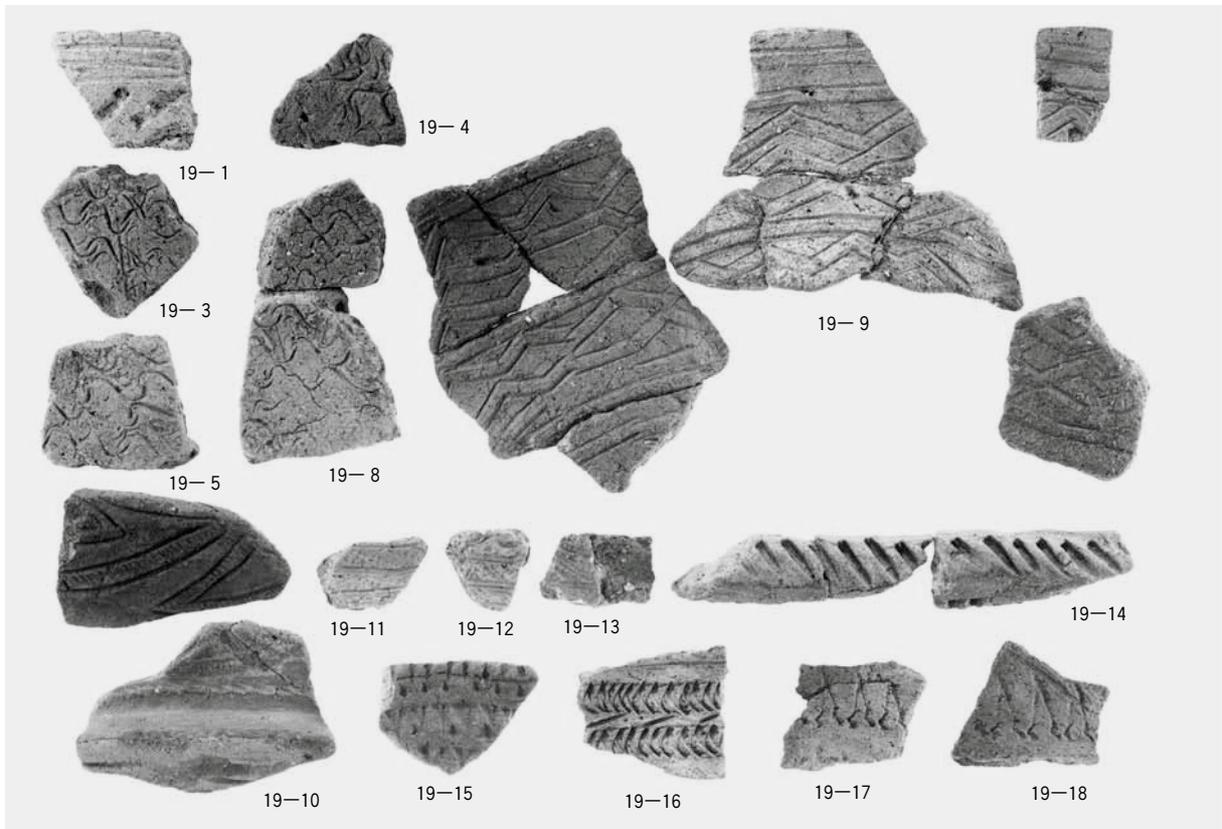


15 遺物包含層

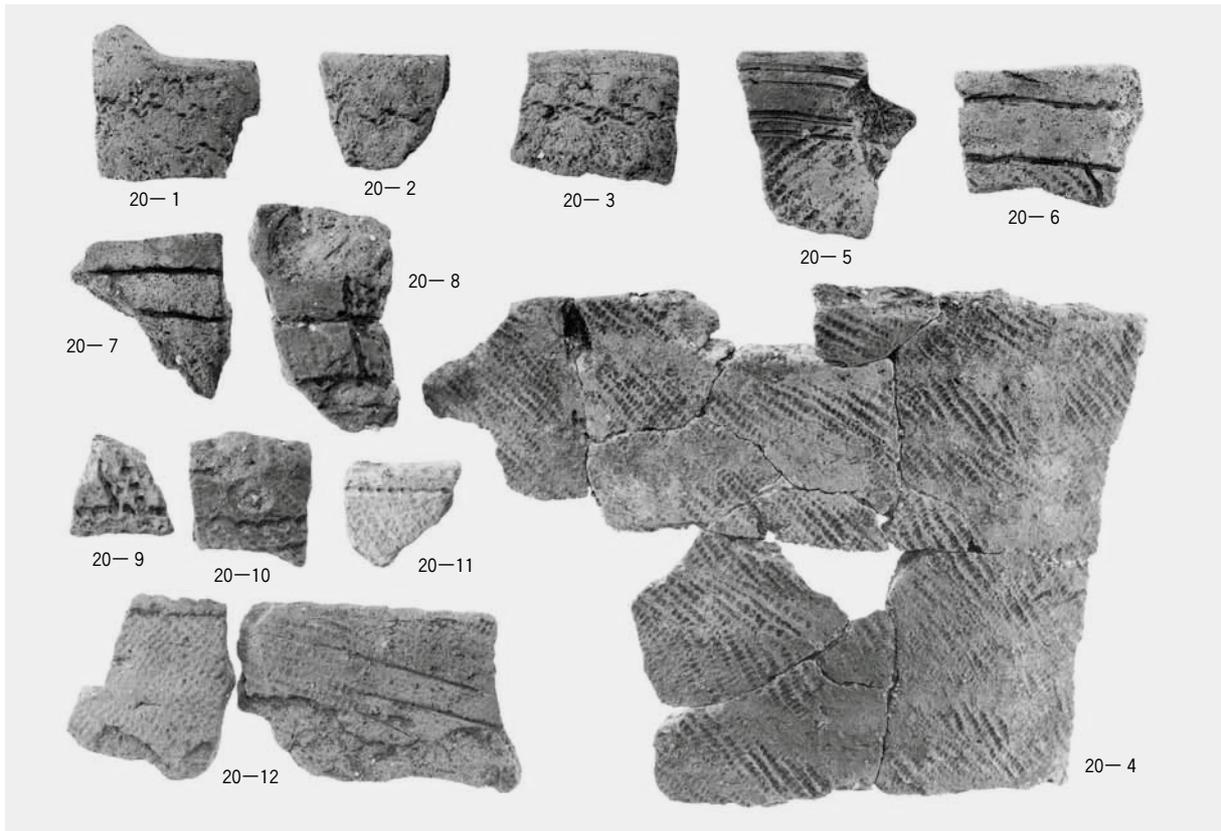
1 1号包含層完掘状況（西から） 2 1号包含層遺物出土状況（東から）
3 2号包含層完掘状況（北西から） 4 調査風景



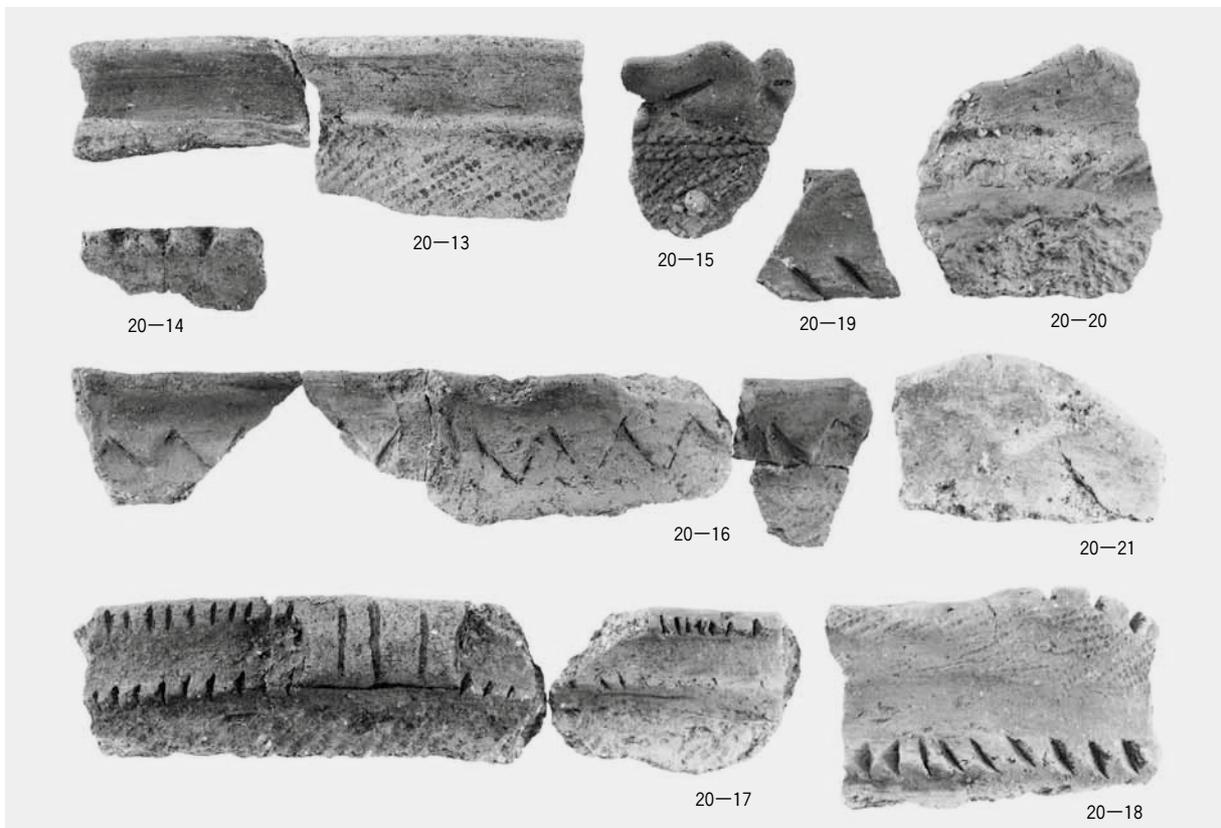
16 豎穴狀遺構出土土器



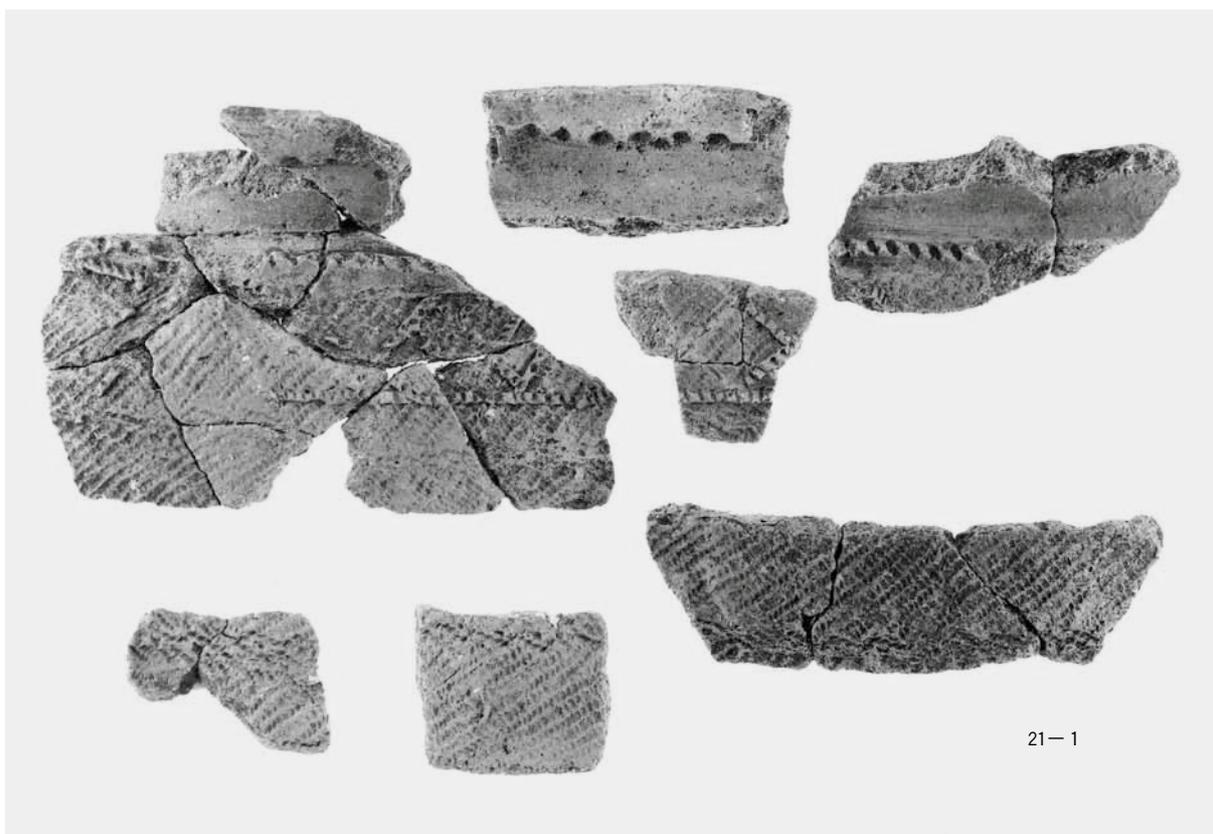
17 1号遺物包含層出土土器 (1)



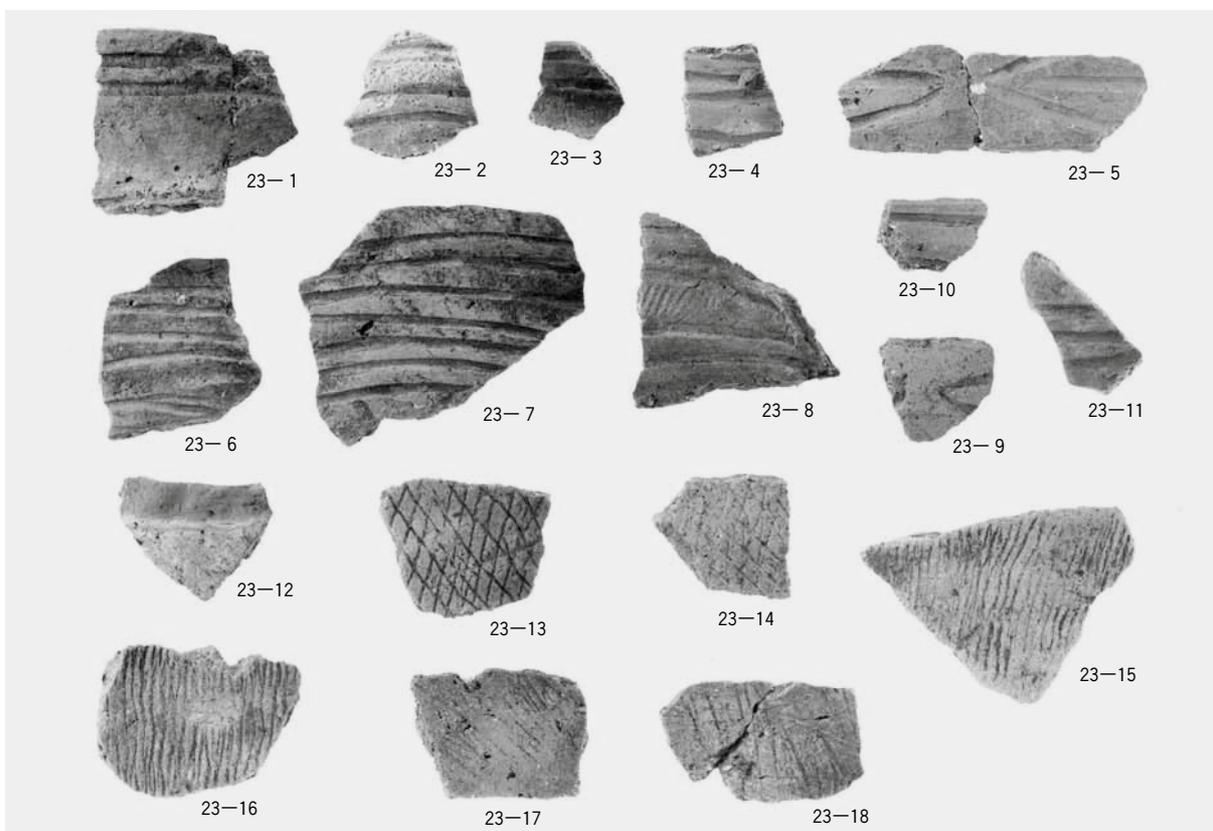
18 1号遺物包含層出土土器（2）



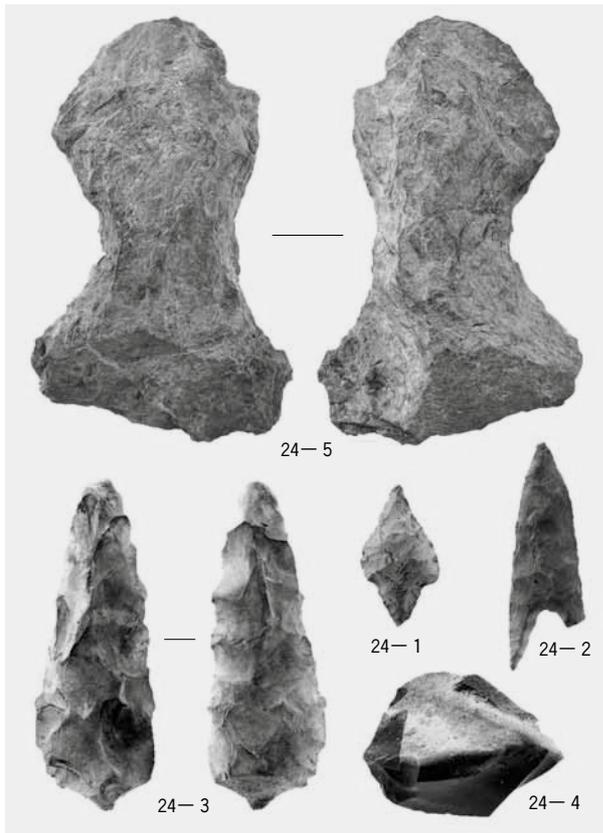
19 1号遺物包含層出土土器（3）



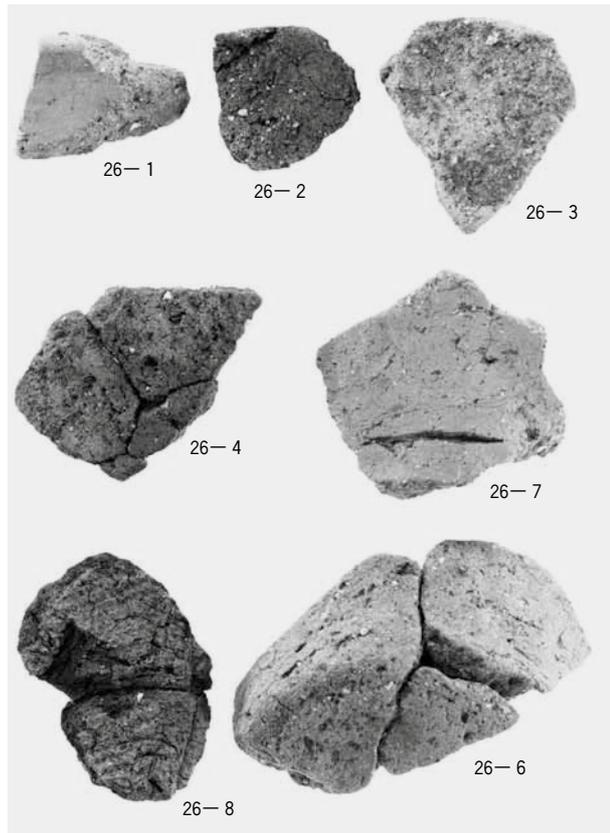
20 1号遺物包含層出土土器（4）



21 1号遺物包含層出土土器（5）



22 1号遺物包含層出土石器



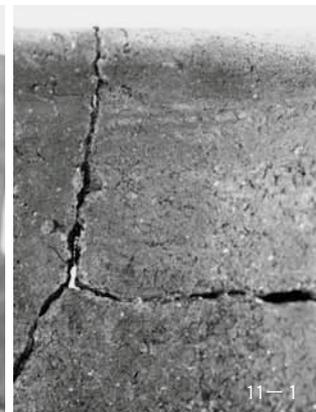
23 2号遺物包含層出土土器



11-1



11-1



11-1



12-1



26-6



23-7

24 土器細部

報告書抄録

ふりがな	こまちだむいせきはくつちようさほうこく					
書名	こまちダム遺跡発掘調査報告1					
シリーズ名	福島県文化財調査報告書					
シリーズ番号	第410集					
編著者名	高橋信一・横須賀倫達・笠井崇吉					
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部					
	〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL 024-534-2733					
発行機関	福島県教育委員会					
	〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111					
発行年月日	2003年3月28日					
所収遺跡名	所在地	北緯	西経	調査期間	調査面積	調査原因
さわめき 沢目木	福島県田村郡 小野町大字雁股田 字沢目木	37° 16' 47"	140° 34' 48"	2002年5月27日 ～ 2002年7月12日	1,600㎡	ダム（こまちダム）建設関連工事に伴う事前発掘調査
	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
	集落跡	縄文時代	竪穴状遺構（4） 掘立柱建物跡（2）		縄文土器 弥生土器	縄文時代早期前葉の竪穴状遺構・土坑とこれに伴う無文土器。 縄文時代早期前葉～弥生時代前期の遺物包含層。
	遺跡番号	弥生時代	土坑（2） 遺物包含層（2）		石器	
	52200143					

福島県文化財調査報告書第410集

こまちダム遺跡発掘調査報告1

さわめき
沢目木遺跡

平成15年3月28日発行

編集	財団法人福島県文化振興事業団	（遺跡調査部）
発行	福島県教育委員会	（〒960-8688）福島市杉妻町2-16
	財団法人福島県文化振興事業団	（〒960-8116）福島市春日町5-54 TEL 024-534-2733 FAX 024-536-3781
印刷	福島県土木部	（〒960-8668）福島市杉妻町2-16
	陽光社印刷株式会社	（〒960-0112）福島市南矢野目字萩ノ目裏1-1

本報告書は中性紙を使用しています。